放課後

葉月　蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後

【Ｎコード】

Ｎ２４９８Ｉ

【作者名】

葉月　蘭

【あらすじ】

私立桔梗学園高等部一年の一条瑠璃は一学期の終業式の日、運命の人と出逢う。

一つ年上の柊木暁。だが、第一印象は最悪だった。暁の友人、楠城崇臣に一目惚れする瑠璃。

少しずつ変化する学園生活の中で、瑠璃の恋はどこへ向かうのか―

＊＊＊ユニーク一万突破！！！アルファポリス主催・第三回恋愛小説大賞への応援ありがとうございました。（平伏）

プロローグ

少女は言った。
『第一印象は最悪だった』　と。

少年は笑った。
『運命だと思った』　恥ずかしくて言えなかった。

あの日、
世界には、
少女と少年のふたりしかいなかった。

梅雨が明けて、
夏が来る少し前、
少年は少女を見つけた。

少女はただ少年を見つめていた。
それだけで十分だった。

永遠に幸せな時間が流れるように願った。
そのために、
少年は少女に何をしてあげられるだろう…と。

無力な少年は、
少女が望むなら、
世界を敵にまわしてもかまわないと強く思った。

すべては少女のために――……

プロローグ（後書き）

作品を読んでいただき誠にありがとうございます。
感想・コメントなど頂けると励みになります。誤字・脱字報告もお待ちしております。

【第一章】運命の出逢い　（一）窓の向こう

暑い――――…

まだ午前中だというのに、太陽は容赦なく照りつけ反射した光が眩しい。夏の到来を告げる空気が憎らしく、木陰を見つけてその下を歩く。

梅雨が明けたと宣言こそされていないが、雨らしい雨が降っていないのだから実質もう梅雨明けと言っても間違いではないだろう。夏が近づいているのは明らかだ。

どこまでも広がる青空の下、私、一条瑠璃（いちじょうるり）は三十分遅れで校門の中へ入る。

（失敗だな――――…）

ちょっと後悔しながら中央塔ホールへと向かう。

そこは普段より静けさが増していた。私の息遣いが、天井や窓ガラスで跳ね返り響き渡りそうなほどに。ホールから階段を上がるが誰にも会わない。遅刻しているから当然と言えば当然か。

中央塔から見える中庭も、渡り廊下から見えるグランドにも人影はない。それどころか、教室の前を通っても物音ひとつしない。どこもかしこも静まりかえり、まるで時間が止まっているかのような錯覚すら覚える。

その中で、私の制服からチラチラと顔を出すケータイから鈴の音がチリンッと小さく響く。聞こえてくるのはその音と私の足音だけ。外では蝉がうるさくわめいていたが、中に入ってしまえば騒々しい音は耳に入らない。

カタンッ
教室の扉を開け、中を見渡す。

（誰もいない――――）

それもそのはずだ。

今日は一学期最後の日。
今ごろ生徒たちは講堂で、校長だか教頭だかのくだらない話を聞かされている頃だろう。終業式なんて意味があるのだろうか。きっとほとんどの生徒は退屈しながら時間がすぎるのを待っているはずだ。

ここ、私立桔梗学園は旧家や資産家の御曹司、そしてご令嬢たちが多く通うエスカレータ式の巨大学園だ。大半の生徒が幼稚舎から入学し大学部までをここで過ごす。中には途中で海外留学をする者や他の大学へ進む者もいるがそう多くはない。皆、決められたレールを歩く人生を与えられた者ばかりだ。
この春、高等部に進学した私も兄や姉と同じように幼稚舎からこの学園にいる。だが、あまり愛着はない。

自分の席にかばんを置き、外が見渡せる窓側まで行き手をかける。窓は防犯のため大きく空かない仕様になっている。日差しがいくらか和らげられた窓からふと正面の校舎に目をやると、誰もいないはずの向こう側から視線を感じた。
そのとき、目が合った。

（……誰？）

その人影にうっすらと光が当たり、シルエットがはっきりと見えてくる。

彼は遠目に見えても目立つほどの茶色い髪―いや、ブロンズと言ってもいいほど輝く髪―に、端正な顔立ちでまるで雑誌から出てきたモデルのような風貌だ。絵本から出てきた王子様、と言っても言い過ぎではないほどに。

正面の校舎は高等部二年の中央校舎だ。ということは、窓の向こうに立っている生徒は二年生。面識はない。彼は視線をそらさず、じっとこちらを見ている。だが、見覚えのない顔は誰だかわからない。

同級生でも見覚えのない顔がかなりいるのに、上級生まで興味がない。私の感覚が特殊なのかもしれないけれど。だから「誰」という問いは愚問だ、答えが出るはずもない。

（終業式をサボってる生徒が他にもいるんだな…）

彼はニッコリと微笑んでこちらを見ていたが、私はクルッと背中を向け彼の視線から逃れた。そのまま振り返ることはしなかったので、いつまであの場所にいたかわからないが、しばらくは背中越しに視線を感じていた。

知らない人に微笑み返すほど、私は愛想良くない。

子供の頃からずっと不器用なほど、人付き合いが苦手だった。人見知りするわけではないが、関わり合いを持つのがめんどくさくて、気がつけばひとりでいることのほうが多かった。

だからかもしれない。
窓の向こうで微笑んでいる彼の印象が良くなかったのは。

（なんか、チャラチャラした軽そうな男…でも、クラスの女子は、世間一般には受けがいいんだろな…）

人の第一印象は見た目が九割と言うが、まさにその通りだ。私の彼に対する第一印象は最悪だった。
それが、運命を左右する柊木暁（ひいらぎしょう）と知るのはもう少し先の話だ。

【第一章】運命の出逢い　（二）波打つ鼓動

窓側の一番後ろの席は、お気に入りの場所だ。静かな教室の中でそこに座ると、一段と落ち着く。ぼんやりと何も考えずに過ごすにはもってこいの場所だ。

窓から下を見下ろすと中庭が見える。

いつもは中央校舎一階の生徒用食堂からテーブルとイスが出されていて、カフェテリアのようになっている。昼休みともなれば多くの生徒で賑わい、教室まで声が届きそうなほどだ。

だが、今日は何もなくいつもより広く感じられる。その中庭を見渡した後、中央校舎に視線を合わせたがもう誰もいない。いつの間にか彼の姿は消えていた。

（まだ終業式、終わらないのかな……）

待っている時間が長すぎて、静かな教室はまるで揺り籠のように心地よく私の眠りを呼び起こす。窓越しに射す光さえ中和されて私を夢の中へ誘(いざな)う。

（…なんだか眠い――――）

時間が進まない静寂の中、私はいつの間にか眠っていたようだ。

扉の向こう、廊下側でザワザワと物音と声が聞こえてきて、夢の世界から引き戻された。ぼんやりとした風景の中、私に近づく人影が見えて我に返った。

終業式が終わったのだ。
私に近づいたその人物は、目の前の席に座りこちらをじっと見つめている。そんな彼女に軽く手を上げ「おはよ」と短く挨拶する。
「瑠璃、いつ来たの？　…っていうか、来てたのね」
「んー…、三十分くらい遅刻した」
「相変わらずね。終業式まで遅刻してくるなんて思ってもみなかったわ」
「…それ、嫌味？」
「そんなことないわ、ずっと待ってたのよ」
この瞳にじっと見つめられると、思わずそらしたくなるのは私だけだろうか。吸い込まれそうになるのが嫌で、まともに顔が見れない。
「来てるんだったら、講堂に来ればよかったのに」
「めんどくさい」
「うふふ、まぁそこが瑠璃らしいわね？」
クスクスと笑いながら、甘ったるい―いや、女らしいというべきか―話し方をする彼女は高等部の進学式以来、何かと私の傍を離れない赤嶺美桜（あかみねみお）だ。
彼女は学園内にいる一部の「高等部入学組み」だ。にも関わらずA組（エリート）なのだからかなり優秀な頭脳の持ち主だ。その外見からは想像がつかないが。
クルクルとカールした長い髪に、大きな黒い瞳を持つ彼女はまるでフランス人形のように美しい姿をしていて、学園内のどこにいても目立つ。
人付き合いが苦手な私が、唯一話せるクラスメイト。誰もが私を避け、壁を作るのに彼女だけは違っていた。

美桜と初めて出会ったのは、今から半年ほど前になる。高等部進学式の前―制服や教材を取りに来る日―中等部の敷地内で迷子の彼女に私は声をかけたのだ。自分でも意外な行動だった。

＊＊＊

『どうかしました？』

学園の見取り図と睨めっこしている彼女は、私の顔を不安そうに見ていた。

『あ、あの。高等部の中央塔へ行きたいんです』

その時、迷子になったんだなと察知した。

『あぁ、だったらここじゃなくて。この石畳を東へずっと歩いてください。しばらく歩くと礼拝堂が見えます。その先を北へ行くと講堂がありますので、そこに大きな街路樹があります。そこを抜けると高等部ですよ。中央の噴水に面して中央塔が建っていますのでわかると思いますよ』

彼女が高等部入学組だと言うことは一目瞭然だ。でなければこんなところで迷子にはならないのだから。

『あ、ありがとうございます』

『よろしければ、ご一緒しますよ？』

『い…いえ、大丈夫です』

とても大丈夫そうではなかったが、そのまま彼女のことを見送った。

＊＊＊

進学式の日、同じクラスに彼女がいてビックリしたのを覚えている。しかも私の目の前の席に座っていたのだから。彼女のほうから

自己紹介されたが、そっけない返事をしてしまった。気を悪くしただろうと思ったが、教室を出た私を図書館まで追ってきてお礼を言ってきたのだ。

自分があの時のことを覚えているのも不思議だったし、彼女も覚えていたのだから正直驚いた。それが可笑しくて思わず吹き出してしまったが、彼女はキョトンとしていた。

あの時の私は本心で彼女に向き合っていた気がする。

あの日から彼女は私の友人になった。何度か家に遊びに来たこともあるが、その光景を見て姉さんは驚いていたのだから、いかに友人がいなかったか実感できる。

そんなお人形のような彼女は、入学以来かなり多くの男子生徒から告白されているにも関わらず、未だ彼氏らしい人がいないのはある先輩のせいらしい。

「瑠璃、今日は付き合ってくれるでしょ？」
「ん？　うん。そのつもりだけど」
「ありがとう。なんだかんだ言って、やっぱり優しいのね」
「そうじゃない……約束したから、それだけ」
「素直じゃないのね。それでも、嬉しいわ」
お手上げポーズで「はぁ」と溜め息混じりに言ったが、彼女には伝わらなかったようだ。

そう――――

今日は彼女との約束があったから登校してきたのだ。そうでなければ、終業式のためだけに遅刻してまでわざわざ来たりしない。

まったくあんな約束するんじゃなかったと後悔するが、今さら遅い。

一学期末試験で次席を取ることができれば「あること」に付き合って欲しいと言われた。その時は軽い気持ちで了承した。中間試験

のときに美桜が次席を取っていることを知っていれば断っていただろう。
期末試験の結果が貼りだされたとき、案の定次席には彼女の名前がはっきりと記されてあった。

担任が教壇につき、形だけのホームルームを済ませると生徒は一斉に廊下へと流れ出す。誰もが明日からの夏休みを心待ちにしているのだ。
ほとんどの生徒は蒸し暑い日本で過ごすよりも避暑地とも呼べる海外の別荘へと移動する。
生徒がいなくなった教室には私と美桜だけが残った。彼女の様子はソワソワとしていて、どことなく落ち着きがない。

「はぁー、やっぱり緊張してきちゃった」
「…それ、毎回言ってない？」
「何回見てもドキドキするのよ。しかも明日から夏休みで、当分見れないんだもの。瑠璃にはこの気持ちがわからないのね」

嬉しそうにはしゃぐ彼女には悪いが、私にとってはまったく無関心なことだ。別々の顔で教室を出て、廊下の向こう側の中央塔前を横切る。
中央校舎一階廊下の突き当りを抜けると、目的の場所までは目と鼻の先だ。目の前に広がる光景は一種異様な雰囲気が漂っていた。

（やっぱり苦手だな……）

私にとっては居心地の悪い場所でしかない。
甲高い声が響き、女子ばかりの人だかりが前に進むことを阻むか

のように壁を作っている。彼女は一歩前に行きたそうだが、到底無理なように見える。
彼女は不満そうな顔をして私の元へと戻ってきた。諦めたのかと思ったがそうではないらしい。そういう表情をしている。

「やっぱり、ここからじゃ見えないわ」
「これだけ人がいればね」
「のんびりしすぎたわ。ちょっと来るのが遅かったみたい」
「帰る？」
「まだ帰らないわ」

階段式のギャラリー席は溢れんばかりに人が密集していて、すでに満員御礼状態だ。それなのにまだ帰らないとは…どうするつもりだろう。
そう思っていると不意に手を引かれた。

「仕方ないわ。こうなったら反対側に行くわ」
「え？　いや…ひとりで行っておいでよ」
「やだ、一緒に来て」

強引に手を引かれ体制を崩しそうになるが、なんとか耐えて足を取られずに済んだ。
反対側のギャラリー席は幾分人が少なめだ。いや、あくまで正面と比べての話だが。ここも、もうしばらくすれば立ち入ることができなくなるほど人が集まるだろう。
それなりの場所に落ち着くと嬉しそうな声で「かっこいい」と連呼し出した。
まわりの子女たちも同じような台詞を吐いている。その顔はまるで初めて玩具を買って貰ったような子供のような笑顔で、瞳をキラキラと輝かせている。私だけがこの場の雰囲気に慣れず浮いている

気がした。
慣れない歓声の中「はぁ」と大きな溜め息をひとつ吐いて、彼女たちが見ている視線の先を追いかける。その先には三人の男子生徒の姿が見える。

（あの中に、美桜の憧れの人がいるのか…）

そう、最初はぼんやりと眺めていた。
何にも興味がなかったのに、私は初めて強烈な「何か」を感じ取った。
私はたったひとりの姿を捉えて、目をそらすことができなかった。

（……何？）

熱い「何か」が冷えた躰のを全身を通り抜け、すべてを溶かしていくような感覚に囚われた。

ドクンッ――――…

私の中の鼓動が大きく波打つのを感じずにはいられなかった――

【第一章】運命の出逢い　（三）衝撃と余韻

私は言葉を出すことも、視線をそらすこともできなくなっていた。まるで雷が落ちたかのように、その場から動けなくなっていた。ただぼんやりと目の前で繰り広げられる動作を捉えていた。

弓に矢がかけられる。ピンッと張られた弦から指が離れると、矢はまっすぐに飛んでいく。解き放たれた矢は、その先にある的に当たると小刻みに揺れながら、やがて静かに羽の音を消す。

静から動へ、そしてまた静へ――――

すべては一瞬の出来事だ。

道場の中央に立つ三人は、順番に秩序を守りながら弓を引いていた。それはもう美しいと言えるほどに。四本の矢を打ち終わると、下級生らしき部員が的の傍から出てきて、丁寧にすべての矢を引き抜く。そして人がいなくなるのを確認すると、三人は新しい矢を持って中央に立ち、再び構える。

（さすがに、綺麗だな…）

私と美桜は彼らの姿を背中側のギャラリー席から見ていた。そのため彼らの横顔と後姿しか見ることができない。それでも彼女は満足そうな表情を浮かべている。

いや、彼女だけではない。この場にいるすべての子女たちが、彼らの姿に見惚れそのひと時に酔いしれている。

まるで何かの魔法にかかったかのように。

そして彼女たちは何度も何度も同じ台詞を吐く。

「やっぱり、かっこいいわ」

「満足した？」
「まだ足りないくらいだけどね？　まぁ仕方ないわ」
「だったらいつものメンバーと来れば良かったのに」
彼女は入学以来、彼らの親衛隊―ファンクラブとも言うべきか―とほぼ毎日のように見に来ているらしい。まったくご苦労なことだ。
「そうだけど…今日は瑠璃にも見て欲しかったのよ」
「…興味ない」
そう言いながら、中央の人物から視線をそらした。見ていることを彼女に知られたくないと思うのは、今までにない感情だからだろうか。

「弓道にも？」
「部活には興味ない」
「部…じゃなくて、弓道よ？　そう言えば、ここに来るのは初めてだったわね？弓道部があるのを知ってたでしょ？　てっきり入部すると思っていたのに…意外だったわ」
「だから、部活には興味ない」
「本当に人が嫌いなのね？　そこまでとは思っていなかったわ」
「…めんどくさい」
「相変わらずなんだから」
彼女が中央に視線を移したので、つられて見てしまう。

人と付き合うのは苦手だ。そんな私が部活動なんて向いているわけもなく、ここに弓道部があることは知っていて、一度立ち寄ってはみたがその気になれず、踵を返して校舎に向かった。だから、美桜が知らないだけで「初めて」ではない。
初めてここに来たとき人の多さに驚いた。最初は入部希望者かと思ったが、そのほとんどは純粋に弓道をしたい連中ではなく、親衛隊（ミー）の子女たちだった。
そんな光景に嫌気をさし、すっかり意気消沈して帰った記憶があ

る。

それに、別に学園内でなくても弓道はできる。

元々父の薦めで子供のころに始めた。兄や姉は柔道や剣道といった武術を会得していたが、どうにも体を動かすことが苦手なようでどれも長続きしなった。躾に厳しい父はそれでも何か習わせたかったらしく、選んだのが弓道であり珍しく続けることができた。

これなら礼儀作法を会得できるし、かといって激しい運動量は必要としない。私にとっては一石二鳥だったのだ。もちろん自宅敷地内に道場があるため煩わしい人付き合いをしなくていいことも要因のひとつだろう。

「瑠璃が入部してくれてたら、一緒に入ろうと思ってたのに」

「入ればいいじゃん」

「いやよ、弓道なんてしたことないもの。瑠璃と一緒だったら心強いでしょ？　毎日見れると思ってたのに、残念だわ。親衛隊なんて結局遠くから見てるだけなのよ」

「残念だったね」

「…やっぱり入部する気はないのね？」

「ない」

隣で美桜が溜め息をつくのが聞こえたが、聞こえないふりをした。

彼女の憧れの先輩が弓道部にいると聞かされた時、入部していなくてよかったと胸を撫で下ろした。もし入っていれば毎日離れなかっただろう。決して嫌いなわけではないが、毎日付き纏われるのは勘弁してもらいたい。

ひとりの時間が減るのは困る。

何故あんな約束を取り付けたのか…美桜の思惑に気がついた。私を入部させ自分も、と考えていたらしい。自分が憧れの人に近づくための手段として取り込もうと、わざわざ連れて来たのだ。

つい先ほどまで、私にはまったく関係ない世界だと思っていた。

なのに…

ただひとりの姿を捉えて、私の心は揺れていた。

すらりと伸びた手足に黒い髪、袴の間から時折見える透き通るような白い肌。長身の彼から放たれるある種の香り、そして真剣な表情と中世的なオーラを放つ、他のふたりとは雰囲気が違う。

ここに来てしまったことを後悔するほどに、焼きついて離れない。

「ねぇ、美桜」

「ん？　何？」

「あの…一番背の高い人、誰？　美桜の憧れの人？」

「違うわよ。あの人は楠城（くすのき）先輩よ」

自分でもこんなことが気になるなんて意外だった。

私の質問に疑問を持たなかったのか、彼女はそ知らぬ顔をして夢中で中の人物を見ている。気づかれなかったのは幸いだ。

（このままずっと見ていたい――――…）

それは私の生まれて初めての感情だった。

やがて三人は弓と矢を置き、奥の部屋へと入ろうとしていた。休憩室のようになっているのだろう。よく見ると、楠城先輩に話し掛けているのは生徒会の柳原昂（やなぎはらすばる）だ。確かにかなり有名人ではあるが、

親衛隊ができるほどとは知らなかった。
ふたりは話しながら奥へと消えていった。
すると周りの子女たちが溜め息をつきながら、しかし満足そうな表情でその場を去ろうとしている。わかり易い、あのふたりの親衛隊組なのだろう。しかしまだ大半の生徒が残っている。ということは、後は全員同じ親衛隊と言うわけだ。
いや、数が多すぎるだろう…

美桜に話しかけようとしたとき、誰かの視線に気がついた。それは道場の中から感じる。
ひとり残った「彼」がこちらを見ているのだ。

よく見るとその顔には見覚えがあった。
つい数時間前、窓の向こうの中央校舎で微笑んでいた、あのモデル顔だ。その彼がギャラリー席に向かって軽く手を上げ微笑んだ。

「「「キャ――――――――――！！！　柊木せんぱ――――――――い！！！」」」

地面が揺れるかと思うほどの大歓声で、耳を刺激された。親衛隊（ギャラリー）たちが一斉に騒ぎ出したためだ。ふと見ると美桜も同じ反応で手を振っていた。
やはり世間一般には受けの良い顔なのだ。
――――正直私は気に入らないが。
最後に残った彼の姿が見えなくなると、ゾロゾロと列を成して帰り始めた。美桜の顔を見ると、満足そうな表情でまだ余韻に浸っている。

「瑠璃、今日はありがとね。また来てくれる？」
「…どうかな」
「うふふ、あたしが頼めば来てくれるわよね？　だって瑠璃は優しいもの」
「さぁ？」
「まぁ、次のことはいいわ」
「いいの？」
「いいの。どうせ一ヶ月以上も先のことよ、先のことはわからないわ」
道場を後にし、中央校舎の廊下を歩いていた。

その後も美桜は彼のことを嬉しそうな顔で話していた。でもその半分も私の頭には入ってこなかったけれど。珍しく自分のことで頭がいっぱいだった。
私は楠城先輩のことをずっと考えていたんだと思う。
彼の弓矢を手にした姿が、脳裏に焼き付いて離れることはなかった。

（楠城先輩……）

そればかり気になって、何度も何度も心の中で叫び続けた———

【第二章】初恋は突然に　（一）優しい笑顔

ミーン――――…

真夏の空の下、どこからともなく蝉の騒ぐ声が聞こえてくる。今日も雲ひとつない青い空に太陽の光だけが反射して、どこまでも澄み渡っていた。

強すぎる太陽は嫌いだ。私の肌をジリジリと焦がすように照りつる。日陰を探しその下へ身を隠すと幾分か楽になる。

もう少し早ければ、太陽もあんなに照りつけてはいなかったかも。

そう後悔しながら、夏休みの学園内を歩いていた。

校門をくぐり、いつもなら中央塔から校舎へと向かうが今日は反対方向へと足を運ぶ。礼拝堂の前を通り過ぎ、石畳を歩くと目的の場所へと到着する。

ちょうど中等部と高等部の中間に建っている。

三階建てのレンガ造りの建物は、ずいぶん歴史があるように見える。とても学園内にあるとは思えないほどの施設で、おそらくは市内にある同じ施設より大規模だと思われる。

「図書館」という名前がついているこの施設は、中等部と高等部の生徒が使用できるようになっている。そのため、何百人と収容できる施設になり、このような巨大な建物になったというわけだ。

慣れない中等部の学生何人かが、毎年迷子―正確には必要な本の場所に辿り着けない―になるというのだから、本を管理している部署にはよほど優秀な人材が揃っているのだろう。

私は中等部に進学する前から、長い時間をここで過ごした記憶がある。さすがにすべての本の場所までは覚えていないが、少なくとも迷子になるようなことはない。

今年の夏休みは海外の別荘へ行く予定がないため、しばらくはここで過ごすことが多くなりそうだ。
決して、家にいるのが嫌という訳ではない。
人の出入りが多い自宅より、誰もいない図書館のほうが居心地がいいのだ。

そう。
誰もいない――――
はずだった。

重厚な図書館の扉を開け絨毯の上を静かに歩く。受付で学生証をかざし、個室の鍵を受け取った。そして、本が密集している一階奥へと進み興味のある本を何冊かピックアップする。
一階中央の吹き抜けホールへ本を運び、係に渡す。ここで貸出の許可をもらうことはもちろん、あとで個室に持ってきてもらうためでもある。個室は三階にあり、とても何冊もある本を自分で運べる距離ではなかった。また本を傷つけないためにも係がいるというわけだ。そのため、こうやって預けておくシステムがある。これならば量を気にすることなく選ぶことができる。
十冊に達した頃だったか。
貸出証明書にサインをして、中央ホールのソファに腰かけた。

その時だった。

私の正面で同じようにサインしている姿を捉えた。いつもならそんなことは気にならない。誰にも挨拶することなく、三階へ向かうだろう。
だが、今日は目が離せない。
彼はそんな私の視線に気がついたのか、気配を感じ取ったのか、サインをした後ゆっくり私に近づいてきた。

「こんにちは」
そう言って微笑んでいるのは、まぎれもなく楠城先輩だった。
「こ、こんにちは――――」
突然の出来事に、思わず声が裏返る。かろうじて座っていたソファから身を起こし、ペコッと頭を下げたがどう考えても失礼な挨拶の仕方だ。父が見ていたら後で説教されることは間違いなしだ。
そんな私に続けて声をかけてきた。
「君…一年の一条瑠璃さん？」
「――――？　はい、そうですけど」
私の顔は相当間抜け面だったことだろう。キョトンとしていると彼は片手を胸の前に当て頭を下げて―英国紳士を思わせるような仕草で―ニッコリ微笑んだ。
「あぁ、初めまして。僕は二年の楠城崇臣（くすのきたかおみ）です。先に名乗らず失礼しました」
「…いえ」
「勉強熱心なんだね」
「そういうわけでは…」
「なかなか興味深い本を借りているからね」
私が預けた本の山に視線を向けた。綺麗な声で優しい話し方をする彼の姿に吸い込まれそうだった。どうしていいのかわからず、立ったまま見惚れていた。
「立っていないで、どうぞ」
彼に促され再びソファに座る。すると彼は正面のソファに腰かけた。
私はすべての本を係に預けてしまったが、彼は一冊だけ大事に抱えていた。ソファに座るとその本を開き足を組んだ格好で文字に視線を落とした。

立ち上がることも話しかけることもできず、ただソワソワと落ち着きなくその場に居座った。

「――特待生の勉強の邪魔しちゃったかな？」

「…え？」

座ったまま何もしない私に、彼は優しい笑みをこぼしながら話しかけてきた。さすがに不自然だったのだろう。何をするわけでもなく、ただ彼の姿をじっと見ていたのだから。

「…いえ、そんなことは」

「君はいつも、そんな風に人のことをじっと見るの？」

「そんなことない、です…」

「何か本でも持っておいでよ。それとも上に行くのかな？」

（あれ…？　どうして私が特待生って知っているんだ…？）

ふと、疑問に思ったが私の口から出た言葉は別の台詞だった。

「あの、先輩はずっとここに…？」

「ん？　いや、つい先ほどまで上にいたけど気分転換、ってところかな」

「上って…」

「個室は静かでいいけど、こんな人の少ない時くらいホールもいいんじゃないかと、そう思ってね。開放的でリラックスできるよ」

予想外の返答だった。

図書館三階はすべて個室になっている。使用できるのは特待生試験に合格した者だけだ。一般生徒は一階中央ホールかニ階のラウンジで過ごしている。もちろん貸出は学園内だけではないから、許可証にサインをして自宅に帰る学生も多い。

特待生の個室は個々に与えられているから、実質自分の部屋だ。

中等部の頃から使用しいるにも関わらず私は三階で人に出会った記憶がない。ただ単に、他人に興味がない私はそこに出入りしている人に、今まで気がつかなかっただけなのだろうけど。

（だから、私の顔を見てすぐに名前が…？）

個室の扉には個人名の名札がついている。だが、私はすぐ隣の個室使用者の名前すら出てこない。もしかしたら彼かもしれないというのに。

その後も彼はしばらく本を読んでいた。私も手近なところから一冊取り出し開いていたが、内容などまったく頭に入ってこない。ただ、目の前にいる彼の姿しか映らなかった。

壁に立てかけてある大きな時計が十一時を指し、ボーンと低音を響かせた。

「さて、僕はそろそろ失礼するよ」

そう言って彼は手元の本を閉じた。

「…あの」

続きを言おうとした瞬間、彼の言葉と重なった。

「君は相変わらず朝が苦手なんだね」

「…え？」

「本を読むなら、もっと早い時間をお奨めするよ」

その台詞を聞いた途端、私は赤面した。

朝は苦手だ、確かに。よりにもよってそれを彼に見られていたなんて、情けない。

（それって、印象悪くない？）

そんな私の想いをよそに、彼は持っていた本を中央ホールの係に渡し、扉へと向かっていた。彼の後を追うようにソファから立ち上がったが、どうしていいのかわからない。とりあえず話しかけようとするが、うまく言葉が出てこない。

それでもこのまま彼を行かせることはできない。せっかくの出会いが台無しになってしまう。勇気を振り絞り彼の後姿に声をかけた。

「あ、あの…先輩」

彼はゆっくりと振り返り私を見る。

「――この後はどちらに…？」

「今から道場に行くつもりだよ。親友ふたりが待っているからね」

微笑みながら答えると、軽く手を上げ扉に手をかけた。

（あぁ、行ってしまう――――…）

そう思った瞬間、自分でも信じられないくらいはっきりとした台詞を吐いた。

「あの、一緒に行ってもいいですか？」

彼は扉を開け、私に優しい笑顔と温かい手を差し出し光の中へ誘った。

私は吸い込まれるように、その光の中に身を投じた。

この時確実に、私は恋に落ちた――――

【第二章】初恋は突然に　（二）思い出の日

図書館から道場まではかなり距離がある。私の歩く速度だとかなり時間がかかるだろう。そう思いながら石畳の上を歩いていた。
人影の少ない学園内は、いつもに増して静けさが漂っていた。ふたりの歩く靴音だけがコツコツと響いている。彼の後ろを歩きながら、ふと先ほどの台詞が気になった。

（親友ふたりって、やっぱり「あのふたり」だよね…）

ひとりはよく知らないが、もうひとりは子供の頃から知っている。と、いっても最近は疎遠になっているため「知っている」うちに入らないかもしれないが。
このまま黙ったまま後をついていくのもどうかと思い、彼に聞いてみることにした。
「あの、先輩？」
「何？」
「昂さ…先輩とは、仲が良いですね」
「…へぇ」

（へぇ、って何ですか？）

「昂のことは名前で呼ぶんだね」
「え？まぁ」
「ふーん、そうなんだ…」

今さら苗字で呼ぶほうが違和感がある。それでなくても「先輩」の言葉を足すだけでも可笑しいというのに。普段は「昂さん」と呼んでいるのだから。

「そうだね、昂とは中等部に進学する前からの付き合いなんだよ」
「そうなんですか」
「うん。昂っておもしろいよね」
「え？　えーっと…」
「あぁ、今のは僕の印象だから気にしないで」
昔のことを思い出しているのだろうか、遠くを見るような表情が何かを懐かしんでいるように見えた。何か聞いてはいけないことだったのかと思ったが、すぐに笑顔が戻ったのでそうでもないようだ。

「なんだか意外です。てっきり幼なじみかと思ってました」
「そう？　昂の幼なじみは暁だよ」
「…暁？」
「あぁ、柊木暁。聞いたことない？」
「えーっと…」

（聞いたことあるような、ないような…）

それが美桜の憧れである人だと思い出すのにはしばらく時間がかかった。昂さんの幼なじみが柊木先輩だということを初めて知った。だが、興味はすぐに失せた。

「その、初等部の頃は仲良くなかったんですか？」
「そうだね、僕は誰とも仲良くなんてなかったからね」
「…そうなんですか」

「うん、あれはね…僕が特待生希望を出した、初等部六年の冬だったんだ――――」
そう言いながら彼は自分と昂さんの出会いを語ってくれた。

＊＊＊

僕は特待生試験を受けると決めて、クラスメイトに「応援しているよ」と言われても何も感じなかった。元々試験を受けようと思ったのも、授業がつまらないからという理由だったし。僕の知っていることを繰り返し羅列する担任の授業もつまらない、の一言だ。
初等部の頃は個室が与えられないから、人気（ひとけ）のない場所を探して、図書館の隅のほうで静かに勉強していた。そんなとき、僕に話しかけてきたんだ。

「やぁ、楠城君。試験勉強ははかどってる？」
「あぁ、順調だよ」
内心では鬱陶しいと思いながら笑顔で軽くあしらった。すると彼の口から予期していない台詞が出た。
「実は、僕も特待生試験を受けるんだ。よろしく」
その時、僕は自分の耳を疑ったよ。試験を受けるのは自分だけだと思っていたから。
「…そうなんだ、じゃあライバルだね。どうぞお手柔らかに」
「こちらこそ」
そう言って握手を求めてきたのが昂だった。

もちろん僕に勝算はあった。
基礎問題集・応用問題集を解く基本試験で負けるとは思っていなかったし、重要となる論文にも抜かりはなかった。
どう考えても僕のほうが優位にたっていたのは一目瞭然なのに、彼は宣戦布告してきた。

学年末試験で、昂が次席を取った時は正直焦ったよ。
「点数差はあきらかだよ」と言われたが、気を抜けば足元をすくわれる――――
そんな危機感すら覚えた。
僕はどうしても試験に受からなければならなかったから、気がつけばかなりプレッシャーを感じていた。まわりの目も当然だが、家に帰ると父や兄たちから「試験を受けるなら主席・合格」だと言われ続け失敗することは許されなかったのだ。
そんな中、勉強していても頭に浮かぶのは昂の余裕そうな表情だった。何を考えているのか、何を企んでいるのか…そのころ、人を信じることをしなかった僕にとってはそんなことしか思い浮かばなかった。

試験当日は異様な雰囲気に呑み込まれていた。先輩方が来ていることも理由の一つだったが、当日になっても余裕の姿を見せる昂に僕のプレッシャーは限界まで達していた。
そのためだろう。不覚にも基礎問題を落としてしまった。信じられなかった。
そんな僕を尻目に、昂は先輩方と戯れていた。
彼のそういうところが当時は嫌いだった。誰にでも好かれ、いつもいつもたくさんの人に囲まれ、笑っている彼のことが。僕にはない何かを持っている昂、妬ましかっただけかもしれない。

その後応用問題と論文で巻き返し、僕は晴れて特待生となった。
発表された時、心の中で「やった」と叫び彼の顔を見た。さぞ悔しい顔をしているだろうと思ったが、自分のことのように嬉しそうな表情で僕に抱きついた。
「おめでとう！！！」

「あ、あぁ」
僕は面食らった。逆の立場だったら到底真似できない行為だ。
「やっぱり君には敵わなかったなー。でも楽しかったよ」
「……」
「ねぇ、僕と友達になろうよ」
「…は？」
「僕は最初っから特待生になる気なんてなかったんだ。ただ君が立候補したって聞いて、近づくチャンスだと思ったんだよ。そうでもしないと、君はまともに話しすら聞いてくれないからなー」
「…僕は友達なんて、いらない」
「そうやって、世界を小さくするのはもったいないよ。人は結構おもしろいんだから。だから僕と一緒に行こう！！！」
そう言って手を差し出した昂は輝いて見えた。僕はもしかしたら、このとき救われたかもしれない。

＊＊＊

「で、このとき僕は昂のことを「おもしろい奴だな」って」
「そうだったんですか」
「それからからな、一緒にいるのは」
歩きながら話していたため、気がつけば中央塔まで来ていた。
ふたりの出会いの話を聞いて、「昂さんらしい」と思った。彼ならそうやって友達をどんどん増やしていくだろう。幼いころからそういう魅力を兼ね備えている。私も自分と対照的な彼の姿は何度か「羨ましい」と思ったことがある。
ただ、楠城先輩がつい何年か前まで人嫌いだったとは想像がつかない。
こんなに優しい、穏やかな笑顔を見せてくれるのに。

今目の前にいる彼は、本当の彼なんだろうか――

【第二章】初恋は突然に　（三）高鳴る鼓動

道場に着くと、彼は扉を開け中へと入っていった。

「おまたせ」

中を覗くと昂さんと柊木先輩の姿が見えた。それ以外の部員はいないようだが、活動はしていないのだろうか。

「よぉ、崇。遅かったな」

「うん、ちょっと図書館に行ってたからね」

「おぉー、優等生は言うことが違うね。なぁ暁、そう思うだろ？」

クスクスと笑いながら、昂さんが少年のような顔つきで見ている。

「生徒会の君に言われたくないよ？」

嫌味のない笑みをこぼしながら、楠城先輩が反論する。

「…俺から見れば、どっちもかわらねーよ」

ぶっきらぼうに答えたのが柊木先輩だった。

（あれ…？　なんか印象が違うんですけど…）

私は入り口付近で立ち止まり、中の様子を伺っていた。楠城先輩が完全に中に入ると、背後にいた私の姿に気がついたのか、中のふたりは「おやっ？」という表情に変わった。

「崇、その子は？」

昂さんは私だとわからなかったのか、立ち上がり近づいてきて顔を覗き込んだ。そして「あぁ」と一言洩らすとニコッと笑い、背中を向ける。

「あぁ、一年の一条瑠璃さんだよ」

「それは知ってる。ナンパしてきたのか？」

「まさか」
「だよなー。崇に限ってそりゃないかー」
「暁と一緒にしないでくれる？」
「あぁ？　俺だってナンパしねーよ」

三人はケラケラと笑いながら話している。本当に何でも言い合える仲のようだ。先ほどふたりの出会いの話を聞いていなければ、もっと前からの幼なじみだと思い込んでしまうほどだ。少し羨ましい気がするが、男女では付き合い方が違うかもしれない。少なくとも私の人付き合いとは違う。そもそも自分はそれ自体を望んでいないのだから比べるまでもないかもしれないが。
「図書館で会ったんだよ。連れてきちゃまずかったかな？」
「全然」
そう言って昂は顔の前でヒラヒラと手を振った。

会話に入るわけでもなく、立ったままその光景を見ていた。
「入っておいで」
昂さんが顔をこちらに向け軽く手を動かした。楠城先輩も頷いていて私は一歩前へ足を動かした。そのとき視界に入ってきた柊木先輩は、こちらを見るわけでもなく無愛想な表情のまま座っていた。

（あまり歓迎されてないな…）

そう思いながら靴を脱ぎ、中へ入った。
「失礼します」
中に入ってはみたものの、居場所のない私はなんとなく昂さんの隣に正座した。こういうとき、人は身近な人に近づくものだなと実感した。知っている、という感覚が落ち着くのだ。

道場の壁を見渡すと多くの賞状や写真が飾られている。古くから武道の名門校なのだから、当たり前と言えばそれまでだが。毎年国体出場を果たしていると聞いている。だが、だとすればこの人の少なさは説明がつかない。他の部は国体に向けて練習のはずだが、ここはやけに静かだ。

「あの…」

「何？」

「他の部員は…いないんですか？」

この質問に答えてくれたのは昂さんだった。

「今年は国体に出場できなかったからな。夏休みは活動休止にした。ほら、そこに貼ってあるだろ？」

視線の先の掲示板には「活動休止のお知らせ」と書いてある。なるほど、素直な部員が多いようだ。そんなことでは来年も出場できないのでは、と思うのは私だけか。

「こいつらのおかげで、集中できないからな」

「自分のことといれるの、忘れてない？」

「おー、言ってくれるね。まぁ、お互いさまか」

「そうそう」

「ま、一番の原因は暁だけど？」

「…俺のせいにすんなよ」

楠城先輩と昂さんの会話に入ってこない柊木先輩の反応は少し遅かった。おそらくは私がいることが気に入らないのだろう。先ほどまでとの態度の差は歴然だ。

（じゃあ、なぜここにいるんだ…？）

それは素朴な疑問だった。
夏休みにわざわざ部活もないのに学園に来る生徒は少ない。今でも学園内にいるのは国体出場が決まっている部員だけで、さほど有名でない部は同じく活動休止なのだろう。この時期は一年でもっとも人が少ない。
よほど暑苦しい日本の夏が嫌いなようだ。そういえば図書館も閑散としたものだった。
「昂さんたちは、どうしてここに？」
「ん？　暇だから…？」
「今年は海外に行かないんですか？」
「んー、どうかな？　行っても八月に入ってからかな」
「そうなんだ」
昂さんは毎年ロンドンの別荘へ行くはずだ。夏のロンドンは過ごしやすいから私も好きな場所だが人が多いのが難点だ。

「たまには静かな道場もいいよね」
「そうだなー、いつもうるさいからな」
「やっぱり、こういう雰囲気じゃないと集中できないよね」
「本来そうだからな」
いつもあんなに人が多い中で弓道をしているのか、そう思うと不思議だった。私ならできそうにない。まだまだ修行が足りないのか。それとも「慣れ」の問題なんだろうか。
チラッと視線を動かすと、会話に入らない柊木先輩は丁寧に弓と矢を手入れしていた。こちらには見向きもしない。

「瑠璃、最近弓道してる？」
「え？　あ、たまに」
不意に質問され妙な返事の仕方になってしまった。
「一条さん、できるんだ。…って昂どうして知ってるの？」
「ん？　だって俺、子供の頃から一条家で教えてもらってたからな」

「えー、初耳」
「あれ？　言ってなかったか？」
「弓道部に誘ったのは昂だったけど、それは聞いてないよ」
「そっか。まぁ、そういうことだ」
「あぁ、それで、お互い名前で呼んでるんだ」
「そう言われれば、そうだな」
柳原家と一条家は古くから付き合いがある、いわゆる旧家同士だ。家同士の交流も少なくない。
私が初等部で弓道を習い始めた頃、昂さんをはじめ多くの生徒が練習に来ていた。そのほとんどは今も同じ学園にいるはずだが、今も弓道を続けている人が果たして何人いるだろう。ここでなくてもできるわけだから人のことは言えたものじゃない。

「じゃあ、明日から道具持っておいでよ」
楠城先輩の予想外の提案に戸惑った。

（明日からずっと、先輩と一緒にいられる…？）

素直に嬉しいと思った。それが表情にも出ていたらしく、昂さんも「そうだな」と同様の反応だった。
「ほんとに、いいんですか？」
「いいよね？　昂」
「問題なし」

その言葉を聞いて胸の鼓動が高鳴るのを自分でも感じた。その会話を快く思わなかったのか、柊木先輩は相変わらずの無愛想な表情で立ち上がり、そのまま道場の外に出て行った。
だが、そんなことはまったく気にならなかった。

【第三章】揺れるふたり　（一）隠せぬ動揺

翌日から私の生活は百八十度変わった。
それはもう、姉さんたちが驚くほどに。
苦手だった朝も今では清々しい気持ちで迎えることができる。憂鬱だった姉さんたちとの朝食も平気になるのだから不思議なものだ。兄さんたちはともかく、勘のいい姉さんのことだ、何か気がついているかもしれないが聞かれるまで言うつもりはない。
私には兄が二人に姉が一人いて、四人兄妹だ。
両親は第一邸宅にいるため、朝食から夕食まで四人で摂ることが多い。そうはいっても二人の兄はとっくに社会人なので、夕食は外食することが多い。家の中で一番多く顔を見るといえば姉の菖蒲(あやめ)だ。

朝食後の紅茶を飲んでいると姉さんが話しかけてきた。
「瑠璃、今日も学校へ行くの？」
「うん。そのつもりだけど…何？」
「たまには姉さんと出かけない？」
「んー、また今度ね」
「冷たいんだから」
「だから、またね」
「そう言って、いつもはぐらかすんだから」
姉さんのことは嫌いではないが、趣味が合わない。彼女はどこからどう見ても良家の令嬢だ。品が良くて人当たりが良くて。妹の私から見ても嫌味がないほどに。

姉さんとの朝食を早々に切り上げ、自宅敷地内にある道場へと向かう。そこで自分の弓矢を包み、家を後にする。玄関を出るといつものように送迎用の車が止まっている。後部座席に乗り込むとゆっくりと門を出た。

普段は門の手前―と言っても学園敷地内ではあるが―で車を降り、校門へと歩いて向かうが、最近は暑さに負けて中まで車で送ってもらう。

停車した車を降り荷物を持っていつものように図書館へと足を運ぶ。午前中は個室で過ごし課題や読書をして時間をつぶす。

午後の鐘が鳴る頃、楠城先輩がいる道場へと向かうのだ。

昂さんと楠城先輩は私を快く受け入れ、楽しい時間を提供してくれた。相変わらず柊木先輩の態度は冷たかったが、あまり気にはならなかった。

夕方の鐘が鳴る頃には解散となり、私は再び門で待つ車に乗り家路に着く。昂さんたちも同じように車で帰っていった。

そんな日課のような日々が繰り返された八月初旬―

私はいつもと同じように道場へ向かっていた。八月に入ればそれぞれ海外に行くと言っていた気がするが、昨日も特に変わった様子がなかったので、きっとまだなのだろう。今日も同じように三人がいるはずだ。

そう信じて扉を開けると、中には柊木先輩がひとりで立っていた。

「あれ…？　柊木先輩、ひとりですか？」

「わるいかよ」

「…いえ、別に。珍しいなと」

彼は無愛想な返事をすると、すぐに目をそらし弓に手をかけていた。

私はとりあえず道場の一番奥まで行き、壁に弓矢を置いた後、的のある正面をみる位置で正座した。ここなら彼の視界に入らないはずだ。

彼の後姿を見ながら、ぼんやりと考え事をしていた。

（なんか、気まずい…）

私は未だに柊木先輩のことが苦手だ。昂さんは子供の頃からの付き合いなのでどんな人なのかよく知っている。楠城先輩はやっぱり思っていた通りの人で、優しくて温かい人だ。まだ話す時は緊張してうまく喋れない時もあるが、そんな時でも優しく対応してくれるので、同じ空間にいるだけで私は幸せだった。

だが――――

今目の前で弓を持つ彼は、私に話しかけることはおろか、笑うこともない。きっと嫌われているんだと思うが、私が一体何をしたというのだ。

（まるで別人だな…）

初めて見た時の印象は、軽そうな男…で。

二度目に見た時は、八方美人で愛想がいい…で。

三度目にあった時は、無愛想で最悪…で。

とても同じ人の印象とは思えない。そもそも第一印象というのはそうそう変わるものでもなく、彼に限りかなり特殊だと思われる。

四度目以降は何度会っても変わらないので、これから先も変わらないだろうと思う。

そこで私は何かを思い出した。

そう言えば、最初に見たとき彼は微笑んでいたような記憶がある。

私は背中を向けてしまったけど。

（ファンの子達には、あんなに愛想良く笑うのに…）

そう思った瞬間、だから冷たいのかと合点した。私が彼に興味がないから、愛想を振り撒く理由がないのだ。ということは、今の彼が本当の姿であって、あの笑顔は偽物ということか。

（なんだ、二重人格か）

私は「はぁ」と小さく溜息をついてしまった。幸い彼には聞こえなかったらしく、今も黙々と矢を射る。このふたりきりの時間が気まずくて、正面をじっと見たまま動けなかった。

そのうち彼も弓を置き、私と微妙な距離をとって座った。途端にすべての音が消え、静寂に包まれた空間に沈黙が続く。遠くのほうでかすかに聞こえる音が、かろうじて時間を進めていた。

「なぁ」

何か話さなければ、と考えていた時だっただけに反応が遅れた。

「…はい？」

「お前、崇のこと好きなんだろ？」

「はい？？？」

突然の質問に動揺を隠し切れず、後ろに置いてあった矢を豪快に倒してしまった。

「わかり易い奴…」

「きゅ、急に…な、何言うんですか！！！」

彼は表情を変えることなく私のことを見ていた。自分の顔が赤く

なっていくのがわかる。どうしてわかったのだろうと考えるが、答えは出ない。
「…どうして？」
「最初っからバレバレだろ」
「……」
「昂も気づいてるしな」
「も、もしかして…楠城先輩も…？」
赤くなった顔を両手で押さえながら言った。そんな私を面白がってか、フッと口元だけを緩め笑いながら言う。
「気づいてないの、本人くらいだろ」
「…よかった」
それを聞いて幾分かホッとした。

（そんなにわかり易い？　私…）

これはいくら考えてもわからなかった。
そもそもこれが初恋なのだから、どういう態度をとっていいのかわからない。ぎこちない自覚はあったがどこに差があるのか自分ではわからなかった。
本人に伝わっていないということだけは幸いだった。でなければ、これから顔を合わせにくい。いや、合わせられないかもしれない。
まだ自分の中でも芽生えたばかりの感情に驚き、うまく付き合えないのだから。

安堵の表情を浮かべている私に彼は追い討ちをかけた。
「つーかさ、崇はあきらめたほうが身のためだ」
「はい？」
「あれは、がんばるだけ無駄だ」

「…放っといてください」
そう言って彼に背中を向けた。
次の瞬間背後に気配を感じ、振り返る。目の前には彼の顔が近づいてきて、一瞬のうちに私の唇と重なっていた。

（…はい？）

目をぱちくりをさせたまま、これ以上ない俊敏な動きで私は離れた。
「な、何するん、ですか！！！」
「……なんとなく」

（なんとなくって…そんな理由でキス？）

「———っ！！！　サイテ———！！！」
そういい残し、その場を立ち去った。その時昂さんとすれ違った気がするが、そんなことに目もくれず走って出て行った。
予想外の出来事に私の頭は混乱していた———

【第三章】揺れるふたり　（二）戸惑う午後

車を降り玄関を開けると、騒々しい物音と話し声が響き渡っていた。
ホールは吹き抜けになっており、中央に階段がある。そのまわりを一周するように廊下が伸びている。そこを使用人が客を案内したりお茶を運んだりしていた。
すれ違う人と軽く挨拶を交わし自室に着いたのは、玄関を入ってずいぶん時間が経ってからだ。かなりの人に足止めをされた。
一体この家には何人の人がいるのだろう、そう思うほどに騒がしい。
音を遮断するかのように部屋の扉を閉めた。

（あぁ…うるさい）

思わず家に帰ってきたことを後悔した。
この日は特別人が多かった。朝出かける時からすでに何組もの客が入り浸り、使用人たちの足音が響いていた。理由は簡単だ。
一番上の兄・紫苑（しおん）が来月結婚式を挙げるのだ。
さすがに一条家の後継者とあって、来客も多い。兄さんも朝からスーツで出迎え、挨拶に走り回っていた。
扉は閉めていたものの、外の騒々しい音が聞こえてきそうで落ち着かない。かといって、部屋を出るとまた挨拶に足をとられるが、そんなことに構っていられない。幾分か時間はかかるが敷地内の道場へ向かうことにした。
四人の兄妹だけが住む第二邸宅から道場はかなり離れて建ってい

る。
さすがにここまでは人の声は届かない。木々で覆われた道場は他の音を拒む閉ざされた空間となっていた。
同じ敷地内とは思えないほどの静寂に包まれ、私を心地よい気分にさせてくれた。

（んー、気持ちいい…）

静けさの中に身を置いて、気分も落ち着いてきた。思い切り体を伸ばし、深呼吸する。そして、中央に正座した時あることに気がついた。

（あ、忘れてきた…）

そうだ。
弓と矢を置いてきたままだ。
勢い良く飛び出してきたために、そこまで気が回らなかった。そういえば車に乗った時に運転手が「お荷物は？」と聞いてきたが、何も言わず急かした気がする。いや、そのとき思い出しても取りに戻ったかはいささか不明だが。
だが、このまま取りに行かないわけにはいかない。

（まだ、いたら気まずいな…）

そう思うと気が重く、戻ることに迷いがでる。かといって日を改めるわけにもいかない。頭の中で同じ事が何度も繰り返されていた。
あれこれ思案していると、道場の入り口に人影が映った。気のせいかと思ったが、その人影は扉を開け中に入ってきた。
「あぁ、やっぱりここにいたわ」
「姉さん」
「探したわよ、瑠璃」
「…どうしたの？」
「あなたにお客さまよ」
見ると姉さんの後ろには昂さんが立っていた。予想外の訪問者だ。

「よぉ」
「ごめんなさいね、昂さん。この子ったらすぐにどこかへ行ってしまうから」
「いえいえ、突然お邪魔したのは僕ですから」
「じゃあ、ゆっくりしていってくださいね」
「ありがとうございます」
昂さんが頭を下げると、姉さんはニコッと笑顔を向け廊下に消えていった。わざわざ姉さんが案内するなど珍しいことだ。私の執事は何をしているのやら。

「菖蒲さん、相変わらず美人だな」
「…まぁ」
「さすがに人が多いな。来月だっけ？　紫苑さんの結婚式」
「…そうだけど」
昂さんが何をしに来たのかわからず戸惑っていた。紫苑兄さんのお祝いなら私には用はないはずだ。
「えーっと、昂さん…どうしてここに？」
すると「あぁ」と言って何かを思い出したような素振りを見せ、ポンッと手を叩く。そして背中の荷物をその場に降ろした。

「これ、忘れ物」
そう言いながら降ろされたのは私の弓矢だった。昂さんがわざわざ持ってきてくれるとは思っていなかったので正直驚いた。

「あ、ありがとう」
「うん、置いてあったからな。しばらく待ってたけど来なかったから、もしかして、と思って。でも置いてくなんて、珍しいこともあるよな…なんかあった？」
昂さんは少し意地悪な表情で聞いてきた。もしかしたら何か知っているかもしれない。たとえば柊木先輩から何か聞いたとか。まさか見ていた、なんてことはないと願いたい。
「な、なんでもない」
「そうか…ならいいんだ」
昂さんはそれ以上何も聞かなかったし、何も言わなかった。
すぐに帰るのかと思っていたが、昂さんはその場に座り黙ったまま どこかを見ていた。何か考え事をしているようにも見えたが、その表情からは何も読み取れなかった。

（気、使うんですけど…）

その空気の重さに耐え切れそうになかったが、居心地の悪さを感じながら座っていた。
「なぁ…」
そんな私の気持ちをよそに、昂さんは話しかけてきた。
「はい？」
「…瑠璃はさ、暁のことどう思ってんの？」
「……はい？？？」
昂さんの顔を見たが、目は合わなかった。突然の予想外の質問に

戸惑いは隠せなかった。てっきり柊木先輩と同じように、楠城先輩のことを言われると思っていたから、余計かもしれない。

「柊木…先輩ですか？」

どう答えるべきか迷っていた。彼がどういう趣旨で聞いてきたかわからないからだ。

言葉を選んでいるのがわかったのか、こちらを見て笑っていた。

「いや、深く考えるなよ。俺らと違ってあんまり喋らないだろ？だから嫌ってんのかと思って」

「別に、そんなことは。ただ――――」

「ただ？」

「苦手…っていうか」

昂さんは突然あははと大きな声で笑い出した。

「あぁ、ごめんごめん。暁のことそんな風に言う奴、少ないからさ」

「…そうなんだ」

「まぁ、確かに。他の子には愛想良いからな、あいつ」

「そうそう。嫌われてるのはこちじゃ――――」

すると笑っていたのをピタッと止め、真剣な表情で私を見た。

「そうじゃないんだ」

何が言いたいのか、理解できなかった。

ふたりの話し声が止まると、時間も止まったように静かになった。

【第三章】揺れるふたり　（三）意外な過去

私はよほど不思議な顔をしていたのだろう。昂さんは何事もなかったかのように、いつのも表情に戻っている。そんな彼に質問をぶつけてみた。

「ねぇ昂さん…柊木先輩とは幼なじみでしょ？」
「そうだけど、どうして知ってる？」
「あ、楠城先輩から聞いて」
「そうか。でもなんで？」
「いや、どういう人なのかと思って」
「そうだなー」

これは私が彼にはじめて会ったときからずっと疑問に思っていたことだ。三回も印象が変わったというのが気になる原因だったかもしれない。気にすることはないと思うが、あの態度が気に入らない。どちらかというと苦手なタイプだ。だが自分で探るには到底無理があった。あの表情から人格は追求できない。

「暁かぁ…一言では表せないな」
「…ふーん」
「俺も最初はわからなかったからな」
「……え？」
「あいつさ、俺が初等部に上がる前に越してきたんだ。だから、最初っから仲が良かったわけじゃあないんだな」
苦笑しながら言う彼の表情を見て過去に何かがあったのは一目瞭然だった。何かを思い出しているのだろう。しばらくして柊木先輩との思い出話をはじめた。

「俺が暁と出逢ったのは、まだ肌寒い三月だったよ――――」

＊＊＊

長い間空家になっていた近くの洋館に引っ越していた家族がいた。住人である夫人とその子供の暁はとても美しい姿をしていた。まるで絵本から出てきたように、この世のものとは思えないほどに。

でも、挨拶に来たあいつを見て人形みたいだと思った。

怖くて握手はできなかった。それでもあいつはニッコリと微笑んでいたけれど。

初等部の進学式に出席したとき、母親がモデル出身の有名デザイナーだと、まわりの大人たちが話していた。言われてみればテレビで観たことがある。

あいつはあっという間に人気者になった。あの容姿が人目を惹くのだと思う。誰にでも同じような笑顔を振り撒き、うまく世間を渡るようなその姿は、その年の少年らしからぬ姿だった。

一度クラスの女子達にあいつの魅力について聞いてみたことがある。

「紳士的でとても優しい方よ。誰にでも親切で素敵な方ね」

「とても神秘的な方ね。あのお姿が美しくて見惚れてしまうわ」

少年に対する誉め言葉としてはどうかと思ったが、予想通りの返答だった。

でも、何か違う気がして、本当のあいつの正体を知りたくなった。

あいつの家に行ったが、正面からぶつかってもいつもの笑顔ではぐらかされるのがオチだろう。そう思って、こっそり家の裏通りへまわった。

空家のころに何度か忍び込んで遊んだことがある。だから庭の塀に子供なら通れる垣根の隙間があることを知っていた。そこに身を潜めて中の様子を伺っていた。

しばらく待っていると、運良くあいつが現れた。こちらには気がついていないようで、そのままじっと見ていた。でも次の瞬間思わず声がでそうになって、口を押さえた。

（あいつが、泣いている…）

大粒の涙を流しながらその場に立ちすくんでいた。予想していなかった出来事に戸惑ったのか、立ち去ろうとした時に足が引っかかった。垣根の植物に足を取られガサッっと物音を立ててしまった。

「……誰！？」

頬を伝う涙を拭い、こちらに向かってきた。

「や、やぁ」

「…？　君は、たしか」

「あぁ、驚かせてすまない」

こんな体制でうまい言い訳が見つかるわけもなく、気まずい空気が流れていた。

「……見た？」

その時のあいつの表情は、いつもとは違う別人のものだった。

「な、なんのこと？」

「ちょっと、来い！！！」

「え？　ちょっ、———」

動揺していたのがバレたのか、腕を無理矢理引っ張られて垣根から出された。足も腕も痛かったがあいつはお構いなしに歩き続けた。

連れてこられたのは、いつでも茶会が開けるようにテーブルセッ

トが置いてある、手入れされた庭の一角だった。色とりどりの植物が我先にと咲き誇っている。その香りが充満していて酔いそうなほどだ。
有無を言わさずイスに座らされると、あいつはいつもの笑顔でニッコリ微笑んでいた。
「ジュースでも飲むかい？」
先ほど見たのはやはり別人だったのだろうかと錯覚するほど、雰囲気までも違っていた。
執事らしき老人がジュースとクッキーをテーブルにセットすると、その場を立ち去った。ふたりにされた空間は居心地が悪かった。

「で、お前はなんであんなところにいたんだ？」
「え？　いやー…」
誤魔化そうとするが、何も出てこない。
「…見ただろ？」
「あぁ、まぁ」
「お前、他の奴に絶対言うなよ！！！」
その時の顔は、感情を素直に表現している少年そのものだった。

「ふーん、そんな顔できるんだ」
「話をそらすな」
「学校では別人だな」
「…お前に何がわかる」
「うん、わからないな。どっちが本当のお前なんだ？」
「なんだと？」
「いや、今目の前にいるお前が、本当の姿かな？」
「お前にそんなこと…関係ないだろ」
そう言ったあいつの顔は徐々に哀しい表情に変わっていった。

「言ってみろよ」

「あ？」
「いい顔をしないとダメな理由があるんだろ？」
「……」
一瞬驚いた顔をしていたが、すぐに落ち着きしばらくは黙り込んでいた。話すかどうか迷っているのだろう。何も言わずにそのまま待った。
「――――俺は母さんの人形なんだ」
「え？」
今にも消えそうな声で話し始めたあいつの言葉を、聞き逃しそうになった。

「母さんにとって、俺は人形でしかない。自分が作った服を着せて、まわりの大人に「綺麗ね」と言われたい。俺が、「俺」というだけで発狂して「そんな子に育てた覚えはない」と言う。口答えせず、ただ自分の言うことを聞く、人形じゃないと価値がないんだ。母さんにとって、俺はそれだけの価値しかないんだ！！！　それ以外は意味がないんだ！！！　…お前にはわからないだろ！！！」

十歳にも満たない少年が、自分の心を押さえつけられて親に気を使っている。自分を偽って必死で生きている姿を見て、気がつけば涙を流していた。
「――――なんで、お前が泣いてんだよ」
「べ、別にいいだろ！？」
「…変な奴」
「お前だって泣いてる」
「いいだろ」
そう言いながら涙が出るのは止まらないのに、ふたりで笑っていた。

「俺の前では、本当の顔でいろよ」

「他の奴に言わないって、約束できるならな」
「暁、俺は約束は守るよ？」
「そうか」

＊＊＊

「もう十年くらい前の話だけどな」
「……」
思い出話をした昂さんの瞳には、うっすらと涙が溜まっているようにも見えた。当時はよほど哀しかったのだろう。
「だからさ、瑠璃の前で見せる暁の姿には、正直驚いてる」
「そう？」
「うん。暁のこと気になる？」
「ならない！！！」
頬をプクッと膨らませていると、昂さんは「ごめん、ごめん」と笑いながら謝った。まるで子ども扱いだなと思ったが、自分の行動は子供以外の何物でもない。

「昔、あの人が言ってたな」
「何を？」
「ん？　「好きと嫌いは紙一重」って」
よく理解できなかった。それは誰に言っている言葉なのか。首を傾げていると、彼は立ち上がり扉へと向かっていた。

玄関まで送ると「あぁ、そうだ」と振り返って伝言を残した。
それを聞いた私は、彼の車が消えて見えなくなった後も、その場に立ったままぼんやりしていた———

【第四章】片思いの果て　（一）知らない噂

図書館三階・十四号室――――

ここは私が中等部に進学した時からずっと使用していて、扉にはしっかりと私の名札がついている。ここにある本棚も机もイスも、すべてに愛着があり何より落ち着く空間だった。

滞在時間を考えると、教室よりも自宅よりも長い時間を過ごしているかもしれない。

昂さんが家に来た翌日から、私は道場へ行かなくなった。いや、行く理由がなくなったとも言うべきか。

彼が残した伝言は彼らの予定についてだった。

楠城先輩は、その日ニースへ出発したそうだ。だから道場にはいなかったのだ。前日に突然決まったことらしく昂さんも事後報告を受けたと言っていた。

そんな昂さんは、翌日ロンドンへ経った。今年は例年より出発が遅かったが恒例行事だ。きっとおじ様の仕事の都合上そうなったのだろう。

そして――――

柊木先輩はというと、ふたりより一週間ほど遅れてパリへ出発したらしい。

結局ひとり残された私は、道場に行っても特にすることもなく、暇を持て余していた。

今年は兄さんの結婚式の準備で海外へ行くのは見送られたが、姉さんはふたりで国内の別荘地に行こうと誘ってきた。特に予定もなく、断る理由が見つからなかったため、仕方なく付き合うことにした。出発は明後日だ。

今日はとりあえず課題を片付けるため、図書館に来てみたがどうも集中できない。
先ほどから本を開いてみるが、文字が頭に入ってくることはなくぼんやりとしていた。イスの背もたれに寄りかかり、窓の外を見ていた。
楠城先輩の帰国予定日はわからないと言われた。
新学期に入れば会えるのだろうけど、そもそも夏休みが終わった後、あの道場に近づけるのかいささか不安であった。
訪れたとしても中に入るわけにはいかないだろう。柊木先輩ほどではなくても親衛隊がいるのだから。それを考えると憂鬱になっていた。

逢いたい気持ちと、逢えない現実が私を苦しめているのだろうか。
私は「はぁ」と溜息を吐いて、部屋を出た。

図書館から伸びる街路樹の下を歩く。青々とした葉が影を作り真夏の太陽を遮っていた。石畳の上をゆっくり歩いていると、どこからか聞き覚えのある声が聞こえてきた。
ふと立ち止まって、声の行方を探す。すると目の前の礼拝堂から人が出てきた。

（楠城先輩、帰ってきてたんだ）

突然現れた彼の姿に、表情が明るくなっていくのが自分でもわかる。先ほどまで気持ちが沈んでいたなど嘘のようだ。
その後ろ姿に声をかけようとした。

「せん――――…」

そのとき彼の後ろから出てきた女性の姿に気がつき、口元を手で押さえそのまま礼拝堂の陰に隠れる。気になってそっと覗くと、ふたりで楽しそうな表情を浮かべ腕を組んで歩いていた。その女性には見覚えがあった。

腰まであるストレートの黒髪が背中で揺れている。白いワンピースからスラリと伸びた手足、ヒールの高いサンダルを履いて美しい歩き方をする彼女は、他を寄せ付けない圧倒的なオーラを放っていた。時折見せる表情がまた知的で見る者を圧巻する。

（でも…なんで先輩と一緒に…？）

彼女の名前はたしか二階堂柚莉亜（にかいどうゆりあ）だったはずだ。さすがの私も記憶にある。何せ彼女は二階堂グループの令嬢で、この学園理事長の姪でもあるのだ。彼女のことを知らなければモグリだろう。それほど有名人だ。

でもたしか高等部は名前だけの在籍で、現在は留学中と聞いていたが帰ってきたのだろうか。

気になって後をついていく。一歩間違えればストーカー行為だ。そう思いながらも追いかけずにはいられない。

どこへ向かっているのだろうと思ったが、ふたりは意外にも見慣れた場所へと入っていった。

「お、崇ー。おかえりー」

「ただいま。久しぶりだね」

「久しぶりだな」

中から聞こえてきた声はまぎれもなく昂さんと柊木先輩のものだった。まだ夏休みは十日ほど残っているというのに、もう帰ってきているのが少し不思議だった。

私は気づかれないように道場の入り口とは反対側へとまわり、壁越しに中の様子を伺っていた。
すぐさま自己嫌悪に陥ったが、今は気にしないことにする。チラッと中を覗いてみたが私のことには気づいていないようだ。

「柚莉亜さん、久しぶりー！！！」
「昂ー、久しぶりね。元気だった？」
「元気、元気ー！！！」
「ふふふ、相変わらずね」
そう言いながら彼女は昂さんにハグをする。そして手を離し今度は柊木先輩の元へ行きまたハグをした。

「暁も元気してた？」
「柚莉亜がいなくて、淋しかったよ」
「…暁、僕の前で言う？」
「この程度のこと、柚莉亜なら誰にでも言われてるぜ？」
「まぁ、そうだけど」
「相変わらず、仲良しね」
「ええ、おかげさまで」
何か特別な空気が四人の間に流れていた。踏み入ることのできない、私の知らない何かが、たしかに存在していた。

「しっかし、柚莉亜さん。帰ってくるなら言ってよ」
「驚いた？」
「知ってたら、もっと喜ぶように用意したのに」
「それは嬉しいけどまたの機会にとっておくわ」
「崇は知ってたんだろ？」
「いや、それが急に帰るって言い出したから。僕も驚かされたよ」
「ふふふ、今回は私からのサプライズよ」
少女のようなあどけない表情で優しく微笑んでいた。

「じゃあ、当分日本にいるの？」
「どうかしら？　しばらくはいるつもりだけど、また戻るかしらね？　どちらにしても卒業までにはまた帰ってくるつもりはしているわ」
「卒業までって…」
「まだまだ先の話じゃん」
「あら、後半年ほどよ？」
彼女は私よりも二歳年上になるため、来年の三月には高等部を卒業する。春からは大学部へと進むはずだが、ほとんど海外で暮らしているため次も名前だけの在籍だけになるのでは、と思う。

「今回は叔父様が「少しくらい顔を出して欲しい」っていうから戻ってきたのよ？　だから、そんなに長居するつもりはないわ」
「理事長も大変だな」
「私も大変よ」
「柚莉亜ー、少しは崇のことも考えてやれよ？」
「もう淋しそうで」
「昂、暁。適当なこと、言わないでくれる？」
ふたりが面白そうに言うのが、気に入らなかった様子だ。

「崇臣なら大丈夫よ」
「…あんなこと言ってますが？」
「あら、本当よ。少しくらい離れていたって大丈夫よ？」
「まぁ、心配はしてないかな」
「それに、後何年かすれば毎日同じ家で朝を迎えることになるんだもの。そんなに慌てることはないわ。ねぇ？」
「そうだね」
その台詞を聞いた瞬間、私の中の「何か」が弾けたような音を聞いた。それと同時になぜ彼女があんなにも彼と親しいのか理解した。

（それって、つまり…）

彼女の噂に関しては何度か聞いたことがある。クラスの噂好きの子女たちが羨ましがるように話していた記憶がある。

そう、婚約者の存在だ。

二階堂グループは国内随一の資産家だ。今までにも何度か後継者問題が浮上していたようだった。現会長には一人娘がいるが、グループ内の派閥で彼女が後継者となることに反対している意見が決して少なくないらしいのだ。その反対勢力を抑えるために婚約発表が行われたと、兄から聞いたことがある。

ただ、その時はお互いまだ学生ということで、身内だけの婚約披露だったようだ。グループ全体に発表するのはもう少し先になるだろう、というのがまわりの見解だったらしい。

そう言えば「名家のご子息を婿に迎えられて、安泰ね」と母が言っていた気がする。

今の会話からすると楠城先輩が彼女の婚約者なのだろう。

（だからか、あきらめろって…）

私はすっかり脱力してその場に座り込んでいた。あんなに彼に会いたかったのに、今はもうそんな気分ではない。

今は会っても笑えない。

そう思い、足音を消して静かにその場から離れた――――

【第四章】片想いの果て　（二）沈む気持ち

門の手前で待っていた車に乗り込み、急いで家へと向かわせた。今は何も考えられない。先ほど知ってしまった事実をまだうまく受け入れることができない。

「おかえりなさいませ」

「お嬢様、昼食は――――」

玄関を入るなり執事が話しかけてきたが、答える気になれずさっさと自室に戻った。予定外の時間に帰宅したものだから少し困った顔をしていた。

少し考えればわかることだったかもしれない。

生徒のほとんどはどこかの企業の子息・令嬢、もしくは私のように旧家や名家、資産家の「後継者」と言われる人物なのだ。家柄上、横の繋がりを大事にするところは多いだろう。一番手っ取り早いのが「婚姻」という形なのだ。

長兄の紫苑も十八歳の時に婚約し、相手はもちろん旧家のご令嬢だ。そう言えば二番目の蘇芳兄さんや姉さんにも決まった相手がいる。

私にそういう相手がいないからかもしれない、まさか婚約者がいるなど想像もしていなかった。いや、実際聞いたことがないだけで、クラスにはそういった生徒もいるかもしれない。私はあまりに無頓着すぎたのだ。

なんとか頭では理解したものの、ショックは大きい。

（まだ、告白もしてないのに――――…）

もう失恋か…と思った。初めての想いだっただけに、気持ちのやり場に困る。

（どうすればいいんだ…）

誰かに相談すれば幾分か気持ちが落ち着くのかもしれないが、生憎そういった相手はすぐに見つかりそうもない。美桜は、と考え携帯を手にとったがそれ以上手が動かなかった。失恋前提で何を話せばいいのかわからなかったからだ。

スケジュール帳を見て「あっ」と声が漏れた。

明後日から姉さんと北海道へ行く約束をしていたが、今はとてもそんな気分になれない。なんとか理由をつけて断らなければ。

重い体を起こし廊下へと出た。

廊下に出て中央階段を横切る。建物の東側に面している私の部屋とはかなり離れていて、南側に大きく面した部屋がメインルームとなっている。

部屋の前に立ち、扉を数回ノックした。

コンコンッ

「どうぞ」

「姉さん、今いい？」

中に入らず顔だけ覗かせた。その姿を見て笑いながら答えてくれた。

「何？　遠慮なんて。入ってくれれば？」

「…うん」

一瞬戸惑ったが、扉を大きく開け一歩中へ入った。

姉さんの部屋は、白を基調に淡いピンクやオレンジといった暖色系の家具や小物のに囲まれていていつ見ても明るい。私の部屋はブ

ラウンやワインレッドといったダーク系の物が多いため、ずいぶん印象が違う。姉妹といっても似ているところは少ないといつも思う。

落ち着かないが、とりあえず中央のソファに腰かけた。

「何か飲み物が欲しいわね。何がいい？」

「…何でも」

姉さんは少し呆れたような表情をしていたが気がつかないフリをした。誰に対しても言葉少なく話すのは今に始まったことではない。そんな私を横目に、そのまま席を立ち部屋の電話に手を伸ばして使用人に紅茶と焼き菓子を持ってくるよう伝えていた。

しばらく待つと、花のような独特の甘い香りが部屋いっぱいに広がってきた。アールグレイを頼むなんて珍しい、深い赤色をした紅茶とこんがり焼けたマドレーヌが運ばれた。

ティーポットから紅茶が注がれる様子を見ていた私は、カップの中をクルクルまわる液体に自分の気持ちを重ねていた。同じところをまわり、行き場を無くした思い。

「で、急になぁに？」

カップに視線を落とし、指で取っ手を撫でながら呟いた。

「今度の旅行のことだけど———」

今は行く気分になれない、と告げると姉さんは優しく微笑み返してきた。

「ダメよ」

「え？」

「何があったかまでは聞かないけど、ダメよ」

「だから、何が？」

「明後日からの旅行よ。楽しみにしてたんだから、キャンセルなんてダメ」

「姉さん…人の話聞いてた？」

「もちろん聞いてたわよ」
話を聞き入れず涼しい顔をしていることに苛々していたが、穏やかな姉さんの顔を見ていると徐々に和んできた。つられて笑っている自分に気がつく。
「こんな時こそ、気分転換よ！！！」

（こんな時って…何も言ってないけど？）

妙にテンションの高い姉を見ていて、私の悩みが幾分か軽くなっていくのがわかった。彼女の笑顔には不思議な力がある。そう思いながら紅茶を一口含んだ。
特に相談したわけではなかったが、姉さんの部屋に来てよかったと思った。
自分の予定は狂ってしまったけれど。

【第四章】片想いの果て　（三）夏の終わり

二日後―

別荘に着き、部屋で少し休もうとした私の手を引っ張る人がいた。もちろん姉さんだ。どうやらゆっくりとさせる気はないらしい。振り返った時に見せた彼女の顔がそう言っていた。

「さぁ、でかけるわよ」

「…はい、はい」

私は観念し後ろをついていくことにした。

夏の北海道―と、いってももう八月も終わり―はひんやりとした空気が漂っていた。空港に着いた時はまだ蒸し暑さが残っていたが、中心街を離れて別荘地へ入ると、まるで別世界のような景色が広がっていた。

気分転換には丁度いい、姉さんに強引に連れてこられた形になったがキャンセルしなくてよかったと思い直した。だが、できれば部屋でのんびりと過ごしたかった。

別荘を出た車中でも姉さんはご機嫌な様子だった。こちらは知らぬ顔で座っていたが。

どこへ連れて行かれるのだろうと思いながら窓の外を見ていると、急に車が止まる。てっきり買い物か食事へ行くものだと思っていただけに、こんなに早く停車するとは考えていなかった。

「着いたわよ」

「……って、ここどこ？」

「うふふ、秘密」

「秘密って…」

広い土地にポツンと一軒建っていたそのログハウス風の別荘に見覚えはなかった。明らかに誰かの別荘であることはわかるが。不安

に思う私をよそに中へと入って行く姉さんに渋々ついていく。
促されて扉を開けた私は、状況が呑み込めず呆然と立ちすくんでしまった。

（何、これ――――…）

パーン、パーン――――

「「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ！！！　瑠璃！！！」」

それはあまりに突然だった。
私の後ろでは姉さんがニコニコと満足そうな表情で立っている。
そして目の前には兄ふたりと紫苑兄さんの婚約者・咲織（さおり）さんが立っていた。
「兄さんたち…何してるの？」
「あれ？　喜んでくれないの？　せっかく用意したのに」
「いや、ビックリするでしょ」
「驚いただろ？」
「朝から準備してもらったんだよ」
「瑠璃さん、お誕生日おめでとう」
そう言いながら咲織さんは花束を渡してくれた。受け取ってみたがなんとなく照れくさい。
サプライズにしてはあまりに大きなプレゼントだった。そう、私自身誕生日だということを今の今まで忘れていたのだから。
「……ありがとう」
この雰囲気に呑まれたのか、自分でも驚くほど素直に礼が言えた。
「後で慎一と純玲さんも来るから」

「…そうなんだ。なんだか大事(おおごと)だね」
「そう？　誕生パーティーなんだから普通よ」
慎一というのは姉の婚約者・橘慎一郎(たちばなしんいちろう)さんで橘財閥の後継者に当たる。姉さんとは幼なじみで家同士の付き合いも古い。純玲(すみれ)さんは蘇芳兄さんの婚約者で今は確か大学病院で研究員として在籍しているはずだ。前回会ったのは、紫苑兄さんのお祝いに来たときだったと思う。

「お父様とお母様は？」
その質問をした途端姉の表情が曇った。だがすぐ元に戻り、私に顔を見せず話しはじめた。
「おふたりとも来れないらしいわ。お仕事が忙しいのね」
「…そっか」
「あ、でも帰ったらきっとお祝いしくれるわ」
「うん…そうだね」
それが実行されることはないことはわかっていた。
両親は私たちにあまり関心がない。強いて言えば紫苑兄さんにだけ優しく接する。それは後継者として、という理由だけでとても愛されているとは感じられなかった。
そのため、第二邸宅に足を運ぶことはないし、母に関して言えばもはや産んだだけの人としてしか見ることができなかった。
深い意味もなく何気ない一言が、姉さんを困らせてしまったみたいだ。
「――――姉さん」
「なぁに？」
「…ごめん」
その言葉の意味を察したのか、軽く頭を撫でてくれた。
しばらくして慎一郎さんと純玲さんが到着し、テーブルには料理が運ばれてきた。それぞれの隣に婚約者が座っている。その光景を

見ていると、ほんの少し忘れていたことを思い出した。
沈み込んでいると姉さんが話しかけてきた。
「どうしたの？　暗い顔して」
「え？　あぁ、なんでもない」
「なんでもない、って顔じゃないわよ？」
「いや、なんとなく――――」
「なんとなく？」
「どうして私には縁談話がないんだろう…って」
それはふと思い立った疑問だった。
まだ早いというわけではないと思う。実際姉さんはかなり前から決まっていたし、正式な婚約とまではいかなくても、相手は決まっていたりする。
でも、私はそれがない。

「何？　気にしてるの？」
「そういうわけじゃないけど…不思議に思っただけ」
「そうね、お父様にも考えがあってのことだと思うけど」
「別に、ないならないでいい」
「それも困るわね」
そう言いながら姉は慎一郎さんの元へと近づいた。
姉さんと慎一郎さんは幼稚舎の頃からほぼ毎日のように傍にいるはずだ。
よく飽きないな…と思ったことがある。婚約したと聞いた時は「あぁ、やっぱり」と思ったと同時に親が決めたことだから仕方ないのか、とも思った。
本人たちはどう思っているのだろう。

目の前で幸せそうに見える3組のカップルを見ながら、本心はどこにあるんだろうと考えた。
未だ片想いしか経験のない私にはわからないことだった。

【第四章】片想いの果て　（四）月夜の下で

その日の夜、別荘に戻ってから姉さんの部屋を訪ねた。慎一郎さんがいれば明日にでも、と思っていたが部屋には姉さんの姿しか見られなかった。

「慎一郎さん、帰ったの？」

「兄さんたちと飲んでいるみたいよ」

どうやらお酒の席につき合わされているらしい。未成年は私と姉さんだけだ。

それなのに姉さんは紅茶に少しのリキュールを混ぜ、テーブルに置いた。そして「夜よく眠れるから」と付け足した。

口に含むと紅茶の味しかせず、リキュールが入っているようには思えなかった。なんとなくいつもと香りが違う気がするが、それはきっと見ていたからそう思うだけだ。

「ねぇ、姉さん」

「なぁに？」

「……慎一郎さんのこと、好き？」

突然の質問にさすがの姉さんもキョトンとしていた。

「なぁに？　急に」

「なんとなく聞いてみただけ」

そのときにはもういつもの表情に戻っていた。

「急に何言い出すかと思えば…変な子ね」

「ひどくない？」

「私を驚かせた仕返しよ」

「だって――――」

「だって？　なぁに？」

姉さんは持っていたカップをテーブルに置き、じっと私の顔を見

た。
「小さい頃からずっと一緒で、でもそれって好きなのかな…って」
「…そうね」
何かを思い出すかのような表情で口を開いた。
「どうかしら？　慎一のことは子供の頃からずっと一緒にいて。一緒にいるのが当たり前だったから…慎一のいない世界なんて考えられないし。これを「好き」っていうなら、そうかもしれないわね？」

（好きって…そんなもの？）

「ふーん」
「あら、不満そうね？」
「そんなことないけど…そんなもん？って思っただけ」
「私にとってはね、激しい恋心は芽生えなかったけど彼が必要なのよ」
その後「人によって違うのよ」と付け足した。
姉さんは激しい恋心はない、と言った。今の私のように胸がドキドキしたり、逢いたいと思ったり、逢えなくて淋しいとは思わないのだろうか。
慎一郎さん以外の人に、そういう感情を持ったことはないのだろうか。
そう聞くと、さも意外かという表情で答えた。
「それはないわね。そうね…「素敵な人」って思ったことはあったかもしれないけど。それはあくまで「憧れ」であって「恋」とは違うものなのよ―――」
姉さんはカップを手にとり、すっかり冷めた紅茶をゆっくりと飲んでいた。

「――で、瑠璃は誰が好きなの？」
いつになく意地悪な表情をしていると思ったのは気のせいだろうか。
「え！？　いや、別に…誰も――」
「そんなごまかし、通用しないわよ？」
「…うん」
「だぁれ？」

「…ひとつ上の…先輩――」

私は俯いたまま話したため、どこまで姉さんに聞こえていたかはわからない。「そっか」という声が聞こえてきて顔を上げた。

「――うん。でもね…その人には婚約者がいるんだ」
それは知りたくなかった事実。不意に聞かされた現実。そして、まだ受け止められない真実。ようやく誰かに零すことができた。
「なるほどね。そっかそっか」
「うん」
「で、何を考えてるの？」

（姉さん…話聞いてたんじゃないの？）

「いや、だから。好きな人に婚約者がいて、ショックで、哀しくて――」
そこまで言わせないでと思いながら、言い放った。
「どうして？」
「どうしてって…」
「婚約者がいてショックなのはわかるわ。でも自分の気持ちを伝え

たわけじゃないでしょう？　何も行動してないのに、哀しむのは…どうかしら？」
「…振られるに、決まってる」
「それであきらめられるなら、悩むことないでしょ？　このまま胸に秘めるのも、当たって砕けるのも自分次第よ」

（どっちにしても、叶わないって言われてる気がするんだけど…）

姉さんはソファから立ち上がり扉を開けて振り返った。
「さぁ、お喋りはここまで。自分の部屋に戻りなさい―――」
仕方なく部屋を出ることにした。
姉さんの前を通り過ぎ廊下へ出たとき「後悔しないでね」と呟くのを聞き逃さなかった。足を止め振り返ると、優しい笑顔を向けているその姿が見えた。
私を見送った後、姿が見えなくなったのを確認しそっと扉を閉めた。
自分の部屋に戻り、ベッドに横たわる。姉さんに言われたことを思い出しながらぼんやりと考え込んでいた。

―初めて見たときから、頭から離れない…
あの人の笑顔と優しい声、
まだ、何も知らないのに…
こんなにも切なくて、苦しくて、愛しい…

それなのに、この想いは報われない、叶わない恋―

ぼんやりと目を開けると、眩しい光が刺激した。
どうやら照明をつけたまま寝てしまっていたらしい。しかも何か夢を見ていたようだ。頬が少し湿っているのは涙のせいだろう。
洗面台に行き鏡を覗き込む。目元が赤く腫れていてずいぶん酷い顔をしている。
水を汲み、一気に飲み干した。涙で流れた分、補給できた気がする。

外はすっかり静まり返っていて、真っ暗な空には星が輝きを放っていた。窓を開けテラスに出る。夜の空気が頬を伝い、私の気分を落ち着かせてくれる。
見上げた月のない空は、美しすぎて切なかった。音のない世界が私をどんどん孤独にしていく。頬を伝う涙さえ静かに消えていく。

この空のした、私は決心した―――

【第四章】片想いの果て　（五）哀しい恋心

数日後―
もう夏休みも終わろうとしていた。
私は図書館三階のある部屋の前に来ている。だが、扉をノックすることはなく自分の部屋との間を行ったり来たりしていた。
昨日もこれを繰り返し、結局自分の部屋に戻って外へ出ることはなかった。
でも、もう残された時間は少ない。あと二日もすれば新学期が始まってしまう。そうなれば今までのように気軽に逢いに行けない。
意を決して扉をノックする。

「……はい？」
突然の訪問のためか、中から返事があるまで少し時間がかかった。
「あ、あの。一条です…」
扉の外から声をかけた。中の様子はまったくわからない。その静けさの中で私の鼓動だけが鳴り響いているようで苦しかった。
開けて欲しい感情と、開けて欲しくない…その両方が混在している。
しばらく待つと扉が開けられた。
「どうしたの？」
「あの、お話があるんですが―――」
「…どうぞ」
少し間があったが、楠城先輩は中へと招き入れてくれた。
中に入ると目に入ってきたのは積み上げられた経済書の類だ。私の部屋にはあまりないものが多い。整然と並ぶ本の前に彼は座った。

イスに深く座りこちらを伺う様子で見ている。立ったままの私を不思議そうな顔をして見ている。「どうぞ」と言われたが、とてもソファに座る気にはなれなかった。
「急にどうしたの？」
「…あ、はい」
決心して来たつもりなのに、いざとなると何も言えなくなってきた。
彼は机に肘をつき、首をかしげたままこちらを見ている。

（決めたのに――――…）

決心が揺れそうで。
怖くて言えそうにない。

（こんなに好きなのに――――…）

これは叶わない恋。

（こんなに胸が痛いのに――――…）

届かない想い。

静かな部屋の中、消えるような声で呟いた。

「…先輩、好きです――――」

それだけ言って、私は目を閉じた――――
ふたりとも黙ったまま時間が過ぎた――――そんな気がしていた。

「…そっか」
ポツンと呟いて私の顔をじっと見る。その視線に耐えられなくなり床を見てばかりだ。彼が何か言おうとしている気配を感じ取った。
その後に続く言葉は予想していた。

（ごめん…そう言うんでしょう？）

「――――気持ちは嬉しいけど、僕には決めた人がいるから。一条さんの気持ちには応えられない。――――ごめんね――――」

それは聞かなくてもわかっていた言葉。
そして予想以上に私の心を深く沈める。

「わかってます。聞いてくれありがとうございました――」
深々と頭を下げ、部屋を出て行った。
廊下に出た瞬間足元が揺れたような気がしたが、気力を振り絞り自室に戻った。
倒れこむように部屋に入り、扉を閉めた――

（わかっていたのに――…）

（覚悟はしていたのに――…）

崩れるように座り込み、
私はその場で静かに泣いた――
頬を伝う涙は、溢れて止まることはなかった――

【第五章】暗い闇の中で　（一）重い気持ち

朝早く目が覚めた。
いや正確には、よく眠れなかったのだ。
今日から二学期が始まる。それは頭ではわかっていても、体と気持ちがついていかなかった。ベッドから頭だけを出して、カーテンの隙間から入る光をぼんやりと見ていた。
鈍った体の感覚が少しずつ呼び起こされる感じがした。
ずるずると重い体を引きずりながら、ソファへと倒れこんだ。

コンコン
「お嬢様、失礼します」
冷め切っていない頭で顔だけを動かす。扉の前には執事が立っていた。
「――――お嬢様、まだそのような格好で？　朝食のご準備ができていますが、お部屋までお持ちしますか？　それともダイニングでお召し上がりになりますか？」
「…いらない」
「いけません。食欲がないようでしたら違うものを用意させます」
「…じゃあ、紅茶とスコーン」
「お持ちすればよろしいですか？」
「…うん」
「かしこまりました。お待ちください」
出て行こうとした執事は「お着替えを済ませてください」と付け足し、一礼をして扉を閉めた。
仕方なくクローゼットを開ける。用意されている制服を出し、ブラウスに袖を通した。ネクタイを締める気にはなれず、ソファに放り投げた。

「お嬢様、もうお時間は過ぎていますが？」
「…知ってる」
「いつまでもそのようなことでは困ります。いいですか――――」
いつものように執事の説教が始まっていた。
今まで時間通りに学校へ行ったことはない。いつも遅刻してばかりの私に執事はいい加減呆れていた。それでもあきらめず言い聞かせる。
でも、朝が苦手で授業に出るのが嫌だから特待生試験を受けたというのに。
他の学校で特待生と言えば、授業料が免除になったりするらしいが、それとは少し違っていて授業日数が免除になるのだ。条件としては中等部進学までに特待生試験に合格することと、毎年すべての試験で主席を取ることだ。

紅茶を飲みながら目の前で流暢に喋る執事を見て可笑しかった。私の幼少時代の教育者は彼なのだから、今さら何を言っているのだろうと思ってしまう。
それでもこの説教を受け流せるようになったのだから、私も成長したものだ。
「お嬢様、朝食が終わられたらお出かけの準備をしてください」
「うん」
「後でお迎えに参ります」
時間はもう八時を過ぎていたが、どうやら学校まで送り届けるようだ。始業式などに出る気はなかったが、まぁいい。適当に時間をつぶすことはできる。
そう思いながら荷物の準備をした。

車を降りた後、講堂には向かわず図書館へと足を運んだ。本を読んでいると机の上に置いてある携帯が鳴った。

美桜からのメールだ。
《始業式始まってるよ。待ってるね♪》
返信はせず、そのまま閉じた。
教室には顔を出さないまま時間が過ぎた。もう外に出ても大丈夫だろう。車が待っているはずだ。そう思い帰る準備をしていた。

「瑠璃、いる？」
扉の向こうからいつもの甘い声が聞こえてきた。
「…いるよ」
返事をすると扉が開き美桜が中に入ってきた。久しぶりに見る顔だ。相変わらずクルクルと巻かれた髪が揺れて女らしさを演出していた。
「やっぱり、ここにいたのね」
「何？」
「どうして来なかったの？」
「…聞かないで」
「まぁ、いいわ」
彼女がここへ来たのは違う理由があるらしい。ソファに座りニコニコしながら私の顔を見ている。

「お願いがあるの」
瞬間、頭によぎった嫌な予感。それを顔に出さないように、美桜の顔を見ず本に視線を落としていた。
「…何？」
「また一緒に来て？」
予想通りの展開だった。一瞬頭がクラクラしたが、ここはお願いを聞いている場合ではない。彼女にはまだ何も伝えてないのだ。
「やだ」
「どうして？　いいでしょ？」
上目遣いにお願い攻撃を仕掛けてくる。これが男性にだったらさ

ぞ有効的な仕草だと思う。
「美桜、ちょっと話があって――」
「じゃあ、後で聞いてあげるわ」
「いや、後って」
「ね？　いいでしょ？」
「ちょっと、待って――」
私の言葉を遮るように彼女は制服の袖を引っ張り、部屋から出ようと催促していた。こうなったらもう話を聞いてはもらえないだろう。彼女はひたすら前へと進む。

ついこの間までは楽しみにしていた場所。
この石畳も、道場までの通路もあんなにキラキラと輝いていたのに今では霧がかかったように足取りが重い。促されるまま思いとはうらはらに体だけが前へと進んでいた。

【第五章】暗い闇の中で　（二）混乱の事態

案の定、道場前はすでに多くの人だかりで埋まっていた。夏休み前より多いのではないかと思うほど、人が溢れかえっていた。
美桜は少しでも近くで見ようとして、ギャラリーの波を掻い潜っていた。その反面私は極力身を潜めて人影に隠れるように歩いた。

（見つかったら、めんどうだ――…）

その思いだけが私の頭を埋めていた。
美桜が夢中になって私から気が逸れたと思った。その瞬間道場の脇に隠れようとしたが、それがまずかったらしい。移動した体は人と人の隙間からはじき出されひとり分、前に出た。
そして、弓を置いた彼と目があってしまったのだ。

（やばっ――――…）

そんな私の心中を嘲笑うかのように彼は近づき不意に腕を引っ張った。その反動で前屈みになる。ギャラリーの波から一歩出た私は一斉に視線を受けた。

「「「いや――――――――！！！　何あれ――――――――――――！！！」」」

向けられた視線と同時に狂気の声が響き渡った。予想外の出来事に美桜も呆然としていた。私はその場を脱出しようと試みるが、彼に掴まれた腕が自由に動かない。
そのまま道場に引っ張り上げられた。
無理矢理引っ張られた反動で、その場に座り込んでしまった。
「お前、何やってるんだ？」
「…はい？」
柊木先輩は悪びれた様子もなく、私の腕を掴んだまま離さなかった。だが、この状況を打破しなければ延々と狂気の視線が突き刺さる。
なんとか腕を振り解き、自力で立ち上がった。傍にいた昴さんが手を貸してくれたが「大丈夫」と告げて、奥の部屋へと入っていった。
一息置いて、美桜にメールした。
後で説明する、そう伝えたが何から話せばいいものか。
その前に後悔の思いが先に浮かんだ。やはり先に説明しておくべきだった。そうすればここに来ることもなかっただろうし、こんな事態にはならなかったはずだ。
美桜は今どんな思いであのギャラリーの中にいるのだろう。親衛隊たちに妙な勘繰りを入れられてなければいいが。

それにしても柊木先輩の気まぐれには困る。
私はこの一瞬の出来事で、あの多すぎる親衛隊を敵にまわしたのでは、と考えてしまう。噂好きの彼女たちに何を言われてもよかったが、美桜にだけは誤解のないよう説明をしなければならない。
それに、彼女に迷惑がかかるようなことだけは避けなくては。

しばらくすると三人が部屋へと入ってきた。
あれこれ考えているうちに、随分時間が経っているようで辺りは

静けさが増していた。もう誰もいないのなら帰ろうと立ち上がったとき、外から声が聞こえた。
「あの――――」
声の主は美桜だ。その声を聞いて外に顔を出した昴さんは、すぐに戻ってきた。

「瑠璃、友達が待ってるぜ」
「あ、うん」
「暁の気まぐれにも困るよ」
「ほとんど半狂乱だったからな。泣いてる子とかいたし」
「一条さん、気をつけてね」
「…はい。失礼します」
外には美桜が待っていた。
歩きながら夏休みの出来事を順に話していった。といっても、どの程度伝わっているかは不明だ。自分でも必要以上に話さない性格だとわかっているので言葉は足りないかもしれない。
彼女は途中大袈裟なほど驚いたり、頷いたり、笑ったりしながら聞いていた。話しながらたった1ヶ月程度の出来事なんだと改めて実感した。

「そっか。もう楠城先輩のことはいいの？」
「うん、仕方ないし」
「柊木先輩のことは何とも思ってないの？」
「思ってない」
「また一緒に来てもらってもいい？」
一瞬自分の耳を疑った。彼女は何事もなかったかのような表情をしている。
「は？　私の話聞いてた？」
「聞いてたわよ。だから、よ。あたしを柊木先輩に会わせて♪　せっかくの近づけるチャンスなのよ。だからお願いね」

「そういうことね」
「約束よ」
「はいはい――――」
まぁそれくらいなら、と渋々だったが彼女の提案を承諾した。
まだ、このときは自分の置かれている状況に何ひとつ気付いていなかった。

【第五章】暗い闇の中で　（三）第三音楽室

翌日―
図書館の個室へ入ろうとした時、部屋の前に大量の手紙が置いてあることに気がついた。何だろうと思い手にとって言葉を失った。
押し込まれていた紙には赤い文字で「誹謗・中傷」が綴られている。昨日の件が原因であることは明らかだった。

（嫌がらせか…この学園にはないと思ってたけど―…）

図書館にいる係を呼び出し、処分してもらうよう手配した。もしかしたら毎日続くかもしれないが、目に余るようなら対処してもらえばいいことだ。
それよりもいつも一緒にいる美桜に危害が及ばなければいいが、と考える。心配になりメールしてみたが特に変わったことはないとの返事だった。

午後の鐘が鳴る頃―
気分転換に北校舎五階にある第三音楽室へと向かっていた。
ほとんど使われていない部屋だっただが、グランドピアノが置いてあり鍵もかかってないのでよく利用していた。実際私のバイオリンも置いている。

（久しぶりにピアノでも弾くか…）

部屋の中央に置いてあるグランドピアノに手を伸ばした。静かな部屋の中ポーンと高い音が響く。鍵盤の上で指が滑らかに踊りだしていた。

パチパチパチ―

拍手が聞こえてきて私は驚いた。誰もいないと思っていたからだ。鍵盤から顔を上げると、ピアノの隙間から見覚えのある顔が立っている。

「柊木先輩、何してるんですか」

「たまたま、だ」

「今授業中ですよ」

「知ってる」

扉の前に立っていた彼は私の前を通り過ぎ、窓際の席に座る。

「サボり…ですか？」

「まぁそんなことだ」

「単位落としても知りませんよ」

「いいんだよ」

「そうですか」

「たまにはひとりになりたい時もあるだろ？」

「…私、いますけど？」

「一条は他の奴と違ってあれこれ付きまとってこないし、うるさくないからな」

（いつも誰かに囲まれてるって…自分の時間とかないのかな…）

「なんか弾いてよ」

いつもとは違う哀しげな表情を一瞬見たような気がしたが、元に戻っていた。彼のためではなかったが、促されるまま鍵盤に指を置

きメロディーを奏で始めた。

それから数日間は嫌がらせの手紙が届いた。だがあまりにしつこいので三階の警備を依頼をすると次第に数は減っていた。
試験の時期までにはほとぼりが冷めれば、と思っている。それまでは教室に行くつもりはない。
気まぐれに第三音楽室へ行くと、やはり柊木先輩の姿があった。
「――先輩、午後の単位本当に落としますよ？」
「大丈夫だって」
「いや、大丈夫じゃないでしょう？」
「何？　心配してくれんの？」
そういうことではない、と小さく溜息をついたが彼には届かなかったらしい。

（ここに来てるのがバレたら、また面倒なんだけど―…）

そう思ったが口にはしなかった。本人が幾分か自覚していればいいのだけれど、と期待するしかない。
「なんだよ」
「いつも何しに来てるんですか」
「何？　俺がいると迷惑？」

（えぇ、迷惑ですとも…）

そうも言えず「別に」とだけ答えて誤魔化した。
後は彼がここへ出入りしていることを誰にも見られていないよう、祈るしかないようだ。普段誰も来ないような場所のため余程のことがない限り大丈夫だろうと思っていた。
「もう好きにしてください」
そう言ってバイオリンに手をかけた。
秋の優しい日差しが降り注ぐ中バイオリンの音色が響き渡っていた。といっても防音が施されているので外には聞こえないが。
部屋の中で反響する音色に、彼はいつものように目を閉じて耳を傾けていた。

カラーン、コローン……
授業終了の鐘が鳴り響く。
「じゃあ、またな」
彼は椅子から立ち上がり扉へと向かった。扉の手前で振り返り「たまには道場に来いよ」と告げ私の答えを聞かずに出て行った。

（行けるわけないって…何考えてるんだか――…）

部屋を出て階段を下りていく彼の姿を見た女子生徒がいたが、本人は気がつかなかったようだ。不思議に思った彼女は彼が来た方向へと歩いていた。そこで私は部屋を出たが、その彼女には気がつかなかった。俊敏な動きで扉の影へと隠れていたらしいが、まったく気にとめず階段へと向かう。その後ろで彼女が部屋に入った頃には、私は何も知らずただ廊下を歩いていた。
何かが、確実に近づいてきていた。

【第五章】暗い闇の中で　（四）扉の中の闇

翌週―

静かな校舎の中第三音楽室へと足を運ばせていた。いつもと変わりない風景のはずが、部屋に入るなり異常を察知した。

先週、きちんと片付けたはずのバイオリンが剥き出しになっている。それどころか乱暴に扱われた節がある。手にとるとそれはよくわかった。

（誰が…こんなこと――――…）

バイオリンの弦はズタズタに引き裂かれ傷だらけだった。もうこれは使えない、弦を張りなおせばいいという問題ではなかったのだ。

傷だらけになったバイオリンを持ち、ピアノを弾く気にもなれずぼんやりと窓の外を見ていた。

（見られた、んだろうな……）

その頃柊木先輩は私の教室に来ていたらしいが、私はそんなこと知らないままだった。

扉の外で何が起こっているのかも知らずに――――

思い返せば前兆はあった。

今日は試験日程の確認に教室へと出向いた。相変わらず視線は冷たかったが、それほど気にならなかった。一度かばんを置いたまま教室を出たのが間違いだったのだ。

このときすでに異変があったと思う。

戻ったときには消えていて、校内を捜す羽目になった。結局中央塔前の噴水の中にかばんは浮かんでいた。中に入っていた教科書やノート、ケータイまで丁寧に取り出され放り込まれたようだった。

かばんを拾い上げ噴水の中に入り一冊ずつ拾っては噴水の淵に置いていった。

（このノートはもうダメだな…）

水浸しの上、破られた状態で何が書いてあったかは判別できなくなっていた。挙句の果てにケータイは電源が入らないといった始末だ。

この時点で第三音楽室へ向かわずに帰るべきだったのかもしれない。が、「後悔先に立たず」だ。

夕方の鐘が鳴る。

窓の外には夕陽が沈みかけていた。立ち上がり扉に手をかけた瞬間、自分の置かれている状況に直面した。

（扉が、開かない――――…）

中から鍵をかけた覚えはない。その証拠に何度か鍵の確認をするがそれが原因ではないようだ。外から何か仕掛けられたか、自動ロ

ックがかかったのかいくら押してもビクともしない。

（ダメだ…開かない）

今までこんなことがあったか、と考える。今日の出来事を整理してある考えに到達した。

（閉じ込められた――――…）

扉以外に出入り口は窓しかないがここは5階だ、窓からの脱出はまず不可能だ。いや、その前に校舎の窓はすべて防犯の為に大きく開かない仕様になっている。人が通るスペースはない。

後ニ時間もすれば学園から人はいなくなる。そうなる前に何とかしなければ、ここに閉じ込められたまま朝を迎えることになるかもしれない。

さすがに帰らなければそれなりに捜索願がでるだろうが、そんな大事にはしたくなかった。とりあえず少し開く窓から、階下に人が通らないかをじっと見ていた。

（誰か通ってくれれば…）

淡い期待を込めて見つめながら、ここから出る方法を考えていた。

実に第三音楽室へと続く廊下と階段にはロープが張り巡らされ、五階入り口には「工事中・立入り禁止」の看板が立てかけてあった。
そんなことを知りもしない私は外が徐々に暗くなっていくことに不安を感じていた。
ピアノのイスに座ってぼんやり外を見ていると、扉の前でガタガタを音がしていることに気がついた。次の瞬間、見覚えのある顔が勢いよく入ってきて声を上げた。

「――――瑠璃！！！」
「…昴、さん？」
彼は私を見た途端そっと抱き寄せてくれた。よほど酷い顔をしていたのだろう。実際かなり疲労していて今にも倒れそうなほどだった。
「大丈夫か？」
「…うん」
「よかった」
「でも、なんで…？」
「あぁ、彼女が捜していたよ」
扉の向こうに立っている美桜の姿が見えた。なぜか申し訳なさそうな顔をして私の顔を見ようとしない。それでも昴さんの腕を払いのけ、美桜の元へと走り抱きついた。

「美桜！！！」
「…瑠璃、ごめんね」
「いい、美桜は悪くない。心配かけてごめん」
「無事でよかった」
美桜はしばらく泣いていたが、「もう大丈夫」と声をかけると幾分か落ち着き、家に送り届けることになった。
帰りの車の中で昴さんと楠城先輩が来たいきさつを聞いた。

「道場にいるかと思ってね、訪ねたのよ。そしたら中には先輩ふたりしかいなくて…「瑠璃来てませんか？」って聞いたら最近は来てないって言われて。「何かあったの？」って聞かれたから…その、今日のこと話しちゃったの」
「…いいよ」
それで彼女はあんな表情をしていたのか、と思った。
「でね、図書館にもいないみたいだし、第三音楽室へ行ってみたら工事中の看板があって、って言うとふたりとも血相変えて出て行ったの」
「そうだったんだ」
「うん。警備室に連絡入れて外からのロックを外してもらったのよ。――ごめんね」
「だから、もういいって。ありがとね」
美桜を送り届けて、自宅に向かう車の中でぼんやりと考え事をしていた。

これで昴さんたちは私が嫌がらせを受けていることを知ってしまったことになる。いつかはわかることだろうけれど、生徒会の昴さんにとっては問題の種だろう。
わざわざ生徒会に仲介してもらうようなことでもないと思っていただけに、明日以降昴さんの行動が気になるところではある。
それに柊木先輩に知れると、それはそれで厄介なことが起こりそうだ。
なぜか彼に迷惑をかけたくない、という思いが浮かんでは消えていった――

【第五章】暗い闇の中で　（五）壊れた日常

翌日―
美桜とふたりで昼食時、カフェテラスに来ていた。ここで食事をするのも久しぶりだ。紅茶が入ったカップを手にとり飲んでいると、後ろから影が伸びた。
振り返ると昴さんが立っている。
「瑠璃、ちょっといいか？」
「…何？」
「悪いけど、赤嶺さん？席外してくれる？」
「あ、はい」
美桜は「後でね」と声をかけ部屋の中へと消えていった。

「どうしたの？」
「お前、なんで言わなかった？」
「何を？」
「何をって…いろいろだよ」
「別に昴さんに話す必要ないと思ったから」
「俺だって知った時は、まさかと思ったよ」
昴さんが頼んだコーヒーが席に運ばれたとき、次いで楠城先輩がやってきた。正面に座られると困る、まだまともに顔が見れない。
「暁は？」
「後で来るって言ってた」
「そうか」
ふたりで何か交わした後、再び問題は私に向かって投げかけられた。

「いつからだ？」
「……ん？」

「いつから嫌がらせを受けている？」
昴さんの言い方で大方把握しているのだろうと察した。一日もあれば調べることなんて容易いことだろう。変に誤魔化したところで特に意味はない。私は正直に話し始めた。

「――――だんだんエスカレートしてるな」
「そうだね。心配していた通りだよ」
「まさか、この学園でここまでのことが起きるなんて思ってなかったけどな」
「やっぱり女子はなかなか過激なんだね。人は意外に執拗な部分を持ってるよ。いくら育ちの良いお嬢様たちも団体行動の中では正常な判断はできなかった、まぁそういうことになるんだろうね」
「はいはい、そこまで」
昴さんは楠城先輩の言葉を制した。
「暁はまだ何も知らないんだな？」
「え？　あ、たぶん」
「そうか」
「別に知らなくてもいいと思うけど」
「そうもいかないだろ」
やや呆れた顔を私に向けた。

しばらくすると何も知らないであろう顔をした柊木先輩が、中庭を歩いてこちらに向かっていた。三人が揃っているとは思わなかったのか、怪訝な顔で近づいてきた。
「何だよ、お揃いだな」
「…暁、話がある」
「なんだよ、昴。あらたまって」
「お前の気まぐれで、まわりが迷惑してるぜ」
「あ？　なんだよ」
昴さんは「ふぅ」と一息吐いてゆっくりと話し始めた。

嫌がらせの手紙に始まりかばんを投げ捨てられたことや第三音楽室での事件を順を追って話していた。聞いていた柊木先輩はみるみるうちに表情が変わっていった。

「お前、昨日さっさと帰っただろ？　さしずめ瑠璃が帰ったと聞かされたからじゃないのか？」

図星だったのか柊木先輩は黙り込んでしまった。

「――お前自分の立場わかってるのか？　今まで散々目立ってきたんだ。これくらいのこと予想できただろ？」

「…俺が、悪いのか」

「お前が悪い」

柊木先輩は頭をクシャクシャを掻き、そのまま黙り込んだ。いつになく険悪な雰囲気が漂っている。しばらく座っていたがそのまま黙って立ち去った。

「瑠璃、今度からはちゃんと言えよ」

「…うん」

「じゃあな」

午後の鐘が鳴り、ふたりは校舎へ入っていた。

ひとり取り残された私は残った紅茶を飲み干し、中庭を歩いた。

それからしばらくして試験週間に入ったこともあり、特に何も起こらず平穏な日々が続いていた。昂さんはあれから何も言ってこない。第三音楽室に行かない私は柊木先輩にも会うことは無かった。

誰にも邪魔されることのなかった日常が、足元から崩れている気がした。

試験が終わった後も一日のほとんどを図書館で過ごした。もはや登校することすら無意味ではないかと思うほどに。

まだ第三音楽室へは行く気になれなかった。図書館なら個室である上、人の出入りが多い分トラブルは少ないだろうからだ。今まで気にならなかったが三階も割と人が歩いている。
そんな中、珍しく個室の扉をノックする音が聞こえた。
美桜が来たのかと思い扉を開けると、そこには柊木先輩が立っていた。
中に入れるか一瞬迷ったが、今さら誰に見られていても何も変わらないと思い「どうぞ」と扉を大きく開けた。中に入ってきた彼はソファに腰かけ私と向かい合う形になった。

「急にどうしたんですか？」
「いや、この間のことでな」
「…そのことだったら、もう」
「悪かったな」
「別に先輩に謝ってもらうことじゃないです」
実際は彼の気まぐれが引き起こしたこととといっても過言ではないが、閉じ込められたのはあくまで自分の不注意だと思っている。
そんな哀しい顔をして謝らないでもらいたい、そう思う。
なぜか彼の顔を見ていると胸が痛かった。
直視できなくなり、何も言わないまま視線をそらした。
「俺のせいで、悪かったな」
「もう終わったことだし、気にしてないです」
「もう二度とあんな目に合わせないから———」
そう言って彼は立ち上がった。

部屋を出る時に「またな」と頭を撫でられたが、顔は見れないままだった。
イスに座り考える。あれだけのことをわざわざ言いに来たのか、と。三十分ほど経っただろうか、ぼんやりしていると部屋のスピーカーからブザーが鳴る。

学園内放送の音だった。
『生徒会から臨時放送です。生徒会から臨時放送です――――』
臨時放送など滅多にかからない。珍しいこともあるんだなと思い耳を傾けていた。

『先日、高等部北校舎五階で悪質な悪戯があったとの報告を受けました。これに対し生徒会はより詳しい事情を徴収するため臨時集会を開きます。校舎及び通路に設置してある監視カメラにより、事件に関与している可能性のある生徒数名に対し、勧告書を通達します。該当する生徒は速やかに生徒会本部へ申し出のうえ、臨時集会への出席するよう通達します。繰り返します――――』

それは間違いなく昂さんの声であり、このことがあったから柊木先輩はわざわざ図書館まで会いに来たんだと察した。
まだ放送は続いていたが私は部屋を出て彼の後を追った。
階段を駆け下り外に出てまわりを見渡してみたがどこにも見当たらなかった。中央塔の生徒会室へと足を運んだが、そこにも彼の姿はなかった。

数日後―
生徒会に呼び出された生徒数名はそれぞれ何らかの処分を受けたと、昂さんが言っていた。それと同時に噴水にかばんを投げ込まれたことや、誹謗・中傷の手紙の件もすべて監視カメラで人物が特定されたらしく、掲示板に貼りだされていた。
結局、何から何まで昂さんのお世話になってしまった。
さすがに良家の子女たちも懲りたらしく、今までが嘘のように静かな日々が続いていた。相変わらず私は図書館にしか出入りしておらず、先輩たちには会わないことが多くなっていた。
今までと同様、ひとりの時間を取り戻したのだ。

だが、
それと同時に私の心には淋しさのようなものが舞い込んでいた。
これが何かはわからない。
ひとりが心地よいはずなのに。
以前とは違う「何か」に私の心は支配されていた――

【第六章】彷徨う心の波　（一）困惑の午後

季節は秋から冬へと移り変わっていた。
空気がひんやりと冷たく澄み渡っている。秋色の葉は落ち、寒々とした空が一面に広がっていた。吐く息が白く染まる。
期末試験も終わり落ち着いた私は久しぶりに第三音楽室へと足を運んでいた。新しいバイオリンケースを手にして。もうバイオリンを弾くのは止めようかとも思ったが、しばらく時間が経つとやはり恋しくなり新調した。
扉を開けるとなんだか懐かしい気分がした。実際何週間も出入りしていないので当然と言えばそれまでかもしれないが。

バイオリンケースを机に置き、丁寧に鍵を開けた。
ケースから顔を出したバイオリンは新品で私の手の感触は一切ない。
「これからよろしくね」
真新しい艶を放っているそれに笑顔を向け言った。弦の調節を兼ねていくらか曲を弾いていると後ろでカタッと音がした。
手を止めて振り返ると、そこには久しぶりに見る顔が立っていた。

「柊木先輩――――…」
「久しぶりだな」
数週間ぶりに見る彼の顔はほんの少し大人びていて、雰囲気が変わっていた。どこかどう、と言われるとうまく説明できないが。
その表情からは少年のあどけなさは消えていてより一層魅力的になった、とでも言うべきだろうか。
「…先輩、授業中ですよ」
「そうだな」
それはもう何度も交わした挨拶のような台詞。

私の前を通り過ぎ、窓際の席に座るクセもそのままの彼だった。
そして何も言わずにただ外をぼんやりと眺めている。
肩にかけていたバイオリンを下ろし彼の姿をじっと見ていた。

「……先輩」
「あ？」
「この間はありがとうございました」
「な、何だよ。急に」
「先輩が昴さんに頼んでくれたんでしょ？」
「いや、別に…俺は何もしてない」
照れ隠しなのか嘘をついているのは一目瞭然だったが、あえて言及はしなかった。
「おかげさまで、あれから何もありません」
「そうか…よかったな」
「まぁ、元はと言えば先輩が原因なんですけどね。私が特待生じゃなくて一般生徒なら、とっくに辞めてますよ？」
「お前！！！　そんな言い方ないだろ！？」
「冗談ですよ、冗談」
彼の顔を見ているとなぜか憎まれ口を叩きたくなるのはなぜだろう。
クスクスを笑っていると彼は私の顔を見つめてきた。一瞬ドキッとしたがお互い目をそらしたので表情にはでなかった。
「ピアノ…弾いてくれよ」

しばらくは窓際の席で目を閉じ聞いていた。だが途中で立ち上がり、何を思ったかピアノを弾いている私のイスに座り体を寄せてきた。
驚いた私は演奏途中にもかかわらず指が止まる。
「…先輩？」
狭いんですけど、と言おうとしたところで見つめられた。その真

剣な表情に吸い込まれそうになる。

（おっと、いかんいかん。何をドキドキしてるんだ…）

目をそらした時だった。
「なぁ、一条」
「はい？」

「…俺と付き合わないか？」

はっきりとした言葉だったにも関わらず、私は言われたことを即座に理解できなかったのはきっと予期していなかった告白だからだ。

「黙ってないで、何とか言えよ」
「え？　えーっと…冗談ですか？」
「お前なぁ、冗談で言うかよ」
「いや、あまりに突然だったので」
「普通、前もって予告とかしないだろ」
「ですよね…」
自分でも何を言っているんだろうと思った。夢を見ているのかもしくはからかわれているのか、どちらかしか考えが浮かばない。

「…で、返事は」
どうやら彼は真剣なようだ。表情から読み取れるのはそんなことだけ。
「え？　あ、えーっと、んーっと…」

「そんなに悩むか？」
「……わかりません」
「お前なぁ」
頭をクシャっと掻きあげ「ふぅ」と溜息を吐いていた。彼にとって予想外の反応だったのかもしれない。

（そんな顔しないでよ――――…）

「その…ちょっと考えさせてください」
そう言って頭を下げるのがやっとだった。
バイオリンケースを持って部屋を出ようとした時も彼の顔は見れなかった。
「俺、あきらめねーから」
背後から聞こえてきた台詞に耳を貸さず、走り去った。

（突然何！？）

私の頭は混乱していた。その中で柊木先輩のことを好きかどうか自問する。その答えは「嫌いではない」であって、「好きでもない」だ。

（しばらく、会えないな…）

どちらにしてもまもなく冬休みに入る。このまま距離を置こうと

心に決めた。まさか向こうから会いに来る…なんてことは避けてもらいたい。
彼のたった一言にこんなに混乱する自分がいるなんて思いもしなかった。一瞬見つめられたり何気ない仕草にドキッとするなど、予想外もいいところだ。

（私、変だ…）

雲が広がる空の下は、私の頭を冷やすには寒すぎるほどに頬を痛めつけた――

【第六章】彷徨う心の波　（二）読めない心

校舎を飛び出し噴水前を歩いていると寒さが一段と増してきた。大きめのストールを首に巻きつけ風が入らないよう顎の下まで覆った。

まだ迎えの車が来る時間ではない。火照った頬を冷ますにはちょうどいいと校門の前でぼんやりと立っていた。

「瑠璃っ！？」

不意に声をかけられ顔を上げると後部座席から覗いている姉さんの姿があった。どうやら向こうのほうが迎えが早かったようだ。

「…姉さん」

「何やってるの？まだ迎えの時間じゃないでしょ？」

「うん…ちょっと考え事」

「風邪引くわよ。乗りなさい」

そう言って車を止めたかと思うと、助手席から執事が降りてきて後部座席のドアを開ける。乗り込んだ車内はほんのり甘い香りがしていた。

執事が「連絡しておきます」と言い発進する。家に向かっていると思われた車の行き先は私の思いとは別のほうへと走っていた。窓の外を流れる風景がどんどん変わる。色とりどりに飾られた街は別世界のようにキラキラと輝いていた。クリスマスが近いからか街も人も浮き足立って見える。

「姉さん、どこへ…？」

「いいから、いいから♪」

こうやって機嫌良く答えるときはだいたい私を驚かせる。途中で降りるわけにもいかず渋々ついて行くのがいつものパターンだ。

「着いたわよ」
窓から見える景色に飽きてきた頃、一軒の店の前で停車した。
案内された店は最近雑誌やテレビで紹介されていたスイーツ専門店だった。姉さんがよく大学の友達と利用しているらしい。ガラス張りの壁からは中の様子がほのかに伝わってくる程度だ。階段を上がり三階の個室へと案内された。
店内に入ってまず目に入ったのがショーケースに並ぶケーキなどのスイーツだ。一階はオープンテラスのような造りになっておりテーブル席とカウンターが広がっていた。この時期はさすがに締め切られていたが、春先などは風が気持ち良いに違いない。二階はソファ席が設けられていた。ゆったりとティータイムを過ごすマダムの姿が目に入る。
案内された部屋は姉さん御用達の場所のようだった。

「紅茶はいつもので。後ケーキは何種類か持ってきて」
「はい、かしこまりました」
手馴れた口調で注文すると、ウェイターらしき男性は頭を下げて出て行く。
こうやってどこかのご令嬢たちと交流を深めているのか、と思うと本当に良家の子女の鏡である。母も殆んど家にはいない。やれお茶会だの食事会だのと交流を深め繋がりを広げていくことに貢献している。それがきっと淑女の嗜みなのだろうけど、私には到底真似できそうになかった。

「失礼します」
ウェイターが部屋に入りテーブルの前で立ち止まる。ワゴンに乗せられたティーポットを置くと「セイロンのディンブラです」と言ってセッティングを始めた。確かにこれなら食べる物を選ばない。姉さんらしい選択だと思った。

同じく乗せられたプレートには何種類かのケーキが並んでいたが、甘いものが苦手な私はガトーショコラを選び他は遠慮した。それに対してカマンベールチーズケーキやミルフィーユ、フルーツタルトにティラミスとどれだけ頼めば気が済むのだと言わんばかりに、整然と並べられた。

目の前で機嫌良く微笑んでいる姉さんを見て、自分の姿と重ねる。比べれば比べるほど似ていない姉妹だ。

「姉さん、ほんと甘いもの好きだね」

「だっておいしいもの♪」

「そのうち太るよ」

「それは言わないで。気にしてるんだから」

本当に気にしているのだろうか…と疑ってしまう。

「甘いものは人を幸せにする魔法を持ってるのよ。店に入ったとき、みんな幸せそうに見えたでしょ？」

「…まぁ、たしかに」

「そんな仏頂面してないで、食べて♪」

紅茶を一口含み、ケーキに手を伸ばす。口いっぱいにチョコレートの甘味と苦味が広がる。思わず「おいしい」と言った私をニッコリと微笑んで見つめていた。

「ねぇ、姉さん」

「ん？　なぁに？」

「……好きでもない人から告白されたら、どうする？」

「あら、今度は告白されたの？」

「いや…ほら。たとえば、の話で」

瞬間的に誤魔化してはみたものの「ふーん」と言った姉さんには何でも見透かされているようで、効果はなかったかもしれない。

本当にこの人には敵わないなぁ…と思う。

手元にあるフルーツタルトを丁寧に切り分け口に運びながら「ん

ー」と何か考えている。そして手が止まったかと思うと「そうね」と話し始めた。

「好きではなかったらお断りするわね。だって、お付き合いする意味がないでしょう？」

「…そうだよね」

「少しでも好意があればまた別だけど？」

「そうなの？」

「そうでしょう？　お互いすごく好きで恋に落ちて…それでお付き合いする人なんて、ごく僅かの人よ」

カップを手に取ろうとした姉はふと動きを止める。

紅茶がなくなっていることに気がついたウェイターはテーブルの傍に立ちティーポットを片手にカップへ注ぐ。「ありがと」と言った姉はミルクを混ぜ香りを楽しんだ後喉へと通す。

「迷うってことは、好意を持っているってことかしらね？」

「…そう」

「そうねぇ。一目惚れだと「この人が好き」って自覚も実感もあるけど、そうじゃない場合は「好き」になった境界線ってないでしょ？」

「そんなもの…？」

「どちらにしても難しいわよね？　「好き」って自分で気づかないこともあるもの」

そう言うと持っていたカップを置き、目の前にあるケーキを美味しそうに口に運んでいた。

私もそれ以上は何も聞かず、少し溶けたチョコレートケーキを食べながら柊木先輩のことを思い出していた。甘い香りが広がる空間の中で、彼の笑顔が浮かんでは消え「いやいや」と首を振りながら思考を巡らせていた。

こうやって自分の気持ちがわからないまま何日も過ごし、学校へは行かないまま冬休みへと時間は流れていった――――

【第六章】彷徨う心の波　（三）晴れない空

三学期に入ると殆んど授業はなく学年末試験のためだけに登校していた。冬休みが終わって間もないというのに、まわりはもう次の休みにどこへ行くかという話題で持ちきりだった。

結局「考えさせてください」と言ったきり柊木先輩には逢っていない。向こうから逢いに来るということもなくずっと距離を置いたままだ。

自分の中で答えが出ないのだから、逢えるわけがない。

時間が空けばぼんやりと図書館で考え事をする日が増えていた。が、なぜかこういうタイミングに限って彼女が訪問してくる。ある意味感心してしまう。

コンコン

「瑠璃、いる？」

やっぱり、の登場にひとり笑っていた。

「何笑っているの？」

「なんでもない」

「そう？　ならいいけど」

そう言いながらふて腐れた顔でソファへ座り込む。今日も「アテ」が外れたに違いない。

「どうだった？」

「ダメよ。今日もいなかったわ。最近全然見れないんだもの、つまらない…本当に瑠璃は何も知らないの？　少し前まではこんなことなかったのに」

「…さぁ？」

本から目を離さず返事だけする私をチラッと見て「はぁ」と溜息を吐いた。

どうやら最近道場に行っても柊木先輩はいないらしく、昴さんや楠城先輩、それに他の部員しかいないようなのだ。
登校はしているようなので、相変わらず校舎内では親衛隊に追いかけられている日々が続いているようだが。その様子を見たことがない私は想像すらできないけど。

あんなに慕ってくれる人がたくさんいるのに、どうして私なんだろうと思ってしまう。私は何もしていないし何も求めてない。
一緒にいて、確かに居心地は良いかもしれないけどそれは昴さんと同じような気がしないわけでもない。
でも…
彼のことを思い出すと急に熱を帯びてくる。思い出すのはなぜか笑顔と優しい言葉ばかり。決して他の子には見せない作り物ではない笑顔。

（もう、わけわかんない…）

「――ねぇ？」
「え？」
「もう、聞いてた？」
「あ、ごめん。何？」
美桜に話しかけられて我に返った。
「だから、今日は瑠璃にお願いがあって来たのよ」
「…何？」
彼女はうふふと笑うとかばんから1冊の本を取り出す。差し出された表紙には「手作りチョコレートレシピ」と記載されていた。
瞬間、嫌な予感がよぎったが気がつかないふりをして彼女の顔を見る。

「――それ、どうしたの？」
「買ったのよ♪」
「ふーん…」
「今年は手作りに挑戦よ♪」
「はいはい、がんばって」
興味ないという態度で切替したが、どうやら伝わらなかったようだ。

「瑠璃も手伝ってね」
「はぁ？　なんで？」
「だって、ひとりじゃつまらないし不安なんだもの」
「だからって…私じゃなくても」
「お願い！！！　――ね？」
いつものパターンで上目遣いの攻撃だった。私にしても効果はないのに…と思いながらこのペースに乗せられてしまう。
「私、あげる人いないけど」
「どうして？　先輩たちは？」
「…まぁ、義理チョコなら」
「じゃあ決まりね。来週家に来てね、約束よ」
「はいはい」
義理チョコをわざわざ手作りするのもどうかと思ったが仕方ない。昴さんにはお世話になってるし楠城先輩も…もう大丈夫だよね。日頃のお礼ってことで渡せばいい。
問題は、柊木先輩だ。
当日親衛隊のどさくさに紛れて渡すか、近寄れないことを理由に渡さないか。そもそも用意する必要があるのか、とも思ったが「ついでだから」と自分に言い聞かせた。

翌週―

美桜の家のキッチンを借りてチョコレート作りに取りかかることにした。彼女の家は個人経営の病院で裕福な家庭ではあるが執事やシェフといった使用人はいなかった。何度か遊びに来たことがあるが、母親が専業主婦で家の事はすべてしていると聞いた。自分の母との違いに最初は驚いた。

「何か困ったことがあったら言ってね」

「うん、ありがと。ママ」

材料や調理器具などを用意してくれた彼女の母親は「隣の部屋にいるから」と出て行った。

目の前に並んでいるのは何やら想像と違い本格的なものだ。

溶かして固めるだけではないのか…と思いながら聞いてみると、せっかくだからチョコレートケーキに挑戦するという。何やら話が変わっていた。

レシピを見ながら手順通り進めていくが意外と重労働で思うようにいかない。

「ねぇ、瑠璃？」

「…何？」

手を動かしながら返事をする。顔を見るまでの余裕はない。

「柊木先輩と、何かあった？」

「え？　な、何…急に」

不意に投げかけられた質問に動揺したのか、持っていたボールをひっくり返しそうになった。彼女には告白されたことは言っていない。とてもじゃないが言えない。何も知らないはずの彼女の口から思いがけない言葉が出て、私の頭は少し混乱していた。

普段おっとりとしていて、妙なところで勘がいいのは困る。

そんな私の様子に気づかない表情で淡々と話し始める。

「この間ね第三音楽室で先輩に会ったの。瑠璃のこと待ってるように見えたわよ？」

「気のせいじゃない？」
「来たのがあたしだってわかった途端、がっかりしてたもの。でね
「どうしたんですか？」って聞いたんだけどしばらく黙ったままで。
帰ろうかと思ったとき「一条、元気？」って聞かれたわよ」
「ふーん」
「まぁ最近来てませんけどって答えたけど。ずいぶん淋しそうな顔
するんだなぁって思っちゃったわ」

特に何があったかまでは聞いていないようだ。あれから図書館に
ばかり篭って第三音楽室にはいっていない。避けている、といのも
あったしもし逢ったら…というのが引っかかっていたからだ。
「先輩って、瑠璃のこと好きよね」
「は？　な、なんで？」
動揺しているのがバレないように平静を装っていたつもりだが、
どこまで隠せているか自信はなかった。
「なんでって。見てればわかるわよ」
「…そう」
「うん、明らかに表情が違うもの。親衛隊の中でも結構噂になって
るわよ」
「そうなんだ」
「で、瑠璃はどうなの？」
「どうなの？って」
彼女はどういう心境で聞いているのだろうと思う。自分の好きな
人が、別の人を好きかもしれないなんて苦痛じゃないのだろうか。
「あたしはね、先輩に対してはただの憧れかなって思ってるわ。た
しかに格好良いけど…それだけっていうか。瑠璃に逢いたがってい
る先輩を見ても嫉妬とかそういうのないわ」

手は完全に止まっていた。ボールの中のケーキ材料をぼんやりと
眺めながらどう答えるべきか考えていた。

「…冬休みに入る前にね、告白されたんだ」

意外でもなかったのか彼女はたいして驚かず黙って聞いていた。

「――でもよくわからなくて」

「そうだったのね」

「ずっと逃げてる」

「相談してくれればよかったのに」

「…そうだね」

私は美桜に嫌われると思っていたのだろうか。彼女はこんなにも心が広いというのに。相談しなかったのは彼女を失うのが嫌だったというのもあったと思う。時間がたてばそのうち何かが変わるかも…という淡い期待もあったのかもしれない。

「あたしは瑠璃の見方よ」

そう言って微笑む彼女の姿に救われた気がした。それでも私の心は晴れなかった――

【第六章】彷徨う心の波　（四）揺らぐ香り

バレンタイン当日―

初めての手作りチョコレートケーキは決して上出来とは言えなかったが、それでもなんとか形になっていると思う。食べやすいように一口サイズに焼き上げ丁寧にラッピングした。

今まではつまらないイベントのひとつだと思っていたが、自分がこうやってチョコを持って登校すると、まわりの子女たちが落ち着きがないのもなんとなくわかる気がする。

昂さんと楠城先輩のところには美桜と一緒に訪れた。

先に生徒会室へ向かう。さすがに昂さんも人気者だけあって部屋の入り口には長蛇の列ができている。出てくる彼女たちの表情が明るいのは昂さんが優しいからだろう。

「昂さん、どうぞ」

「瑠璃、と赤嶺さんもありがと」

チョコを受け取った彼はラッピングを解き、ひとつ口に投げ入れる。そして「おいしい」と言って微笑んでいた。まさかすべての女子に対してこれを繰り返してないだろう…と思ったが彼ならやりかねない。部屋の隅に置かれたテーブルの上には開けられた節のある箱やら包みやらが積み上げられている。

そして帰ろうとした私たちを引き止めて「俺からのバレンタイン」と薔薇の花を一輪差し出す。こんな恥ずかしいことをサラッとやってのけるのも彼の特徴だ。

制服の胸ポケットに添えられたピンクの薔薇は、ハイブリッド・ティー系の「かがやき」という香りの少ない種類のもので、まだ五分咲きほどの花弁は邪魔にならないちょうどいい大きさだった。

それでもそれが束になれば香りは廊下中に放たれる。チョコレートの香りと混ざって酔いしれそうなほど艶やかな空間と化していた。

その足で図書館へと向かう。

外へ出るともう、先ほどのような独特の香りは気にならない。

こちらもまた列を成していた。昂さんに比べれば少ないほうだが、並んでいる彼女たちは婚約者の存在を知ってるのだろうかと思ってしまう。廊下も階段も人が多く図書館がその役割を果たしていない唯一の日かもしれない。

部屋に入って私は驚いた。

今日は来客が多いからか扉は開けられたままだ。ノックすることなく中を覗くと正面の机に楠城先輩の姿があり、そして、斜め前のソファには二階堂さんが座っていた。

紅茶を片手にさぞ自分お部屋にいるかのような自然さで、違和感はないに等しかった。

「先輩、これどうぞ」

「あぁ、ありがと」

差し出された手に渡すとこちらもすぐに箱を開け一口食べる。

「今年も盛況ね、崇臣。毎年お返しが大変だわ」

「去年に比べると少ないんじゃないかな？　知ってるだろ？」

「うふふ、そうね。でも減ってるっていうのはちょっと淋しいわ」

この光景はここに来る誰もが知っている事実のようで、私が何も知らなさ過ぎただけのようだった。みんな知っていて想いを寄せているのだ。

どんなに言い寄られても揺るがない楠城先輩と、決して嫉妬心を見せない—実際はわからないが—二階堂さんの姿が羨ましかった。

きっとこの先もこうやって穏やかに時間を過ごしていくのだろうと思う。

（この人には、敵わないな…）

改めて実感し、私はこの日ようやく彼のことを「過去」と割り切れるようになった。

図書館を出た後、美桜は「みんなが待ってるから」と親衛隊と合流すべく行ってしまった。手元に残ったチョコを片手に行くあてもない私はとりあえず第三音楽室へと足を運ぶ。

石畳の上を歩いていると背後に気配を感じ取り振り返った。

「…二階堂、さん？」

まさか彼女が追いかけてきているなど夢にも思っておらず、それ以上は言葉が出なかった。今日も制服を着ていない彼女はもう学生には見えない。

長い髪をフワフワとなびかせながら私の目の前で立ち止まる。

「突然、ごめんなさいね」

「あ、いえ」

「貴女、一条さんね？　崇臣から聞いてるわ」

「二階堂さん、何でしょう？」

「あら、柚莉亜でいいわよ。一度ご挨拶したかっただけよ」

そう言いながらニッコリと微笑んでいた。

挨拶と言われても…私は困惑していた。紫苑兄さんあたりならそれも必要かもしれないが、なぜわざわざ私のところへ来たんだろうと疑問が浮かぶ。特に接点はないはずだ。そんな私の思いを知ってか、彼女は「深い意味はないのよ」と付け加えた。

「紫苑さんによろしくね。そうそう、もしあの子達のことで困った

ことがあったら遠慮なく言ってね」
「…はい」
両手を握り締めてきた彼女の表情からは何も読み取れなかった。
深く考えず好意に思われているのだろうと合点し「失礼します」とその場を後にした。彼女も軽く手を振り図書館へと向かっていった。

久しぶりに入る第三音楽室は驚くほど静けさに包まれていた。窓の外を見ると中庭にはまだ多くの女子が大事そうにチョコを持って歩いていた。私は持っていた箱をピアノの上に置き腰かける。

カラーン、ゴーン――――
午後の鐘が鳴る。

十分程たった頃扉が開いたのが見えた。
「……やっと逢えた」
久しぶりに見る柊木先輩の顔はやはり笑顔で、不覚にも心地よさを感じ取ってしまった。ピアノの上に手を伸ばし、彼の顔を見ないまま片手で差し出す。

「…先輩、これ…どうぞ」
「おー、さんきゅ」
一瞬チラッと見えたその表情はまるで新しい玩具を買ってもらった少年のような、キラキラとした輝きを放っていた。なぜか心臓がドキッと波打つ。
「…ぎ、義理チョコですからっ」
「それでも、ありがとな」
彼の顔を直視できない私の頭をクシャっと撫でる。
その瞬間私の全身を一気に熱い血が駆け巡り、倒れそうなほどに

目眩がしていた。鼓動はだんだん速くなり座っているにも関わらずクラクラとしている。

息苦しさが込み上げどうしていいのかわからない私は「じゃあ」と言ってかばんを持ち、逃げるように廊下へと走り去った。後ろで声をかけられた気がするが、それに応じるほどの余裕はもう残っていなかった――

【第七章】温かい場所で　（一）桜舞う下で

眩しい光がカーテンの隙間から射し込んでいる。
寝室にある大きな窓は、気づけば全面に太陽の光を受け止め輝きを放っている。
私は顔を少しだけ出すがあまりの眩しさに目が開けられない。
うっすらと靄がかかったような風景の中にシルエットが映る。目を細めて見ているとその人影は窓を開け室内に風を通した。

「お嬢様、お目覚めの時間です」
「…まだ寝る」
「いけません。起きて下さいませ」
「……」
窓から入ってくる風はまだほんの少し冷たさが残っている。
「あちらに紅茶をご用意しています。それとも珈琲のほうがよろしいですか？」
「…珈琲」
「かしこまりました」
そう言って執事は寝室を出て行く。しばらくすると隣の部屋から珈琲の香りが漂ってきた。仕方なくベッドから身を起こし、扉を開ける。
ソファにかけると目の前には珈琲とクロワッサンが用意してあった。

今日から新学期、すなわち二年に進級する。
そのため時間どおり起こされたのだ。今日は遅刻させるわけにはいかないと思ったのだろう。そうは言っても私がなかなか起きないので、若干時間をおしてはいるが。
まぁ進級式には間に合うだろう。通常ならその前に中央塔までク

ラス表を確認しに行かなければならないが、クラスは成績順に分かれているので私の場合は確認するまでもなく今年もA組だ。
珈琲を飲んだ後、制服に着替える。玄関ではいつものように車が待機していた。

桜の花弁がヒラヒラと舞う中、中央塔へ向かう。なんとか遅刻は免れたのもも、すでに人だかりができていて掲示板には近づけなくなっていた。

（まぁ、いっか―…）

そう思って人混みに背を向けた時、後ろから不意に抱きつかれた。顔にかかる長い髪と甘い香水の香りでそれが美桜だとわかる。
「おはよ」
「おはよ。今年も同じクラスよ」
「そっか、よろしく」
「そんなこと言って、教室には滅多に来ないじゃない」
「それは許して」
うふふと笑いながら私の体から離れる彼女の指にキラッと輝く何かが目に入った。今まであんなものしていただろうかと、記憶を巡らせる。
中央塔を出て講堂へ向かう途中で聞いてみた。

「ねぇ、美桜」
「何？」
「それ、どうしたの？」
私が彼女の薬指を指して言うと、手の甲をこちらに向けて嬉しそうな顔を向けた。そうすると先ほどよりもより一層輝いている。た

ぶん太陽の光に当たっているからだと思うが。
「うふふ、気がついた？　実はね…春休みの間に彼ができたの♪」
「は？」
突然の報告に頭がついていかない。
「大学生なんだけどね、モデルの先輩なの。すごく格好良いのよ♪
告白されたんだけどね、即おっけーしちゃったわ」
「あ、そう」
そう言えば春休みに入る前、雑誌モデルとしてスカウトされたと聞かされた気がする。撮影の時に知り合った人のようだ。ついこの間まで柊木先輩を追いかけていたような気がするだけに、意外な報告だった。
「今度紹介するわね。あ、後でその雑誌見てね」
「うん」
「瑠璃もがんばってね」
「…何を？」
「何をって…柊木先輩のことに決まってるじゃない」
「なんでそうなるの」
「あたしね、もしかしたら瑠璃に遠慮させちゃってるんじゃないかって。ほら、もう気にすることは何もないでしょ？　だから、ね？」
「別に、そうじゃないけど…」
不意に心を見透かされたような気がした。まったく気になっていない、と言うと嘘になるからだ。でももうそれだけではないということも、どこかでわかっている。

告白されてからずいぶん時間が経っている。
その間ほとんど顔を見合わせていない。かろうじてバレンタインにチョコを渡したが、それ以来登校せず新学期を迎えた。
ホワイトデーには美桜の手を渡ってプレゼントが届いたほどだ。
それは私が会うのを拒んだためで、それでも何とか渡したかったの

か人伝いになったという訳だ。
ブランド名が記された箱は、大きさからいっておそらくアクセサリーだとわかった。だがまだ未開封のままだ。
返すことも身に付けることもできず、行き場を失った小さな箱。
それを見るたびに溜息しか出てこない。
もう私のことは諦めたのではないかと思うこともあった。それならそれでいい、もう何も悩む必要がないのだから。
自分でもどうしていいのかわからなくなっていた。

彼の気持ちを受け入れようとする自分。
彼に対しての気持ちがわからなくなる自分。

そんな葛藤の中、美桜の話を聞いて心が揺らがないと言ったら嘘になる。もういいんじゃないのか、と。誰にも何にも遠慮せず彼に気持ちをぶつけても。
「あたし、応援してるからね」
「…うん」
そう言った後彼女は自分の彼の話をしていた。
とても嬉しそうに話す姿を見て、本当に幸せなんだなと感じた。
私にもこんな顔ができる日が来るのだろうか。

（もう呆れてるかも…）

告白されて迷ったのはなぜだったかと考える。
こんなにも苦しい想いをするのはどうしてか。

私はずっと自分の気持ちに向き合うのを避けていた気がする。失恋の後だったからだろうか。自分が傷つかないために、自分を守るために。でもそれが他の人を傷つけているとも知らずに――

【第七章】温かい場所で　（二）過去と今と

進級式が終わった後の講堂は翌日の進学式の準備でザワザワとしていた。毎年のことなのだが高等部入学組みは多いため、初等部・中等部に比べると一大イベントだ。

その進学式の準備を取り仕切る昂さんの姿が見えた。

そう言えば、ホワイトデーの日にお返しを持って家まで来たが、私が誰にも会いたくないと言っていたためプレゼントだけ置いて帰ったような記憶が蘇る。後でかなり失礼な行動だったと反省したが、それ以来会う機会がなくそのままになっていた。

楠城先輩にもお礼は言えていない。後で図書館を覗いてみようと考えて、昂さんの後ろ姿に声をかけた。

「昂さん」

「ん？　あぁ瑠璃。久しぶり」

「大変そうだね」

「まぁな。でももう慣れてるよ」

生徒会という役職がこれほど似合っている人も他にいないのではないかと思ってしまう。誰からも頼られて、きっとおじ様の会社でも本領発揮できるだろう。まさにトップに相応しい人物なのだ。

「――――どうした？」

黙っている私を気遣ってか顔を覗き込むように聞く。

「え？　あぁ。なんでもない」

「そうか？　ならいいけど」

「昂さん、ホワイトデーのお返しありがと」

こちらに顔を向けていない間にお礼を言う。ずいぶん遅くなったしサラッと「うん」と受け流してもらえればと思ったのだ。だが、予想に反して黙ったまま私の顔を見た。

「…それ、暁に言ってやれ」
「え？」
いつになく真剣な表情に気圧された。その後に続く言葉が出てこない。
「会ってないんだろ？　…暁から聞いてる」
「えっと、…うん」
「あいつのこと嫌いなのか？」
「…そうじゃないけど」
昂さんはきっとすべてを知っているはずだ。柊木先輩が何も言わなくてもわかるに違いない。情報網は広いし勘も鋭い。もしかしたら私の気持ちにも、私以上に理解しているかもしれない。

「俺が言うのもなんだけどな…あいつ、瑠璃に会って変わったよ。それまでも俺らの前では本心見せてたけど…あんな複雑な環境で育ったのに、お前の前じゃすっげー素直に笑ってる」
「そうかなぁ」
「だから俺は応援したいわけ」
「ふーん」
「ま、瑠璃が迷惑じゃなければだけどな」
最後には悪戯っぽい顔をして「まるで親心だな」と付け足した。そう言われて思わず笑ってしまう。どこまで本気でどこから冗談なのか。
でも、ほんの少し沈んだ気持ちを軽くしてくれた気がする。暗闇を歩いていてようやくほんの小さな光を見つけたような、そんな気分がしていた。
笑っている私の頭をポンポンと軽く叩き、背中を押された。私の足は一歩前へ出てそのまま歩き出していた。

本当はずいぶん前から自分の気持ちに気がついていたと思う。まさか、と思うこともあったが気がつけば彼のことしか考えていない時間も多かった。
誰かに「大丈夫」と背中を押してもらいたかっただけなのかもしれない。そうやって一歩踏み出す勇気をくれたのが昂さんだ。

そんなことを考えながら久しぶりに第三音楽室へと向かっていた。
思えばここで告白された。突然に、だ。

あの日は自分の気持ちがまったくわからずに、驚いてはぐらかすように逃げ帰った。まともに彼の顔も見ずにひとり動転して。
あの日彼はどんな気持ちで私に伝えたのだろう。
私も最初に告白した時、かなりの勇気がいった。
ダメだとわかっていてもやっぱり哀しくて泣いた。

（じゃあ、あの日の彼は…？）

私が去ってひとり残されたこの部屋で何を想い、何を考えていたのだろう。
やはり哀しみに更けたのだろうか。
そうやって知らない間に、彼のことを傷つけてきたのだろう。
私の行動ひとつひとつが、彼の心を深く沈めていたのかもしれない。

（今さらながら、自己嫌悪…）

きっと今なら素直になれる。

（私、柊木先輩のことが…好き―…）

ようやく自覚した、といか自分に言い聞かせることができた。だが、今さらどうしたものかと考える。自分から伝える、それしか仕方ないのだが何と言い出せばいいのか考えてしまう。

窓の外を見ると明日の準備に行き来する人々が見える。中庭も華やかに飾り付けられて歓迎ムード一色だ。今は校舎内に残っている生徒のほうが少ないだろう。

正面の校舎にも人影は殆んど見えない。誰も通らない中央校舎の窓の向こうの廊下を見ていて、ふと思い出した。

（そう言えば…窓越しに見たのが最初か…）

今とは違って本当に誰もいない校舎にポツンとひとり立っていた彼。

こんな春の暖かい陽気ではなく、梅雨が明け夏が近づいて太陽が眩しいほど輝いていた季節。もう一年近く前の話になる。

あの暑い日、ぼんやりと窓の外を見ている私が彼の姿を捉えたのだ。向こうはいつから見ていたのか知らないけれど。

あの日の彼の印象が最悪だったことを思い出すと可笑しかった。いかにも軟派な雰囲気で、正直好みじゃなかったのだから。

その日のことを彼は覚えているだろうか、と思う。

あんな一瞬の出来事を覚えている自分に少し驚いた。本来なら思

い出すこともない些細な記憶。元々記憶力はいいが興味のないことは引き出しの奥に片付けるように、片隅へと追いやってしまう。
鮮明に覚えていることといえば、よほど印象が強いか興味があるか。彼のことはそのどちらかだったということだろうか。

（印象、強かったかな…）

綺麗な顔は美桜や姉さんで見慣れていた。だがそれが男性となると話は別だ。確かにあの顔は印象に残る。良い意味でも悪い意味でも。

（あんなこと、さすがに覚えてないだろな―…）

そう考えている自分が可笑しくて笑ってしまった。時間がたてばこうも人の気持ちは変わっていくのだ。あんなに人には興味がなかったのに、今では相談したり応援されたり誰かのことを考えたり。
外はまだ慌ただしい雰囲気に包まれていた。だがここだけは時間が止まったように静寂が広がっている。
それを破るかのように扉の向こうからカタッと音が聞こえてきた

―――

【第七章】温かい場所で　（三）幸せの瞬間

光に反射しているシルエットはそれだけで誰だかわかる。中に人がいるとは思わなかったのか扉の前で躊躇していた。だが、ゆっくりとした足取りで静かに近づく。

「――――先輩」

「やっと逢えた」

窓から差し込む光が彼の顔にかかり、茶色い髪がキラキラと光を零す。ニッコリと笑っている彼に先ほどの疑問をぶつけてみた。

「…ねぇ、先輩」

「なんだ？」

「最初に会ったときのこと、覚えてます？」

「なんだよ、急に…」

「なんとなく、聞いてみただけです」

そのまま黙ってしまたので考えてるのかな、と思った。きっと窓越しに見ていたことなんて覚えていないだろう。でも楠城先輩に道場へ連れて行ったもらったときのことなら覚えているだろうか。

しかし私の予想とは違う返答だった。

「…覚えてるよ」

「え？」

「お前のこと、窓越しに見てた」

そう言って私から視線をそらし窓の外に目をやる。照れているのか言ったことを後悔しているのか複雑な表情をしている。もしかしたら彼も私と同じ考えだったかもしれない。

あんなこと覚えているはずがない…

しかし意外なほどにふたりとも覚えていた。きっとあの時から運

命の輪は回り始めていたのかもしれない。お互い惹かれあうように。
「そっか、先輩も覚えてたんだ」
「も、って…」
「はい。私も覚えてますよ」
「そっか」
意外な台詞だったのは一目瞭然だった。
「お前、あのとき笑ってくれなかったよな」
「だって、知らない人ですから」
「そうだけどさ、ありゃないだろ」
「…第一印象は最悪でしたから」
「はぁ？　俺、何もしてないだろ？」
「あくまで、見た目…ですから？」
参ったな、といった感じで私の顔を見る。私がクスクスと笑い出すと彼も髪をかきあげた格好でつられて笑い出した。

「あの時はさ、冷たい子だなって思った」
「そうですか？」
「そうだろ？　背中向けてそれっきりだたからな」
「うーん…」
「あの日からずっと気になってて、崇が連れてきたときは驚いた」
「そうだったんですか…」
今さらながら過去の心境を聞かされて、どんな顔をしていいのかわからない。だって最初は苦手だったし、嫌われていると思っていたから。

どんな想いで私を見ていたんだろうと思う。
こんなにも長い間彼の気持ちはどこを彷徨っていたのだろう。
暗闇の中をあてもなく歩いていたのは、私ではなく彼のほうだったのだ。
そんな彼のことを想うと胸がズキンと痛み出す。

彼の顔を見ていられなくなった私はあることを思い出してかばんを探る。そして中から小さな箱を取り出し両手でそっと掴む。
顔を上げて彼の顔をじっと見た。
「あの、先輩…」
「なぁ、一条…」
ふたりの言葉が重なりそのまま沈黙が続く。どちらもどちらが口を開くか待っている。

「――――…俺と付き合ってくれ」

それは彼からの二度目の告白だった。
期待していなかったわけではないが、まさかの発言に私は何も言えず、ただ黙って頷くことしかできなかった。コクッと頭を下げて床を見たままの姿だったが、それを返事だと理解した彼はそっと肩を抱き寄せた。

「せ、先輩！？」
「よかったー」
そう言いながら両手で抱きしめる彼の姿は、今まで見たことのないような笑顔で見ているこっちが恥ずかしいくらいだった。
よほど嬉しかったのか抱きしめる腕に力が入る。
「せ、先輩…く、苦しい――――」
「え？　あぁ、ごめん」
「いえ」
「嬉しくて、つい…」

自分の腕が胸の前にあったため余計に苦しかった。コホッと咳き込むと頭をクシャクシャと優しく撫でてくれた。その手がやたらと温かく感じるのは私が熱を帯びているから？　それとも彼の愛情のおかげ？

もう世界が変わりすぎて何もわからなくなってきた。

少し体が離れた私は持っていた箱を彼に向けて差し出す。その箱に見覚えがある彼はそっと受け取った。

それはホワイトデーに彼から貰ったプレゼント。

行き場をなくしてずっと私のかばんに入ったままだった。

「これ…先輩の手でつけてもらいたい」

「あぁ」

そう言って彼は箱にかけられたピンクのリボンに手を伸ばし優しく解く。

箱の中にはネックレスが入っている。

彼はそれを丁寧に取り出し持っていた箱をピアノの上に置く。宙に舞うネックレスは眩しい輝きを放ってふたりを見ているようだ。

ゆっくりと私の首元へ近づけると両手を広げ、首筋へかける。そのとき彼の息がフッとかかりくすぐったいような、心地良いような不思議な感覚に囚われていた。

「――――はい」

「ありがとう…」

胸元で小さく輝く四葉のクローバーが、キラキラと揺れている。

「これからはずっと一緒だからな」

「…苦労しそうですね」

「っ！！！　お前、一言多いぞ」

「冗談ですって～」

「お前なぁ～」

甘い空間はまだ苦手だ。ちょと憎まれ口を叩いているくらいのほうが心地良い。
ようやく素直になれて、静かな部屋の中ふたり幸せな光に包まれていた。永遠に続くと思っていた幸せな時間。

でも…
私たちの間を脅かす影がじわりじわりと迫ってきていた。
物音も立てずに静かに近づく黒い影に、このときはまだ気づきもしなかった———

【第八章】黒い影の思惑　（一）降り注ぐ嵐

心地よい風が吹く。
中庭に立つ木々は新緑の葉を芽吹かせ、新しい香りを振り撒いていた。そのカフェテラスに向かい合うように座っている。テーブルに置かれた紅茶はより一層深い色で表面に波を立てていた。
ちょうど昼食が終わり、食後のデザートタイム。ティーカップに口をつけ一口飲んでからまわりをキョロキョロと見渡した。

「――なんで、こんな目立つところに？」
「いい季節だし、たまにはいいだろ？」
「まぁ…」
「落ち着かないのか？」
「美桜以外の人と来たのは、初めて」
「そりゃ、光栄だ」
中央校舎一階の食堂から広がるカフェテリアは、いつもと変わらず人が多い。中庭に伸びるテラスに置かれているソファ席でゆったりと食事を楽しんだ。そのことに何か違和感を感じる。

誰にも邪魔されず会話を楽しみながら食事をするということは、もちろん当たり前のことなのだが、今まではそれができないからと避けてきた。
しかし突然彼に誘われて今日初めてふたりでここに座っている。
「…何か変じゃない？」
「何が？」
「静かすぎて…」
「そうか？　人が多くてうるさいと思うけどな」
「いや、そうじゃなくて」
「中よりは静かだな。あっちは開放感がなくて息が詰まりそうだ」

「いや、そうでもなくて」
はっきりと言わない私に怪訝な顔を向ける。「はぁ」と溜息を吐いてまわりを気にしながら口を開いた。
「いつももっと囲まれてなかった？」
「あぁ」
ようやく理解してくれたようだ。そう、いつも彼は親衛隊に囲まれていて食事時ですらゆったりとした時間は過ごせなかったはずだ。何度か上から見たことがあるが、次々へ前に座る人が変わり大変そうだな、と思ったことがある。
それなのに、今日は誰も近づいてこない。何人かがこちらを見ているがそれだけだ。
「最近はこんなもんだ」
「そうなの？」
「そうだよ」
「なんで、急に？」
「あいつらは、別に俺じゃなくてもいいんだよ」
「え？」
「誰かを追いかけている自分が好きなだけだ。恋してる自分に酔ってる…って言ったらわかり易いか？」
「うーん…」
言われている意味はなんとなくわかったが、なぜ彼から遠ざかっていったのかは今の説明ではわからない。
「俺が瑠璃と付き合ってるって知ったらそこで興味は半減。で、新しいターゲットを見つけたら、もう俺はお払い箱ってわけだ」
「あぁ、なるほど」
なんて単純にできているんだと、感心してしまった。所詮「憧れ」なんてそんなものなのかと考える。「恋と憧れは違う」そういえば姉さんが以前そんなこと言っていた記憶がある。本気で想っている

人は少なかったというわけだ。
近寄っては来ないが、こちらをチラチラと見ている生徒はまだ憧れを抱いているのだろう。ずいぶんと人数が減って静かになったものだ。

「…淋しい？」
「あ？　んなわけないだろ」
「そっか」
なんだか嬉しい言葉だった。ようやく彼も「人並み」に学園生活を送れるようになったということか。ほんの数ヶ月前までは考えられなかったことだ。
彼と付き合うと決心したとき、多少の障害は覚悟していた。以前第三音楽室に閉じ込められたこともあり、それなりに苦労すると思っていたからだ。
それなのにこうして堂々とふたりで食事をしている。なんだか夢でも見ているような不思議な感覚だった。夢なら覚めないで欲しいが。
このまま何事もなく穏やかな日常が永遠に続けばいい、そう願うのは今までが波乱だったからか、嫌な予感を察していたかはいささか不明だ。

しかし、このときすでに何かが迫ってきているのは確かだった。
ティーカップに手を伸ばした時、テーブルに影が伸びるのを捉えて顔を上げた。私の背後から近づいてきたその影の持ち主は、サラッと横を通り過ぎ彼の真横に立っていた。
よく顔を見るが知らない人だ。しかも制服を着ていないので高等部の生徒でないことは確かだ。私服で学園内をウロウロしているといえば、大学部の生徒…ということになる。
こんなところに何の用なのだろうと思った瞬間、それは彼に抱き

ついた。
「暁ー！！！　久しぶりねー！！！」
一瞬の出来事に何が起こったのか把握できず、キョトンと目の前の光景を見ていた。
「美沙都！！！　…お前なんでここに！？」
「暁に会いたくなって…来ちゃった♪」
「来ちゃった…じゃねーよ。離れろ！！！」
「やーん、冷たいじゃない」
「うるせっ、重いんだよ！！！」
「そんなこと言っちゃってー、相変わらず可愛いんだから」
彼女は抱きついた手をスルスルと離したかと思うと、彼の隣に座り込み足を組む。そして体と顔をピタッと彼に近づけクスクスと笑っている。
「…暁」
彼女は私にはまったく興味がなかったようだが、彼の名前を呼んだことでこちらをじっと見ていた。まるで品定めするかのような鋭い瞳で。
「――その人、誰？」
笑顔はどこかに忘れていた。それを見て彼女は私から視線をそらし彼と向かい合う。そして頬杖をつき首を傾げて言った。
「ねー暁？　このコだーれー？」
「俺の彼女」
「えー！？　暁が？　こんな小娘とー？　趣味変わったんじゃないのー？」

（小娘って…あんまりじゃない？）

そういう貴女は「おばさんでしょ」という台詞はかろうじて呑みこんだ。

「…離れてもらえません？」

どう見ても年上なのでとりあえずは敬語でお願いする。

彼女はしばらく考えるフリ―少なくとも私の目にはそう見えた―をして足を組み直した。真横に置いてあったかばんを手に取ると立ち上がり彼の顔を見た。

「暁、また来るわね」

「もう来んな！！！」

その言葉を聞いていたかは定かでないが、さらりと身をかわし中庭を歩いていった。まわりの生徒にかなり注目されていたが、まったく気にする様子もなく消えていった――

【第八章】黒い影の思惑　（二）刺さる敵意

結局何だったんだ、と思ったところで昂さんと楠城先輩が背後から現れた。そして昂さんは私の隣、楠城先輩は彼の隣に座り珈琲を頼む。

座るなり昂さんが口を開いた。

「暁、今の美沙都だろ」

「あ？　あぁ」

「何しに来た？」

「しらねーよ、俺が聞きたいくらいだ」

「そうか…なんか嫌な予感するな」

「美沙都、久しぶりじゃない？　一年以上見てないでしょ？」

「そうだな」

「高等部に来るなんて、珍しいよね」

その会話を聞いていて3人共通の知り合いだということは読み取れた。だが昂さんの表情は硬い。何か悪い思い出でもあるのだろうか。

とりあえずどういう人か気になるので聞いてみることにした。

「今の人、誰？」

特に誰に質問したわけでもない。答えてくれるなら誰でもいいと思ったが反応は遅かった。「ふう」と一息吐いて昂さんが答えてくれた。

「あいつは俺らのニコ上で大学部の紅美沙都（くれないみさと）だ。俺らが高等部に進学したときに、暁に目をつけたらしく一時つるんでた。本人は暁の彼女気分だったみたいだ。よく一緒にいたからな」

「付き合った覚えはねーよ」

「だから、「本人は」って言っただろ？　大学部に行った途端興味なくしたのか、離れていって。てっきり大学部で好き勝手してると

思ってたけど…なんだろな」
「さぁな」
「今さら…だからな」
「そうなんだ…」
どう答えて言いかわからなかった。
あまりに突然の出来事だっただけに、状況を把握するだけで精一杯だった。昂さんたちの珈琲が運ばれた頃にはすっかり話すのも忘れ考え事をしていた。

（なんか、厄介なことになりそう…？）

多少の障害は覚悟していたが…あれは多少では済まない様子だ。去り際に見せた彼女の顔が脳裏に焼き付いていた。
何か企んでいるような、獲物を狙うような瞳。
黙ったままの私を気遣ってか「何かあったら言えよ」と昂さんに念を押された。とりあえず「うん」と答えたもののそのときは上の空だった。

午後の鐘が鳴った後、大学部へ向かうため高等部を後にした。と言っても、大学部まではかなり距離があり歩くには遠すぎる。迎えの車を早めに呼び出し、その足で大学部へと送ってもらうことにした。
暁たちの二歳年上をいうことは姉さんと同級生のはずだ。気にしすぎかもしれないが用心するに越したことはない。何か知っていることがあればと淡い期待を胸に大学部の中央時計塔の前を歩いていた。
待ち合わせをしているカフェテラスに向かっているところで足が

止まった。
「あら…あんたさっき暁といたコじゃない」
「…さきほどは、どーも」
頭を下げたが彼女は腕組をしたままこちらを見ている。
「こんなとこうろついて、何？」
「別に」
「まさか、あたしのこと探りに来たの？」
「そんなわけないでしょう？」
「ふーん…だったらいいけど」
「じゃあ、約束があるので」
それ以上彼女と睨み合っていても意味がないと思い立ち去ることにした。
彼女と横を通り抜けた後、背後から先ほどとは声の質が違う彼女の台詞が投げつけられた。それは一瞬誰だか迷うほど別人だった。
「あんたに暁は渡さないわ」
強い憎しみのような深い闇を纏った台詞だった。私は足を止めず、振り返ることもしないでその場をやり過ごした。

『美沙都は交友関係が派手だ――――』
これが姉さんから知りえた情報のすべてだった。特に接点がないらしく詳しいことはわからないと言われ「あくまで噂よ」と付け足された。
特に遊び相手に困った様子はなく、わざわざ暁に会いに来た理由までは探れなかった。安直に考えると、暁の彼女だと思っていた節があるため恋しくなってよりを戻そうと現れた…というのが妥当な線だろう。「暁は渡さない」と言っていたし敵視されているのは明らかだ。

（はぁ、めんどくさい人が現れたなぁ…）

正直ウンザリしていたので考えることを止めた。また高等部に来るかもしれないが、出会ってもカフェくらいだ。さすがに校舎までは入って来れない。なるべく顔を合わさないようにして刺激しないよう警戒すればいい。

（私の知らない、暁の過去か…）

考えたことがないといえば嘘になる。あれだけモテるのだ。今までに彼女のひとりやふたり、いても可笑しくないだろう。ふたりのやり取りを見ていて、彼女が一歩的に言い寄っている割には暁の態度は他の子と違っている。

あの話し方は多少なりとも心を開いている人間にしか見せないのだから。やはりそれなりに親しかったのだ、と考え付く。そういえば柚莉亜さんとも同じような反応だったような気がするが、気になるのは昂さんのあの硬い表情だ。

だが、過去に何があったかまでは相手が言わない限りこちらからは聞かない。

それに、私にとっては過去よりも今のほうが大事だった。

【第八章】黒い影の思惑　（三）笑顔の刺客

昼休み―
いつものようにカフェで暁を待っていた。
中庭に面している一段高いテラスの一番奥、広めのソファ席に座りハーブティーを飲みながら本を読んでいた。この場所はずっと暁たち三人で使用していたらしく他の生徒は座れない。暗黙の了解で彼らの場所として認知されているのだ。
食事の前だったので珈琲や紅茶を避け、カモミールのハーブティーを頼んだ。すっきりとした味と香りが口いっぱいに広がる。
食堂の中が賑やかになりカフェにも人が現れだした。背後に誰かが立っているのに気がつき顔を上げる。本来彼が座るべき場所に腰かけたのは見知らぬ男子生徒だった。

「――――そこ、人が来るんだけど」
ネクタイの色を見るとワインレッドだ。ということは一年生だ。ここの暗黙のルールを知らないのか。それにしても場所はいくらでも空いている。相席など必要ない。
そんな私の思考をよそに目の前の少年はニッコリと微笑んで見ている。
「一条先輩ですよね？」
「…それが何か？」
「僕、ずっと先輩に憧れていたんです」
「それはどーも」
変な子だと思いながら視線は本に向けていた。顔を合わせて話す必要はない。もうすぐ暁も来るだろうし、いつまでも相手はしていられない。

「柊木先輩と別れてください」
しばらく黙っていた少年から出た台詞は、私の顔を上げるには効果的なものだった。
「…は？」
「ですから、柊木先輩と…」
「いや」
同じことを繰り返して言おうとする少年の言葉を制し、相手の顔を見据え強い口調で言い切った。
「――君にそんなこと言われる筋合いはない」
その言葉を聞くと一瞬私から視線をそらし遠くを見た。何かを確認したのか再びこちらに顔を向けてニッコリと微笑んだ。
「また、来ます」
それだけ言うと食堂の中へと姿を消した。名前も名乗らずに。

「誰だ？」
直後、入れ替わるかのように暁と昂さんがやってきた。手に持っていた本を閉じソファの上に置く。テーブルの上のハーブティーはすっかり冷めていた。
「知らないコ」
「何話してた？」
「え？　あぁ…なんだろ。先輩と別れてくださいって言われただけ」
「はぁ？　なんだそれ」
「私にもよくわからない」
「気にすんな」
深く考えずに話している傍で昂さんは黙ったまま何か考えているようだった。そして聞こえるかどうかという声でポツリと呟いた。
「あいつ…見たことあるな」
昂さんなら顔も広いし、下級生に知り合いも少なくないだろう。普段ならそんな深刻な顔をして言うことでもないような気がする。

それが少し気になった。
「そうなの？」
「んー、でもどこで見たか思い出せない」
「知り合いってわけじゃないんだ」
「そうだな。どこかで見た、って程度だ」
「そりゃ同じ学園だからな。見たことある奴なんて数えられないくらいいるだろ？」
「そうなんだけど…そういうのじゃない」
その後も昂さんは思い出そうとしていたようだが、駄目だったようだ。

「出てこないな」
「気にしなくていいんじゃねーのか？」
「…そうだな」
「っつーか、昂の記憶力って相変わらず、すげーよな」
「そうか？」
「まぁ、さすが生徒会役員ってとこ？」
「お前らが知らないだけだ」
複数形にされたということは私も含まれているのだろう。悪戯っぽく笑う昂さんはいつもの姿に戻っていた。

食堂のほうがざわついているなと視線を動かす。そこには確かに見るものを惹きつけるオーラを放ったふたりが歩いていた。
ふたりはそのままテラスへ移動し私たちの前で立ち止まる。それは楠城先輩と柚莉亜さんだった。国内にいたことにいささか驚いたが「お久しぶりです」と挨拶をして全員ソファに座った。
昼食のメニューをそれぞれ頼み、五人で和やかに午後のひと時をゆったりと過ごした。

このときにはもう、先ほどの少年のことなど頭になかった。

【第八章】黒い影の思惑　（四）賭けの勝算

翌日―
昨日と同じように私の前に少年が座ってこちらを見ていた。
「――今日は、何？」
「会いに来ただけですよ」
そう言ってニッコリ微笑む。その表情はどこかで見たことのあるような、そんな顔。それは昨日も思ったことだった。何かに不自然さを感じる。でもその正体はわからない。

「…そこ、人が来るんだけど」
「来ませんよ」
「は？」
少年の口から言い放たれた冷たい台詞に動揺したのか、本を床に落としてしまった。腕を伸ばそうとして屈むと、少年のほうが一瞬早く動き素早く拾い上げテーブルの上に置いた。

「だから、先輩は来ませんよ」
「……何で、そんなこと言えるの？」
「賭けてもいいですよ」
「賭けって…」
突拍子のないことを言うな、と感じた。どういう趣旨で言っているのか、その笑顔からは読み取ることができない。どう返事をしていいのか迷っていた。

「僕が負けたら、もう貴女の前には現れません」
それは煩わしいことが嫌いな私の心を動かすには、有効的な台詞だった。
それでも慎重に考えるためしばらく黙っていた。そうしている間

にも時間は進んでいる。
「わかった」
「では僕が勝った場合は――――」
少年の提案を受け入れコクッと頷いた。
後から思えば私に勝算がなかったのは明らかだ。賭けというのは仕掛けたほうが有利なのだから。しかしこのときはそこまで頭が回らなかった。
暁のことを信じていたからだろう。
今まで連絡なしに、私を待たせたことはない。

「で、自己紹介もなし？」
少年は私のことを知っているようだが、私は何も知らない。アンフェアな気がして質問を振ってみた。彼がどこまで自分のことを話すかは定かではなかったが、ある程度の情報は仕入れることができるだろう。そう踏んだ。
「あぁ、失礼しました。僕は一年A組の日下大輝（くさかだいき）と申します。趣味は…そうですね、歴史調査などです。特に中世の英国文化に興味があり、博物館や美術館によく行きますよ。考古学にも興味があって、それに――――」
後半は聞いてはいなかった。
とりあえず名前は確認したが、後は人物像を特定する材料にはいたらなかった。わざとそういう話し方をしているのか、まったく心情が掴めない。
ぼんやりと彼の姿を見ていて何かの考えに行き着いた。

そうだ。
この表情は1年前の暁に似ている。
心から笑っていない作り笑顔。そして誰も寄せ付けようとしない無言の圧力。だから不自然なのだ。他人を信用していないオーラを纏っている。

そこまで考えて嫌な予感が頭をよぎった。

（やはり、最初からこの賭けに勝算があったのか？）

時間は着々と進んでいる。すでに昼休みの半分以上は過ぎていた。だが一向に来る気配がない。手元のハーブティーもすっかり無くなっていた。

暁だけでなく昂さんたちが来ないことも変だ。

そう考えながら彼の顔をじっと見つめる。気づいていないのかまだ流暢に趣味の話をしていた。

「ねぇ」

話を遮るように投げかけた。

「なんでしょう？」

「…何を企んでるの？」

「…企んでるなんて、人聞き悪いですよ」

満面の笑みで返されたものだから、言葉の裏が読めない。

「あぁ、そうだ。何か頼みません？　僕お腹空いてるんですよね」

「…好きにすれば」

「貴女の分も頼みますね」

返事をする前にウェイターを呼び、適当に注文していた。正直食事をする気分ではなかったが手っ取り早く食べれるものを頼む。

もうゆったりと食事をしている時間はなさそうだ。

暁はどこで何をしているのか。

昂さんと楠城先輩は？学園内にはいるだろうか。

思考を巡らせている私に冷たい台詞が浴びせられた。
「――タイムリミットです」

午後の鐘が鳴り響いていた。
「さぁ、行きましょう」
彼はソファから立ち上がり手を差し出した。その手には振れず顔も見ないで席を立つ。無表情のままテラスの階段を下りた。
「…どこへ？」
怪訝な表情で聞いてみたが彼には効果がなかったようだ。先ほどまでとは変わらない笑顔でこちらを見ている。
「僕についてきてください」
渋々後ろをついていく形になった。
賭けは彼の勝ちだ。負けた私は夕方の鐘が鳴るまで彼に付き合わなければならない。しかし場所までは特定しなかった。
すべてを確認した上で承諾すべきだった。が、今さら言っても遅い。

どこへ連れて行かれるだろうと警戒していたが、意外にも見慣れた場所でホッとしていた。そう、中等部と高等部の間に建つ巨大な図書館。
彼もまた特待生らしく案内されたのは個室だった。
「どうぞ」
扉を開け中へ入るよう促されたが一瞬躊躇した。扉の前で立ち止まり真横に建つ彼の顔をじっと見つめる。相変わらず無機質な笑顔を向けていた。
立ち止まった私の肩に手を伸ばしたかと思うとそっと押す。その反動で一歩進み、そのまま部屋へと踏み入れた。

それが罠だとも気づかずに――

【第八章】黒い影の思惑　（五）張られた罠

「――で、何が目的？」
部屋に入りソファに座るなり質問をぶつけてみた。そんな私の台詞をかわすようにテーブルに紅茶を置いた。まさか何か薬が入っているとは考えたくないが、警戒するにこしたことはない。カップには手をつけず彼の返答を待った。
正面に座った彼はカップを手に取り、足を組んでいる。
「紅茶でもどうぞ」
「いらない」
「あぁ、ご安心を。毒なんて入ってませんよ？」
まるでこちらの思考を読んでいるかのように言葉を投げつける。

「質問に答えて」
「…ですから、一緒にいてくれるだけで結構です」
「嘘でしょ？　そんなの」
「どうしてですか？」
「本心じゃないと思うから」
「…心外ですよ、貴女にそんなこと言われるなんて」
クスクスと笑う表情は先ほどテラスで見せていたものとは違っていた。明らかに何かを企んでそれを楽しんでいるかのような笑い方だ。

「それで、私を騙しているつもり？」
「どういう意味ですか？」
「君のその顔。昨日ともさっきとも別人だ。それに言っていることもバラバラでかみ合わない。一緒にいたい、暁と別れろ…これは本心じゃないはず」
彼の表情から笑顔は消えていた。

「…まったく、貴女は噂通りの人ですね」
大袈裟とも思えるほど、お手上げポーズをしてみせた。
「――ですが…気づくのが少し遅いですね」
「何？」
「貴女はここに入った時点ですでに負けなのですよ」
「どういうこと？」
「そのままです。勝負は僕の勝ちだ」
「…やっぱり、何か企んでた、のか」
足を組みなおした彼は「さて」と言って無機質な笑顔と視線をこちらに向ける。
「ここで問題です。どうして先輩方はこなかったんでしょうね？」
「…何、したの？」
「先輩方はとても単純にできている。さすがは温室で大事に育てられたことだけのことはある。彼らを足止めするなんて、とても容易いことでしたよ？」
自慢気に笑みを浮かべながら話すその仕草は一瞬悪魔にも見えた。背中がゾクッと凍りつくような寒気に襲われる。

「暁はどこ？」
「それは僕の口からは言えません」
これ以上この部屋にいることに耐え切れなくなった私は立ち上がり扉の前に立つ。まだ夕方の鐘が鳴るまで時間があったが廊下へ出た。
「後日、楽しみにしていてください」
それだけ言うと彼は私を引き止めるわけでもなく、中で紅茶を飲んでいた。
任務完了と言わんばかりに。

翌週―
中央塔の掲示板に何枚かの写真が貼りだされていた。その知らせを美桜のメールで知った私は慌てて中央塔へ向かう。
かなりの人だかりができていて確認するのに時間がかかった。
「――やられた」
そこには私と日下大輝がふたりでいる風景、そして図書館の個室に入るまでの一連を写した物だった。それを見てあの日の彼の言葉を思い出した。「貴女の負け」「後日楽しみに」すべては用意周到に準備されていた罠だったのだ。

「瑠璃！！！　どういうことだ！！！」
人混みの後ろから暁の声が響く。
とりあえず、こんな人の多いところでは話にならない。興奮気味の彼を制すように腕を掴み中央塔から離れた。
まわりはザワザワと騒いでいたが耳を貸さずひたすら歩いた。

半ば強引に図書館へ連れて行き扉を閉めた。
「あれは、どういうことだ！？」
「…はめたれた」
「はぁ？　誰に？」
「この間、カフェに来てた1年」
「どういう…」
話し始めたところで昂さんと楠城先輩が入ってきた。どうやら中央塔の騒ぎを静めてきたらしい。手には掲示板にあった写真が握られている。
先日の日下とのやり取りを説明した。
話している最中、暁は首を傾げてばかりだった。それに反して昂さんは写真を見ながら何かを考えていた。それぞれが話の整理をしている。

「こいつの名前は？」
手に持った写真を指し昂さんが聞いてきた。
「え？　あぁ、日下大輝…本人はそう言ってた」
「日下…どっかで聞いたな」
先日彼の顔を見たときも同じような反応だった。記憶の片隅に残っているのかもしれない。目を閉じて手繰り寄せていたが駄目だったようだ。
昂さんの表情は硬いままだった。

【第八章】黒い影の思惑　（六）見えない壁

「…やっぱり思い出せないな」
「昂がそんなに悩むなんて、珍しいね」
「そうだな、確かに見覚えがあるはずだけどな」
「一年か…確かに接点ないもんね」
「そうなんだよな」
昂さんは思い出せないことに苛ついているのか、持っていた写真をテーブルに放り投げた。

「ねぇ、昂」
「ん？」
「僕の思い過ごしかもしれないけど…」
「なんだよ」
「タイミングが良すぎると思うんだ」
「なんの？」
「美沙都の出現と、この一年が一条さんに近づいたのが」
「…そう言えば、そうだな」
静かに話し出した楠城先輩の話を聞いていた昂さんは腕組をして「うーん」と唸っていた。確かに彼の言う通り、立て続けに現れたふたりに何らかの接点があると考えるのは不自然ではない。むしろそう考えたほうが自然だ。

「あくまで憶測の粋をでないけどね。何か証拠でもあればいいけど…難しいよね」
「そうだな」
「美沙都が何か仕掛けたのかな」
「うーん、そう考えるのが妥当だろ。…にしても、油断してたな。てっきり本人が来ると思ってたからな」

「お前ら、何の話してんだ？」
ふたりの話の意図が読めないのか、苛々した表情で暁が割り込んだ。
「いい？　暁。僕の予想だけど…これはおそらく美沙都がふたりを引き離すために仕組んだと思うんだ」
「あぁ？」
「まず一条さんに1年を近づける。そしていかにも親密そうな演出をする。当然騒ぎになることは予想できただろうからね。隙ができた頃合を見て美沙都が暁に近づく…ってあらすじかな」
「でも証拠はない」
「そうなんだよね」
おそらく的は外れていないだろう。確かにタイミングが良過ぎだ。日下の行動が本意でなかった節が所々に見受けられたのもそのせいだろう。そう考えていくと辻褄が合う。まるでゲームでも楽しむかのような彼の姿を思い出してしまった。
「今、美沙都を問いただしてもダメだろうね」
「かといって、その一年もシラきるだろ」
また沈黙が続く。先ほどから堂々巡りだ。前に進んだかと思われた話はまた振り出しに戻る。何か突破口がないと永遠にこのままだろう。
「———そうか、美沙都か」
独り言のように昂さんが呟いた。表情は先ほどのように曇っていない。何か思い出したのか、思いついたのか。
「どうしたの？昂」
「思い出した」

「何を？」
「こいつ、多分美沙都の従兄弟だ」
「なんでそんなこと？」
「いや、美沙都が高等部にいる頃何回か来たことがあるはずだ。覚えてないか？中等部のガキがチョロチョロしてると思って、一度美沙都に聞いたことがある」
「そうだったかな？」
「あぁ、それが日下大輝…だったはずだ」
昂さんの記憶の糸が解けた。それと同時に今まで憶測の粋を出なかったものがふたりの繋がりによって一本になる。

「美沙都との繋がりは見えてきたけど…」
「証拠としては薄い、な」
「たしかに」
「…ここで考えていても仕方ない。俺は別ルートで探る」
「別ルートって、何か心当たりでも？」
「ないことは、ない」
そう言って昂さんはテーブルの上にあった写真を握り締め部屋を後にした。「僕も行くよ」と楠城先輩も昂さんの後を追うように出て行く。
ふたりきりになった部屋の空気は沈黙と共に次第に重くなる。先ほどから暁は口を開かないまま黙って私を睨んでいた。何か言いたいことがあるらしい顔はしているが、機嫌が悪いということくらいしか読み取れない。

「何、怒ってんの？」
「……別に」
「機嫌悪いよ」
「悪くない」
暁の台詞が嘘であることは一目瞭然だった。私の顔を見ようとし

ないし窓の外ばかり見て苦虫を噛んだような表情をしている。思わず「はぁ」と溜息を吐く。それが聞こえたらしく振り返った。彼の苛々に拍車をかけたようで先ほどより一段と表情が険しくなっていた。

「お前、反省してんのか？」
「え？」
「あの写真のことだよ！！！」
「え？　あぁ。まさか写真を撮られてるとは思わなかったから…悪かったとは思ってるよ」
「俺が言ってるのは、そこじゃない」
「え？」
暁の顔はだんだんと歪んでいる。こんな顔初めて見るな、と思った。
「お前、他に言うことあるだろ！？」
「だから、悪かったって」
「…もう、いい」
吐き捨てるように言った後、彼は乱暴に扉を開けて出て行った。

（わけわかんない…）

あそこまで怒っている理由がまったくわからなかった。いくら考えても答えは出ない。
ひとり残された部屋の空気は、さらに重みを増していた――――

【第九章】狂う歯車の中　（一）崩れた想い

いつの間にか日課のようになったカフェでのひととき。
まだ授業中ではあるが、今日も私の足は一段高い奥の席へと向かっていた。そしていつものようにハーブティーを頼む。
こうして暁が来るまでの間、本を読みながら静かに待っていた。
何も変わらないと思っていた日常がほんの少し歪む。それだけで人の心も大きく揺れ道に迷い、時にはとんでもない方向へと進む。
そんなことをぼんやりと考えていた。

午前授業の終了の鐘が鳴る。
しばらくすると食堂や中庭に人が溢れ出し、先ほどまでの静寂は吹き飛ばされる。そろそろ来る頃だろうかと、本を閉じティーカップに口をつけた。
そのとき、後ろから影が映る。
暁が来たのだと思い振り返ると、そこには昂さんがひとりで立っていた。
「昂さん、ひとり？」
「あぁ」
「…暁は？」
「あいつは、来ないよ」
「え？」
ソファに座った彼は私から視線をそらすように答えた。その表情にいつもの悪戯っぽい笑顔はなく、不機嫌にも見える態度を見せた。冗談ではないらしい。
「今は会いたくないらしい」
「どうして？」
「瑠璃が反省するまで、顔見たくないってさ」

反省、と言われている意味がよく理解できなかった。確かに昨日、暁は怒ったまま部屋を出ていたが、一時の感情だと思っていたのだ。
時間がたつと落ち着くと踏んでいただけに意外な伝言だった。
「昨日、謝ったけど？」
「…それは、何に対して？」
「え？　だから…写真撮られたことを――――」
言い終わるより早く昂さんは「はぁ」と溜息を吐いた。そのまま
しばらくは黙って昼食を摂っていた。仕方なく私も手をつける。
無言のまま時間が過ぎ、席を立とうとしたとき彼に呼びかけられた。
「瑠璃、場所変えようか」
「え？　うん」
何か話でもあるのだろうか、そう思いながら彼の後ろをついて行く。黙ったままの彼に少し違和感を感じていたが、気のせいだと首を振り校舎の中を歩いた。

てっきり生徒会室にでも連れて行かれるのかと思っていたが、足は北校舎へと進んでいる。立ち止まった先は第三音楽室の扉の前だった。
昂さんは扉を大きく開き「どうぞ」と中に入るよう促した。中には誰もいないようで外とは違い静かな空間だった。
いつものようにピアノのイスに腰かける。
そのとき、背後でカチャッという金属音が響いた。
それが鍵を閉めた音だと気づくのに数分、いや数秒かかった。
鍵盤に手を触れかけていた私は思わず振り返る。

「――――昂、さん？」
「どうして、お前はそう無防備なんだ？」
目の前にいる昂さんは先ほどまでとは別人のような表情で立っていた。初めて見る顔、かもしれない。本能的に恐い、と感じたが逃

げ切れず肩を掴まれた。反動で体がビクッと揺らいだが彼の手は離れる気配がない。
「――俺だから安心してついてきたのか？　それともお前には防衛本能がないのか？」
「…」
「どちらにしても、ここで俺が何してもお前は文句言えないよな？」
そう言いながら顔を近づけてくる彼の表情に、微笑みはなく何も読み取ることができなかった。無表情のままこちらを見ている。
目をそらすことも体を動かすこともできない私は、瞬きすら忘れているんじゃないかと思うほど硬直したままだった。次第に口の中が乾いてきて居心地が悪い。
窮屈さを感じて、肩にかけられた手を振り払おうと腕を動かした。
そこで彼の表情がふっと緩む。そこから何かを感じ取った。

（あれ…？　これって…？）

その態度と台詞から感じ取った違和感はある考えに到達する。
これはきっと昂さんの本意ではない、と。

「昂さん…これは暁のため？」
「……え？」
不意をつかれたのか昂さんの腕は私の肩から離れた。そのままピアノのイスに座り前髪をかきあげながらクスクスと笑い出した。
横からじっと見つめていた私は彼の行動に首を傾げた。
「まったく…お前には敵わないな」
「どういう意味？」
「そのままだよ」

「うーん…」
そこにはいつもの笑顔が戻っていた。悪戯っぽく笑う優しくて思いやりのある昂さんに。

（昂さん、不器用だな…）

暁は写真を撮られたことに怒っていたわけではないのだ。私が警戒もせず日下の後をついて行ったことに苛立っていたのだ。それならそうと言えばいいものを暁は意地を張って言わないし、昂さんはこんな手の込んだことをして遠まわしでしか伝えられない。
そう考えていると可笑しくなって笑いがこみ上げてきた。ふたりでクスクスと笑っていたが、ふと昂さんが笑うのを止めこちらを見る。

「さっきの答えだけどな」
「ん？」
「半分はあってる」
「…半分？」
「あぁ」
「じゃあ、後の半分は何のため…？」
彼が何か言おうとしたとき、扉を叩く音が響いた。

そう言えば鍵をかけたままでいたことをすっかり忘れていた。昂さんはイスからゆっくり立ち上がり扉へ向かう。
何度も叩かれる扉に手をかけ、鍵を開けると扉が大きく開いた。
廊下には暁が立っている。足を止めたまま動こうとせず無表情のままだ。
近くに立っていた昂さんは暁の肩をポンポンと叩き、何も言わず

に出て行った。すれ違い際意地悪な顔をしているな、と思ったが暁は気がつかなかったようだ。

扉の前で立ったまま、部屋の中へは入ってこない。

「昂と何してた？」

「…別に」

「別にってことはないだろ！！！」

「別にやましいことはしてない」

「そういう問題じゃ――――」

そこまで言って「はぁ」と大きな溜息を吐いた。呆れた顔をこちらに向けている。

「――――瑠璃、別れよう」

しばらく沈黙が続いた後、暁はポツンと呟いた――――

【第九章】狂う歯車の中　（二）残された心

告げられた言葉を呑み込むのには時間がかかった。一瞬夢でも見ていたかのような錯覚さえ覚えたほどだ。とても自分に向けられた台詞だとは思えなかった。

「――――何、言ってるの？」

そう答えるのがやっとだった。

それでも暁は私に近づくこともなく、表情ひとつ変えず扉の前に立ったままだ。勢いで言ったことなのだろうか。無表情の彼からは何も読み取れない。

もう一度聞く。

「――――突然…何？」

それでも沈黙は続く。重苦しい雰囲気の中彼の口が開かれることを待つ。

「お前の考えてることが、わからなくなった」

「…何も変わってない」

「そんなことないだろ」

「…どうして？」

「どうしても許せないんだ」

怒りと哀しみの混じった複雑な顔をしていた。謝らなければと思うが言葉が出てこない。

「考え直して」

「…悪い」

それ以上は何も言わなかった。結局最後まで私の顔をまともに見ないまま背中を向け部屋を後にした。後ろ姿に声をかけることも、追いかけることもできないまま呆然と立ったまま、気がつけば涙が頬を伝っていた。

静かに流れる涙が枯れた頃、私は部屋を出て道場に向かっていた。別に目的があった訳ではないが、心を静めるにはいい場所だと考えた。
思えばずいぶん久しぶりに足を運ぶ気がする。暁たち三年はもう間もなく引退だ。最近活動しているようには聞いていないが、私が知らないだけなのだろうか。
校舎を抜け道場が見えてくると、目の前を歩く人影が見えた。確かもう午後の授業が始まっているはずだ。誰だろうと思い追いかけてみると昂さんだった。
彼は私に気がつかず道場の中へと入る。
扉に手をかけたとき中から声が聞こえてきた。どうやら昂さんひとりではないらしい。

「――――暁」
中に入ろうと考えた私はその名前を聞き、咄嗟に扉から離れる。その場に立ったまま動けなくなっていた。
「昂…さっき瑠璃と何してた」
「何が？」
「何がってことないだろ！！！」
「瑠璃から聞いてないのか？」
「…あいつは、別にとしか言わなかった」
「じゃあ、別に、だ」
その言い方はいつもの昂さんらしくない台詞だった。それが挑戦的に聞こえたのか暁は掴みかかるような勢いで声を上げた。
ふたりの険悪な雰囲気が外からもわかるほど張り詰めている。
「…お前、どういうつもりだ」
しばらく黙ったままのふたりだったが、少し落ち着いた声で暁が聞いた。
「お前が意地を張っているからだろ？　それを俺のせいにするな」

「そんなことない」
「そもそも、しばらく瑠璃に会いたくないと言ったのはお前だ」
「…そうだな」
「まぁ、安心しろ。悪いことは何もしていない。あいつに何が悪かったか、気づくきっかけを与えてやっただけだ」
「大きなお世話だ」
「で、瑠璃は謝ったか？」
そこで「いや」と暁が言った後お互い話さなくなり辺りは静けさに包まれた。一歩でも足を動かせば、その音さえ響き渡りそうだ。

「――別れようって、言ってきた」
「はぁ？」
それは昂さんにとって意外な台詞だったようで思わず声が裏返っていた。
「俺は、あいつが何考えてるのかわからない」
「だからってなぁ」
「今はあいつと一緒にいれない」
「瑠璃の話、聞いてやったのか？」
「…いや」
「お前、それじゃあ一方的過ぎるだろ」
昂さんは「はぁ」と大きく溜息を吐いて続ける。
「――それじゃあ、美沙都の思うつぼだな」
「…美沙都は関係ない」
「お前なぁ…」
言いかけたところで人影が動いたのが見えた。
昂さんの話を聞くのが嫌になったのか、暁が道場から立ち去ろうとしていた。慌てて壁の影に隠れる。タッチの差で彼と顔を合わさずに済んだ。
暁の背中をぼんやり見送っていた。

「――瑠璃」
不意に声をかけられ驚いた。振り返ると中から昂さんが微笑みながらこちらを見ている。扉が開いたままであることにも気がつかず立っていたようだ。
「――追いかけなくて、いいのか？」
「…わかんない」
「ったく、世話が焼けるな」
「誰が？」
「ふたりとも、だ」
そう言うと昂さんは立ち上がり私の頭をポンポンっと叩く。
「――少し、頭冷やせ」
それだけ言うと、私の返事を聞かず出て行った。

ひとり残された道場は先ほどよりさらに静かになった気がする。頭を冷やすには太陽の熱を受けすぎて空気は若干暖かい。それでも影になっている道場は風が涼しくて心地よかった。

（これから、どうしたらいいんだろう…）

答えの出ない質問を自分に投げかけては沈んでいた。
授業終了の鐘が鳴る頃、誰にも会わないうちに校門へと向かった
――

【第九章】狂う歯車の中　（三）歪みと狂い

数日後―

いつも四人で座っていたカフェの特等席は、あの日から暁の姿がない。昼休みは昂さんと楠城先輩の三人で過ごすようになっていた。

暁は少し離れた一人用のソファ席で誰とも話さず、こちらを見ないままひとりで過ごしていた。私はともかく、昂さんたちのことも避けているように見える。

ひとりで過ごす暁の元へ美沙都さんがやってきたのは突然だった。彼の正面にソファを移動させ座る。ふたりの会話が嫌というほど聞こえていた。

「暁！」

「お前…もう来るなって言っただろ」

「いいじゃない」

「邪魔だ」

「どうして？　あのコと別れたんでしょ？」

「…なんで知ってる」

「さっき、その辺にいたコが噂してたわ」

彼女が首を動かし、視線を向けた先には私と同じクラスの女子が座っている。さぞ面白おかしく話しているだろうと思ったが、気にすることはない。

彼女でなくてもそう話す声は嫌でも耳に入る。実際別々に過ごすようになってから視線を感じることが多くなった。人は他人の不幸話が面白くて仕方ないのだ。

「たったあれだけのことで別れるなんて、たいしたことなかったわね」

「やっぱり、あのガキはお前が…」

「やだ、あれは単なるいたずらよ。正直、大輝があそこまでするとは思ってなかったけど？」
「いたずら、か」
「あたしは、あのコがどれだけ暁のことを想ってるか試したかっただけよ。手段は全部、大輝ひとりで考えたんだから」
「そうかよ」
「あのコが大輝について行ったって聞いたときは、驚いたわ。所詮、その程度の感情しか持ち合わせていなかったのよ」
勝ち誇ったように話す美沙都の存在が鬱陶しかった。だが、否定はできない。

「――でもまぁ、お互い様よね？」
「何がだ」
「暁だってあたしの呼び出しに騙されたんだから」
「…あれは」
「なぁに？　あのコの名前使ったら疑いもなく来たでしょ？」
そこで黙ってしまった暁を見ていて事実なんだと確信した。あの日の日下の台詞が頭をよぎる。「先輩たちの足止め―」そのことだろう。

ここで賭けを吹っかけられたとき、暁もまた何らかの形で美沙都に誘き出されていたのだ。そのことを知ってやり切れない気持ちになる。
何が真実かはわからないが、彼に裏切られたような感覚すら覚えた。

（お互い、心に隙があったんだ…）

それを見せ付けられ気持ちは完全に沈んでいた。目の前で昂さんが「どうした？」と聞いてきたが「なんでもない」と答え、神経のすべてが暁と美沙都の会話に向けられていることを隠した。それでも昂さんのことだから表情から読み取っているかもしれないが。

「だから、いい加減あたしと付き合ってよ」
「いやだ」
「なぁに？　あのコにまだ未練でもあるの？」
「…お前と付き合う気はない」
暁は美沙都の顔を見ずに言い放った。それでも視界に入ってくる彼女の表情は明るく気分を害したようではなかった。
「あたし、まだあきらめないわよ」
去り際に一言告げてカフェを後にした。

「――――瑠璃」
「ん？　何？」
「今の、気にするな」
「…なにが？」
「いいから、何も気にするな」
やはり昂さんは気がついていたようだ。隠し通したつもりだったがうまくいかなかったらしい。隣で楠城先輩も同じように頷いていた。

それからしばらくは毎日のように美沙都さんは訪れた。相変わらず暁の態度は冷たく数分滞在するだけだが、その光景はかなり目立っていた。一部の噂では「ふたりが付き合っている」と流れたほどだ。
だが、それに口を挟む権利はもはや持ち合わせてはいない。嫌なら暁が拒むだけである。

（もう、さよならよ――――…）

心に一滴の黒いシミができたような気がしていた。

どこから狂い始めたのか。

それは私と暁だけの関係だけではなく、まわりを取り巻くすべての環境が少しずつ狂い出したのだ。歪む関係が次第に浮き彫りになる。

「ねぇ、昂」

「なんだ？」

「あれ、何とかならないの？」

珍しく楠城先輩が嫌悪感丸出しの表情で顔を向けた。視線の先には最近毎日来る美沙都さんの姿。さすがに毎日見ていると呆れを通り越して嫌気が増していた。

「暁が嫌がらないんだ、仕方ないだろ？」

「実際、嫌がっているように見えるけど？」

「…暁がなんとかするだろ」

昂さんにしては冷たい台詞だと思った。今までならなんとか暁を助けるなり美沙都さんを遠ざけるなりしていたはずだ。

それは楠城先輩も感じ取ったようだった。

「暁となんかあった？」

パソコンの画面に向かって生徒会の報告書を纏めていたらしい昂さんの指がピタッと止まる。表情は大して変わらなかったが図星であることは間違いないようだ。

「――――やっぱりね」

「今回は、あいつが悪い」

「何があったの？」
「…言えないな」
それは私を気遣ってのことだったのだろうかと考える。道場でふたり話していたあの後に再度話したようだったが、そのときの詳しい内容までは教えてくれなかった。
「昂らしくないね」
「…何がだ」
「そうやって意地張ってるのが」
「俺は別に意地なんて張ってないぜ？」
「そうかな？　暁といい勝負だよ？」
その言葉は気に入らなかったのか、楠城先輩の顔を見ないで再びパソコンの画面に視線を移した。

「――――そんな昂、僕は見たくないよ」
「…もう、その話は終わりだ」
無理矢理押し通す形で昂さんは口を噤んだ。
その後昂さんはひたすらパソコンに向かってキーボードを叩いていた。カフェの傍を美桜が通るのを見つけて私はその場を去った。
ふたりの沈黙が耐えられず逃げ出すように背中を向けた。

「美桜」
「瑠璃…顔色が悪いわよ？」
「へーキ」
「静かなところで休んだほうがいいわ」
少し距離はあったが、礼拝堂へと向かい扉を開け無言のままイスに座った。隣に美桜が同じように座ったが、こちらを見ずただまっすぐ正面を見ていた。
天井のステンドグラスから差し込む優しい光がふたりを包み込んでいるようで、気分も和らぐ。黙って目を閉じ、自分がどうしたいのか、ただそれだけを考えていた。

狂い出した歯車を元に戻す方法はないのか。
歪んだ関係を少しでも修復する方法は、自分の中にあるのではないかと――――

【第九章】狂う歯車の中　（四）動き出す輪

一年で一番嫌いな季節がすぐそこまで迫っていた。ただでさえ気が重いというのに、この湿気と熱気は私の心をさらに奥深くへと沈める。

中間試験が終わり図書館でひとり過ごしていると、一通の手紙が届いた。宛先を見て困惑した。出向かなければいけない理由はない。だが、断る理由もない。

重たい足取りで中央時計塔へと向かう。

中央時計塔とは学園敷地内の中央にあり、幼等部から大学部までを一望できる場所に建っている。それはロンドンのビッグベンに類似した建物で、中は会議室や応接室などが完備されている。そして一番重要な「理事長室」もここにあるのだ。

差出人は柚莉亜さんだった。

内容は簡潔なもので「理事長室まで訪問するように」とのこと。詳しい要件までは記されていなかったため、不安な足取りだった。

最上階にまでエレベーターで上がると理事長秘書に用件を伝える。「こちらへどうぞ」と一階下の第一応接室へと案内された。「後ほど伺います」と伝言を残し秘書は扉を閉める。しばらくするとテーブルには紅茶が用意されたため、まだ時間がかかることを察知した。

中央時計塔に来るのは初めてではないが、「上」に来るのは初めてだ。窓を開けベランダへと移動する。確かに見晴らしがよく学園敷地の隅々まで見ることが可能なようだ。

ベランダでぼんやり風景を見ていると、隣の応接室から声が聞こえてきた。向こうも窓が開けられているのだろう。

「…で、何？　急いでるんだけど」

「あら、お時間はいただきませんわ」
「そうは思えないけど？」
ふたりの声には聞き覚えがあった。
「お茶でもいかがかしら」
「…どうも」
部屋の中までは見えない。聞こえてくる声を頼りに様子を伺う。だがソーサーにカップを置く、カチャという音が響くだけで話し声は止まってしまった。

「今日お呼びしたのは他でもないわ」
「…何？」
「あら、もう察しはついているかと思うけど？」
「わざわざこんなところに呼び出すなんて…フェアじゃないわ」
「そうかしら？」
「こんなとこじゃ、何言われても反論できないでしょ？」
「貴女が正しいと思うことなら、反論して頂いても構わないのよ？」
ふたりの声の質はまったく正反対だった。だが優しい彼女の話し方がかえって不気味だと感じるのは抑揚がないからだろうか。とにかく隙がないのだ。
「で、誰に頼まれたの？」
「それは問題ではないわ。そうでしょう？」
「どうだか」
「今日は貴女にお願いがあって来てもらったのよ」
「…脅迫じゃなくて？」
「あら、そんなこと言われるなんて心外ね。…どう受け取るかは貴女の自由だけど」
「あんたが出てくるなんて予想外だったわ、柚莉亜」
優しい口調で淡々と話を進めているのは柚莉亜さんだった。そして苛立たしい話し方をしているのは他でもない美沙都さんだ。私をここに呼び出したのは彼女のことを話すつもりなのだろうかと想像

する。

「私のお願いは聞いて頂けるのかしら？」
「聞くことはできるけど？」
「それはよかったわ」
「聞いてどうするかはあたしが決めるわ」
「それは構わないけど…」
柚莉亜さんの提供に反論などできるのだろうか、と思う。穏便に学生生活を送りたいならまず無理だろう。理不尽なようだが彼女はそれだけの影響力を持つ。

「――私の可愛い暁に手を出さないで頂けるかしら？」
「あんたの可愛い人は崇臣じゃなくて？」
「その崇臣の友人だから言ってるのよ」
「あ、そう」
「貴女が高等部に現れるたび、あの子たちの関係が歪んでいくの。それを黙って見ているわけにはいかないでしょう？　その原因である貴女は邪魔なのよ。だから手を引いて頂きたいの」
「勝手じゃない？」
「そうかしら？」
「あたしが何しようと、関係ないでしょ」
「今回ばかりはそうもいかないわ。今までは目を瞑ってきたけれど、あの子たちが困っているんだもの。私はなんだってするつもりよ？だから聞き入れていただけないかしら」
美沙都さんは反論することを止め黙ってしまった。きっと彼女の言葉の意味を考えているに違いない。
「…いいわ」
渋々、と言った感じではあったが美沙都さんは承諾した。柚莉亜さんは「暁に報告してね」と言い彼女を解放した。

隣の部屋から美沙都が出て行く音が聞こえた後、後ろの扉が開いたのを感じ取った。つい先ほどまで隣で話していた柚莉亜がもうこちらのソファに座っている。
「お待たせしたわね」
「…いえ」
ベランダに出ていた私を見て、聞き耳を立てていたことがわかったのではないだろうかと考えた。だが、それを手間が省けたといわんばかりに話し出す。
「来ていただいた理由はもうご存知よね？」
「…はい」
「暁のところへ行って頂きたいの」
「でも…彼はもう私のことは…」
「そんなことないと思うわよ。きっと大丈夫」
その自信はどこからくるのだろう、と思う。暁はここ数週間、私はおろか昂さんたちとも話していない。教室でのことはわからないが、人を避けているように見える。

「———まだカフェにいる時間でしょう？　私も一緒に行くわ」
「わざわざ…ですか」
「私も暁に言いたいことがあるからいいのよ」
「そう、ですか」
そう言うと彼女はソファから立ち上がり手元の電話で秘書を呼び出す。
応接室を出た私は彼女の後ろをついて行く形になった。その隣には秘書がついて何やら仕事上の話をしている。こんなに忙しいのに時間を割いたということは、本当に彼らのためならなんでもするのだろう。
そこまで強く想えることが少し羨ましかった。

私も暁のことをそれほど想えたなら、事態はこうも悪化しなかったのだろうか――――

【第九章】狂う歯車の中　（五）想いの全て

高等部に到着すると柚莉亜さんは「先に行って待ってて」と言い残し中央塔へと消えていった。気が向かなかったが仕方なく中庭へと進む。中央噴水の手前でふと、足が止まった。

「…美沙都、さん」

「何よ」

「いえ、暁のところに行ってきたの？」

「そうよ。今日で最後にするって言ってきたわ」

「へぇ」

「よかったわね、思い通りになって」

腕組をしながら私の顔を見る彼女の表情は皮肉さが混じった、不満顔そのものであった。柚莉亜さんに頼んだのが私だと思っているかもしれない。

「……別に」

「え？」

「別に、思い通りなんかじゃない」

「ふぅん。でもまぁ、もう来ないから安心して」

「そう」

気のない返事をすると彼女は「じゃあ」と言って足早にその場を去った。

カフェのいつのもの席にはすでに昂さんと楠城先輩の姿があった。私のことを見つけると腕を振り手招きしている。横目に暁が見えたがこちらには知らん顔をしていた。

内心「はぁ」と溜息を吐き奥へと向かう。ソファに座ってからも背後にいるはずの暁が気になって上の空だった。

気分を落ち着かせるためにカモミールのハーブティーを頼み、一

口含んだ。カップから顔を上げたとき昂さんが「おっ」と声を挙げる。背後でざわつく気配を感じ取った私は思わず振り返る。
見るとそこには柚莉亜さんが暁を見下ろすように立っていた。

「何だよ、柚莉亜。こっちに来るなんて珍しいな」
「ええ。ちょっとしなければいけないことがあったからね」
「ふぅん」
彼女が意味ありげな言い方をしたが、暁には伝わらなかったようだ。目をそらしたまま会話をしている。
「それより暁、崇臣たちのこと避けてるんですって？」
「あ？　別に避けてない」
「でも、現に一緒にいないじゃない」
「それは…」
「ダメよ。崇臣はともかく…昂のことは大事にしなさい」
「何だよ、それ」
「いいから。私の言う通りにしてね」
隙のない笑顔から発せられる言葉には妙に説得力があった。暁も反論せず黙って頷く。
「———昂にちゃんと謝るのよ」
「…はい、はい」
渋々、と言ったところだろうか。暁の返事を聞いた柚莉亜さんは席から立ち上がる。

そのとき、昂さんが私の腕を引っ張り「行ってこい」と告げた。今、このタイミングで？　と困惑していると、無理矢理立たされる形になって背中を押された。
重い足取りで暁の元へ近づいていくと、暁に背中を向けた彼女が振り返る。
「あぁ、そうそう。あなたの大事なお嬢様にもちゃんと謝るのよ」

「は？　何言って――――」
暁は途中で言葉を呑みこんだ。それはきっと私が柚莉亜さんの背後から現れたからだと思う。沈んだ私の顔を見て彼女はニッコリ微笑んでいた。軽やかな足取りで奥の席に行くと、彼女は楠城先輩の隣に座った。

仕方なく暁の正面に座る。だがまともに顔が見れない上に、何を話せば良いのかもわからずお互い黙ったまま時間が流れた。
まわりの雑音すら気にならないほど、全神経が暁に向けられ他のことを考える余裕など残っていない。沈黙に押し潰されそうだった。
「――――久しぶりだな」
「うん」
「元気だったか？」
「うん」
「なんかへんな感じだな」
「うん」
「…お前、何か言えよ」
「……うん」
返事をするのが精一杯だった。それ以上何か言葉にしようとすると、息苦しくなりうまく話せない。暁は私から目をそらし頭をクシャっと掻いた。

「…悪かったな」
「え？」
「俺、どうかしてたな」
「そんなこと、ない」
「ごめんな」
「そんな、私のほうこそ…ごめん」
気づけば涙が頬を伝っていた。今まで我慢してきた分が一斉に溢れ出るように、静かに流れ落ちる。

離れてみてようやく気がついた。こんなにも大切で愛しい人と私はどうして離れることができたのだろう。どうして「もう遅い」などと諦めてしまったのだろう。手を伸ばせばまだこんなにも近くにいたのに。今なら取り戻すことができるのだろうか。

頬の涙を拭い、口を開く。

「――――暁」

「――――瑠璃」

お互いの言葉が重なり、次の瞬間見つめ合っていた。涙で暁の顔が少し霞んで見える。ゆっくりと瞬きをして想いのすべてを口にした。

「私、やっぱり暁のことが…すき」

ようやく言えた素直な言葉に暁も頷き答えてくれた。泣いている私の頭をクシャっと撫でそっと抱き寄せてくれた。彼の腕の中は沈んだ心を明るい場所まで導いてくれるような、そんな安心感を覚えた。

夏の太陽が私の涙に反射してキラキラと輝いている。それを拭ってくれる彼に笑顔を向け、手を取りいつもの席へと向かった。

いつもの席に近づくと昂さんと柚莉亜さんの話し声が聞こえてきた。楠城先輩は隣で黙って聞いている。

「今回は申し訳なかったね」

「いいのよ、あれくらいのこと」

「おかげで助かったよ」

「そうね、私のところに来たときは何事かと思ったわよ。とても切羽詰った顔をしていたもの。驚いたわ」
「もうお手上げ…だったからな」
「彼女があっさり私の要求を呑んでくれたからよかったけれど…昂はこれでよかったのかしら？」
「いいんじゃないの？」
そこでなぜか昂さんは私の顔をちらっと見て、すぐに戻した。その表情がなぜか哀しげに見えたは気のせいだろうか。
「でも、昂は――――」
「いいだよ、俺は」
柚莉亜さんの言葉にかぶせるように言うと、いつのも笑顔に戻り私たちを手招きした。

「何の話、してたんだ？」
暁は何事もなかったかのようにソファに座り昂さんに話しかけている。彼もまた何事もなかったかのように「別に」と答えていた。
改めて紅茶とサンドウィッチを頼み、口にしていると「悪かったな」と悪びれた様子もなく暁がさらっと言い放った。昂さんはクスッと笑い「世話が焼けるよ」と呆れ顔を見せていた。
ほんの束の間、幸せな時間が戻る。
このまま永遠に続けばいいと、心から願った――――

【第十章】運命の悪戯か　（一）無力な子供

一学期最後の日は生憎の雨模様だった。朝からシトシトと降っていた雨は正午に近づくに連れ強さを増し、空は昼間とは思えないほどに暗く落ちてきそうなほどだった。

窓から外を眺め少し憂鬱な気分になる。空が一瞬光り、遠くのほうで雷が鳴る音が響いていたが私の耳までは届かなかった。

終業式を終えた私たちは中央塔から外へ向かう。

「美桜、本当にいいの？」

「いいわよ、少し歩きたいの」

「そう、気をつけてね」

「えぇ、わかっているわ。じゃあ次は9月にね」

「うん。旅行、楽しんできてね」

「お土産、楽しみにしててね」

美桜はそう言いながら、私に背を向けた。

雨足が酷くなってきたので一緒に車で帰ろうと提案したが断られ、彼女はピンクのストライプ柄の傘をクルクルとまわしながら笑顔で私の前から歩き去った。

なんとなく気にはなったが、気のせいだろうとすぐに背を向け後部座席に乗り込む。私の乗った車は彼女とは反対方向へ、雨の中走り出した。

しかし、それが彼女の最後の笑顔となった。

無邪気に笑う彼女の笑顔を見ることができるのは、暫く先の話。

彼女の身に起こるそのことを、このときはまだ知る由もなかった。変わらないと思っていた毎日が少しずつ変化し始めたのは、この頃からだったのかもしれない。

夏休みが終わりしばらくして美桜が登校していないことに気がついたのは、図書館にも顔を出さないことに不信感を抱き始めた頃だった。
始業式の日に姿を見なかったが、さほど気にすることもなく学園を後にしたため長い間気が付かなかった。だが、さすがに連絡の頻度が下がるとそれは胸騒ぎに変わる。
気が向かなかったが渋々教室へ足を運んだ。とりあえず目の前を通る生徒を適当に捕まえ事情を聞いてみる。だが、一様に「噂だけど」と付け足すためどれも信憑性はなかった。
一番事情を把握しているであろう担任の元へ確認に行く。

「…しばらく休学するそうだ」
「理由は何ですか？」
「詳しいことまでは聞いていない」
「そうですか」
「先日訪問してみたが、不在だったよ」
「わかりました。失礼します」
ここでも詳しい理由はわからなかった。一体どういう理由で休学なんてしているんだろう、と考えるが何も思いつかない。とりあえず願うことは事件や事故に巻き込まれていないことだけである。
ケータイを手に電話してみたが、電源が切られているのか繋がらなかった。メールをしても同じことだろう、返事はいつになるかわからない。
担任が訪ねたとき不在だと言っていたが、当初の予定ならば八月中に旅行から帰ってきているはずだ。本当に不在なのか、それとも居留守なのか。
電話は繋がらないままだったが、確かめずにはいられなくなり足は美桜の家へと向けられた。門の前に立ち一呼吸吐く。もし不在であれば日を改めて訪問すればいい。そう自分に言い聞かせてインタ

ーホンに手を伸ばした。

インターホンから聞こえてきたのは彼女の母親の声だった。私が名前を告げると少し間が空いた。何かを考えている雰囲気がなんとなく伝わってくる。

その場で待っていると玄関が開き、中に招かれた。応接室へと通され少し待つように言われる。

（会いたくないのかな…）

そんなことが頭をよぎった。

ソファに座りひとりで待っている間も家の中の重たい雰囲気を察していた。先ほど見た母親の顔も少し疲れているのか、以前よりも痩せた印象を受けた。

廊下で話し声が聞こえてきたのは応接室に通されて少し時間がたった後だった。扉越しのため声が篭って会話の内容までは聞き取れないが、おそらくは美桜と母親の話し声だろう。その声が近づいてきたと思った瞬間扉が開いた。

「美桜！！！」

部屋に入ってきた彼女の顔はまるで別人のように見えた。明るく無邪気に笑う面影はなく、どこか無理をして笑顔を作っている印象を受ける。

「瑠璃…心配かけてごめんね」

「美桜…何があったの？」

その問いには答えず視線をそらした。

ソファに座った彼女は俯いたまま私の顔を見ず目も合わさなかった。

普段は化粧をしている所為か華やかに見える彼女の顔も、今日は沈んで見える。それになんとなく蒼白く体調が悪いのではないかと思うほど、覇気がなかった。
つい一ヶ月ほど前に見た彼女はどこへ行ってしまったのだろうと思う。

何も答えなくなってしまい沈黙が続いた。重い空気が圧し掛かる。
「――美桜」
「あ、瑠璃。紅茶がいい？それとも珈琲にする？」
「…どっちでもいいよ」
「そっか。ちょっと待っててね」
そんなに無理をして笑わなくてもいいのに、と思いながら彼女の様子を伺っていた。何も話そうとしない彼女に、どんな言葉をかけていいのかわからなくなっていた。

「――何か聞いてきた？」
「え？　あぁ、休学届がでてるって…」
「そう」
「…どうしたの？　急に」
私が質問をすると彼女は途端に黙ってしまった。それでも急かすわけにはいかない。その表情はどう答えていいものか迷っている顔であり、相手が切り出すまで待つしかなかった。
グラスを手にしたまま「はぁ」と小さく溜息を吐いた後、彼女は重い口を開いた。

「……あたしね、学校辞めると思うわ」
「は？」
思いもしなかった言葉に混乱というよりも、すぐに事態を呑みこめなかった。
「――なんで？　辞めてどうするの？」

「…あたし、妊娠したみたいなの」
「え？」
「妊娠したみたい――――…」
それだけ言うとまた口を閉ざしてしまった。同じように私も言葉を失いただ黙って聞くことしかできなかった。

どれくらい時間がたったのだろう。グラスの中の氷がカランッと音を立てゆっくりと溶けていった。
「これから、どうするの？」
「彼とね、両親とも話し合って…産むことに決めたの。だからもう学校には行けないでしょ？　今は一応休学届を出しているけど、改めて退学届を出しに行くわ。彼も大学を辞めて働くって言ってくれてるし、あたしもこの子を産んだら看護学校へ進むつもりよ。そうすれば、お父さんの手伝いができるから丁度いいでしょ？」
「モデルの仕事は？」
「うん、それも考えたんだけど…今はあまり体調が良くないし、安静にって言われてるから」
「そうなんだ」
そう語る彼女が急に大人になったような気がして淋しかった。もう学園内では逢うことはないと思うと孤独感が押し寄せてくる。最初に出会ってそう長い時間を過ごした訳ではないが、やはり唯一心を許せる存在だったのだ。

次、いつ会えるかわからない彼女に「さよなら」を告げ玄関の外に出た。生活スタイルが変われば会う機会は少なくなる、そう自分に言い聞かせ背中を向けた。最後に彼女は「相談しなくてごめん」と泣いていた。
だが、相談されたところで何ができただろうと考える。高校生の私はまだまだ子供で、こんなとき何の役にも立たないと実感した。
私を取り巻く輪の歯車がひとつ狂う。

それに合わせるように、次もすぐそこまで迫っていた――

【第十章】運命の悪戯か　（二）胸騒ぎの夜

窓の外に見える銀杏木は早くも黄色く染め始めていた。今年は秋の訪れが例年より早いのかもしれない、と思いながらバイオリンを肩に置いた。

校舎内は冷暖房が完備されており、年中適温が保たれているがやはり今の時期は外の空気が清々しくて気持ちよい。第三音楽室の窓をいくらか開け、中に風を通した。

かすかに響く声にバイオリンの音色が被る。といっても今この演奏を聴いている者などいないだろうけれど。

昨日美桜からメールがきた。

正式に退学届を提出し受理されたそうだ。当の本人はやはり体調が優れないらしく、代理として母親がひとりで訪れたそうだ。

結局担任にも詳しい理由は話さなかったらしく、ずいぶん詰め寄られたと言っていた。おそらく事を公にしたくない高等部校長あたりが口を噤んだということだろう。

変な噂が立たないほうが彼女のためでもある。もちろんクラスメイトの突然の退学に想像で話す者もいたかもしれないが、それは時間がたてば皆忘れていくことでもある。

所詮人の噂もなんとやら、といったところか。

そんな美桜のことに気を取られている間にもうひとつ。私の耳に入ってきたいつもと違う情報。それは昂さんから告げられた。

夏休みに入る前からパリへ出かけた暁がまだ帰国していない、というものだった。当初の予定から八月中の帰国はあやふやで遅くても九月中旬には戻るだろうと聞いていたらしい。それが、もう十月に入ろうかとしているのにまったく帰国する様子がないという。

（ひとりって、退屈――――…）

今までにない感情がゆっくりと私の心を埋め尽くす。
以前の私ならひとりでいることが当たり前であり、それに対して疑問に思うことなどなかった。むしろ人付き合いは煩わしいとさえ思い、良家の子女らしからぬ社交性に欠ける部分が何度か指摘されたくらいだ。
それが暁と出逢ってからは少しずつ変わっていき、最近ではひとりで過ごす時間が減ってきたと思う。

（今ごろ、何してるのかな…）

バイオリンを弾く手を止め、窓の外に広がる青い空を眺めた。暁もこの空を眺めているだろうか。ふと恋しくなりそのまま目を閉じ黙って午後の陽だまりに身を任せた。
離れているふたりの間の歯車がゆっくりと狂い始めたことを、このときはまだ知らなかった。何も知らない私は永遠に穏やかな日々が続くと信じてやまなかったのだ。

その日の夜中珍しく夢の途中で目が覚めた。普段なら浅い眠りの中で微かに目を覚ますことがあっても、それはすぐに意識が遠のき再び夢の中へ誘われる。
だが、今日はいつものそれとは違い何やら胸騒ぎがする。そう思いながら体を起こしサイドテーブルに手を伸ばした。
時刻は午前二時―
グラスに水を注ぎ一口含む。傍に置いてあるケータイを手にとり、

見慣れた名前を表示して発信ボタンを押した。静かな闇の中、私の耳元で呼び出し音だけが響き、待っている時間を長く感じさせた。
何度か呼び出し音が鳴った後、留守番電話に切り替わった。特にメッセージを残すわけでもなく切断ボタンを押す。しばらくすればかかってくるかもしれないと思い照明に手を伸ばす。スタンドライトは柔らかな光を放ったが、今まで暗闇の中にいた私の目にはそれでも眩しいくらいだった。

十分ほどたった頃ケータイの振動が伝わってきた。
慌てて着信ボタンを押す。すると少し響いた声が受話器から聞こえてきた。
「――――暁？」
『瑠璃、どうした？　夜中だろ？』
「うん、目が覚めたから…なんとなく」
『そうか。何かあったのか？』
「ううん、なんでもないけど…暁忙しい？」
『あ？　あぁ、さっき母さんが帰ってきて今から食事に出かけるんだ』
「そっか、なんか邪魔しちゃったね」
『いいよ、別に。今はゆっくり話してる時間ないけど…帰ってきたらまたかけ直すからな』
電話の向こうでは着替えをしているのか、扉が開かれる音や衣類の擦れる音がする。それを尋ねると、レストランで食事をするらしいが母親がデザインしたスーツが堅苦しく苦手だと笑いながら話す暁。
ネクタイも髪のセットもめんどくさいと文句を言いながら手を動かしているようだった。しばらくすると『よし』と聞こえてきて彼の支度が整ったことを察した。
母親が待っているからと早々に電話を切り上げられ、私のまわりは再び静けさに包まれた。照明を消しベッドに潜る。

だが、彼の約束は守られなかった。朝目が覚めてからずっと気にしていたが私のケータイが鳴ることはなく、それは午後になっても同じ事だった。
時間をおいてこちらから連絡をとろうと試みたが、電源が入っていないのか全く通じなかった。つい何時間か前までは笑いながら話をしていた暁のことを思い浮かべ、この間に何かあったのではないかと危惧する。心配したところで何もできない自分に苛立ちながら午後を過ごした。
もしかすると昂さんが何か知っているのでは、と期待を込めて中央塔の生徒会室へ足を運んだが、返事は思わしくなかった。私の顔に落胆の色が出る。何も情報を得ることができないまま数日が過ぎた。

いつものようにカフェの奥のソファ席でハーブティを注文し、空を眺めながらぼんやりと過ごしていた。午前授業終了の鐘が鳴ると足早にこちらに向かう昂さんの姿が見て取れた。
彼はいつものようにとりあえず珈琲を頼むと私の正面に座り口を開いた。
「あれから連絡、あったか？」
「え？　ううん、ないけど…」
「そうか」
「何度か電話はしてみたけど、繋がらない」
「……そうか」
少し返答が遅れたような気がした。彼は足を組みなおし手を顎にかけ目を伏せて何かを考える素振りを見せた。
「――――あいつ、帰ってこないかもな」
「は？」

ゆっくりと告げる昂さんの言葉を理解するのには時間がかかった。というより、現実味のない台詞を聞かされて彼の顔をただただ凝視するばかりだ。「帰ってこない」の意味がどういう意図で話されているのか、それを考えた。
「それ…どういうこと？」
「昨日、あいつの家に行って来た」
「…いなかったの？」
「いなかったどころか…家が売り払われてた」
「はい？」
「俺にも何が起こっているのか、わからん」
訪ねた暁の家はもぬけの空だったと昂さんは告げた。
雇われていた使用人たちも突然解雇を言い渡され、再就職先の手配をされたという。日本にいたはずの父親が家と使用人たちの整理をしてパリへと出発したそうだ。

「柚莉亜に確認したが、休学届が出たままになっているらしい」
「そう、なんだ」
「それが九月中旬の話で、それから連絡がないらしい」
「もう一ヶ月…か」
それまでのことを頭の中で整理する。すると考えが悪いほうへ進むのを止められなかった。
「――――辞める、のかな」
「その可能性は、ある」
急に目眩と焦燥感に襲われた。このまま暁と逢えなくなってしまうのだろうかという不安が一気に込み上げてくる。
昂さんは暁の父親の調査を進めていると付け足した。何か情報が入れば連絡がくるそうだ。沈み込んでいる私に優しい声をかけた彼は、運ばれた食事に軽く手をつけ時間を確認すると「またな」と言ってカフェから姿を消した。

まわりの喧騒も耳に入らないほど、私の心は闇の中深くへと沈められた――――

【第十章】運命の悪戯か　（三）運命の歯車

中間試験を終えた私は相変わらず教室に出向く気になれず、無意識のうちに第三音楽室へと足を運んでいた。どこにいても暁との想い出がありすぎて落ち着かない。いつ帰国するのかもわからない彼のことを待っている時間は途方もなく長く感じられた。

ピアノのイスに座り、鍵盤に手をかけたときだった。制服のポケットの中から振動が伝わってくる。右手で探り取り出すと通話ボタンを押した。

「はい、あぁ昂さん？」

電話の相手は昂さんだった。今は授業中のはずだが、どこからかけているのだろう。耳を澄ますが彼の声以外は聞き取ることができず妙な静けさを感じた。

「え？　うん…、はい？」

彼から告げられた言葉はごく簡単なもので済まされた。最後の返事が承諾と受け取ったのか、こちらに質問する時間を与えないまま電話は切れた。

繋がっていない電話のディスプレイをぼんやりと見ながら、昂さんから伝えられたことを考えていた。つい先ほど、暁が登校してきたという。しかも母親と一緒にだそうだ。それは柚莉亜さんから昂さんの耳に入ったらしく、彼は授業前にも関わらず中央時計塔の理事長室まで足を運んだそうだ。そこで暁を確保した、ということらしい。

（どうして、先に連絡くれなかったんだろう…）

淋しさと同時に信用されていないような、孤独感を感じた。暁の母親は先に学園を後にしたということだった。昂さんは私にここで待っているよう指示を出して電話を切ってしまった。
聞かされたことは「暁から大事な話があるから」ということだけで、詳しいことは何ひとつわからない。ひとりで待っている間、不安だけが募っていく。
何かしていないと落ち着かないが、ピアノやバイオリンを弾く気にはなれず窓の外を見ていた。いつもと変わらない景色。それなのに妙に胸騒ぎがして秋晴れの青空さえも私の心を明るく照らしてはくれなかった。

「———瑠璃」

不意に声をかけられ体がビクンッと揺らぐのが自分でもわかった。ぼんやりと窓の外を見ていた所為か、他事に気を取られていた所為か扉が開いたことに全く気がつかなかった。心を落ち着かせながらゆっくりと振り返る。

「…暁」

彼は黙ったまま真剣な面持ちで立っていた。私が首を傾げるとゆっくりとした足取りで部屋の中へ入り近づいてきた。

「———久しぶりだね」
「…あぁ」
そう短く返事をして手近な席に座る。私は窓辺に立ったままだったが、微妙に距離を置かれたような気がした。いつもと様子の違う彼にどう言葉をかけて良いのかわからず戸惑う。黙ったまま彼の顔を見ていると、しばらくして目が合った。

「――――瑠璃、大事な話がある」

長い沈黙の重い空気を払うように、暁は口を開いた。

「…何？」

「今まで、家の事って…話したことなかったな」

「え？　あぁ…そうかな」

昂さんから子供の頃の話を聞かされたことがあるが、暁本人から聞いたことはなかった。「母親に自由を奪われた子供」という印象は強かったが、過去の話だろうと一度も気に留めたことはなかった。

「俺の父さんは、若い頃に金もないのに友人たちと会社を立ち上げたんだ。その頃すでに一緒にいた母さんはモデルだったらしいけど、全然貧乏でな。母さんの収入で生活してたって話だから、父さんの立ち上げた会社も怪しいもんだ。でも、会社が軌道に乗り出して俺ができて、母さんはモデルを辞めた。まぁその後母さんはデザイナーに転向したんだけどな。俺が産まれた頃は、父さんの会社も今ほどでかくなくて、まぁ中小企業ってとこで」

「…そうなんだ」

「あぁ、でも小学校に入る前くらいだったかな…急成長し出してな。そのとき今の家に越して来た。それからはどんどん会社はでかくなるし、母さんも忙しくなるし…で。でも、俺には全然関係ないと思ってた。どっちの仕事にも興味なかったしな」

「…」

「でも…そうじゃないらしい」

そこまで言って暁は再び黙ってしまった。

恐らくどう言い出そうか考えているのだろうが、しばらく沈黙が続いた。じっと彼の顔を見ていると、悲痛な顔をしているのがわかり思わず目を逸らした。

「――――父さんの会社が、倒産した」

それは全くの不意打ちであった。
何も言葉が出てこない。こんなときどう言えば良いのか、そんなものは持ち合わせていなかった。ただ驚いた顔はしていたのだと思う。彼もまたそれだけ言うと再び黙って私から視線を逸らした。
ふたりの間に見えない壁が立ちはだかっているように感じる。目の前にいるのに遠く、手を伸ばしても届かないような錯覚さえ覚えた。

「もう、こっちの家は処分してある。しばらくはパリのデザイン事務所で世話になるから…だから、日本を離れることになった。今日は編入手続きに来たんだ」
最後の台詞を言い終わると、暁は大きく溜息をついた。

突然告げられた事実に、私の頭はまったくついていけず若干混乱していた。暁の家が売り払われていたことや、休学届が出されていて「もしかすると退学する」と予想していたにも関わらず、だ。心のどこかで否定していたのか、何かを期待していたのか。
まるで私たちには関係ない第三者の話をしているような感覚で、受け入れるのには時間がかかりそうだった。

（暁と…離れてしまう…）

かろうじて、そのことだけが理解できた気がする。もっといえば、それだけのことしか考えられなかった。
何も耳に入らなくなった私の傍で、何かが弾けたような気がした。それは私の中だったのか、窓の外だったのか、そんな錯覚すら覚えるほど混乱の渦に呑みこまれかけていた———

【第十章】運命の悪戯か　（四）決意のとき

「――いつ？」
「…え？」
あまりに小さく消え入りそうな私の声を、暁は聞き逃しそうになったのか反応が遅かった。その顔は明らかに「もう一度言って」という表情だ。
「いつ、日本を発つの…？」
「あぁ」
自分でも声が震えているのがわかるほどだった。おまけに瞳には今にも溢れそうなほど涙が溜まっている。瞬きをすれば床に落ちそうなほどに。

「…来週にはパリへ行くよ」
「そっか…もうすぐだね」
一緒にいられる時間が少ないとわかった瞬間、頬を伝った大粒の涙が一斉に床に落ちる。もはや止めることなど出来なかった。声を上げずに泣きじゃくる私をそっと抱き寄せた暁は、何も言わずただ黙って頭を撫でていた。
静かな部屋の中で、涙の落ちる音が響いているようなそんな気がした。

どれくらい時間が経ったのだろう。涙が流れなくなった後も言葉が出ない私と一緒で、暁もまた黙って窓の外を見ていた。そんな沈黙の中、私の心はあることで埋まっていく。それを告げようとしたとき彼に名前を呼ばれた。
「瑠璃…」
「ん？」

「大丈夫か？」
その問いには答えなかった。変わりに先ほどまで考えていたことを口に出した。
「…私も、パリに行く」
「はぁ？　お前っ、何言って？！」
「私…留学する」
真剣だった。泣きながら離れてしまうことを考えているうちに、これなら離れなくて済むとの考えに達した。
「いや、でも…」
「だめ？」
「そういうことじゃない」
彼が言わんとしていることは安易に想像できた。ひとりで決めることではない、そう言いたいのだ。
「両親には私が説得する。だから…」
「瑠璃…」
暁が溜息を吐いたような気がした。呆れているのだろうか、それとも心配してくれているのだろうか。その表情からは何も読み取れなかった。

「俺が卒業した後日本に戻ってくる。それまで待てないか」
「待てない」
「…簡単に言うなよ」
即答した私を目の前に彼の顔には困惑の色が広がっていた。が、それに反して私の意志は強くなる一方だった。
先ほどまで状況を呑み込めず泣いていたのが嘘のように、固い決心が私を支えていた。一度決めれば突き進むのが私の性格である。彼がどう言おうと変えるつもりはなかった。それをわかっていたのか「無理はするな」と一言告げて、それ以上は何も言わなかった。
きっとまだ心に弱い部分があったのだと思う。だからこのまま遠距離恋愛を覚悟する勇気は持てず、一緒にパリへ行くという強行を

思いついたのだろう。
後にして思えばなんと無謀な決心だったのだろうと思うが、この時はそれどころではなかった。

帰宅し自室の書斎に戻ってからはひたすら考え事をしていたのか、執事に話しかけられても気がつかないほどだった。慌てて返事をし、紅茶を運んでもらったが口にする気にはなれずいつの間にかすっかり冷めていた。
暁に両親を説得すると言ったものの、不安は拭えなかった。どう説得するか、そのことばかりを考える。両親といっても問題は父親なのだ。母は父の決定に逆らうようなことはしないし意見も言わない。
逆に言えば、母を見方に父を説得することは望めない。真っ向から父と対面するしかないのかと思うと少しばかり気が重かった。

第一邸宅に足を運ぶのは実に三ヶ月ぶりだ。玄関の前まできてさらに気が重くなったが今さら後戻りは出来ない。呼び鈴を鳴らすと執事が重厚な扉を開き中に招き入れた。
「お待ちしておりました」
そう言って一礼すると広間へ向かうよう案内された。執事の後をついて歩いていると偶然紫苑兄さんに出くわした。
「なんだ、瑠璃。珍しいじゃないか」
「紫苑兄さん…お久しぶりです。今日は早いお帰りですね」
「たまにはな。で、どうしたんだ？」
「あ…お父さまに話があって」
そう言うと傍から執事が「広間に案内するよう言われましたので」と説明した。兄さんは「ふーん」と頷いてから私の顔を見て何か考える素振りを見せた。

「そうか。でもまだ帰ってきてないだろ？」
「夕食までには戻ると伺っております」
「なら、僕の部屋で待てばいいよ。ひとりで広間にいるのも退屈だろう？　上なら咲織もいるから。案内してあげて」
兄さんがそう言うと「かしこまりました」と返事をし、第一邸宅の三階へと案内された。そのフロアは紫苑夫妻が使用している場所であり、南にある日当たりの良い来客用応接室に通された。扉を開けるとすでに咲織義姉さんの姿が見えた。

「瑠璃さん、お久しぶりね」
「ご無沙汰しています、お義姉さん」
「今、お茶を用意させますわね」
「ありがとうございます」
「立っていないで、お座りになって」
そう促されソファに座る。しばらくすると兄さんが入ってきて、三人でお茶を飲む形となった。

「――――で、父さんに話って何？」
興味本位なのか、真面目なのかどちらともいえない表情で聞いてきた。適当に誤魔化すことも出来るだろうと考えたが、思いとどまった。
兄さんに相談するかどうか迷ったのは事実だ。話したからといって状況が良くなるわけではない。しかしこのまま父のところに行ったとして、すんなり受け入れてもらえるだろうか。否、勝算はないのだ。
ここで兄さんに話をして味方についてもらうほうが幾分か勝機があるのではないかと考え、経緯を話すことにした。

「うん、学校のことでね…相談があって」
「何？　もう先の進路のこと？」

「うん…まぁ、そんなところ」
「何、何？　気になるねぇ」
「紫苑兄さん…私ね、留学したいの」
意を決して言った。目の前の兄さんはその言葉を聞いてもさほど表情を変えず、意外でもなかったのか「へぇ」と一言言って私の顔をじっと見ていた。

「――――お父さま…許してくれるかな…」
「どうだろうねぇ。僕や蘇芳は父さんの言う通りの人生を歩んできたけど。菖蒲は割と自由にさせてもらってるからなぁ。まぁ、頭ごなしに反対ってことはないと思うけど…」
「そっかぁ」
「なんとも言えないね。場所はどこだい？」
「…パリ」
「そんなに行きたいのかい？」
その問いには迷わず頷いた。兄さんも先ほどまでとは違って真剣な眼差しだ。私の真意を読み取ってくれたのだろうか。
「――――そっか。じゃあ僕も出来る限り瑠璃の力になるよ」
「ほんと？　ありがとう！！！」
「反対されなければいいね」
「兄さんに相談してよかった！！！」
本心からそう思った。思わぬ味方を得て、ここに来る前までの憂鬱な気分は少しばかり軽くなっていた。

テーブルに運ばれた紅茶がなくなる頃、父が帰宅したとの知らせを受けた。今すぐにでも話を聞いてもらいたかったが「食事の後で」と執事が伝言を運んできた。
一緒に食卓を囲む気はなかった。だが父が時間を割いてくれるわけもなく、仕方なく機会を待つことにした。最初から私の分の食事も用意されているのだと知った。

食事の準備が整ったと聞き、仕方なく兄さん達の後をついていくことになった。階段を下りる足取りがなんとなく重い。

久しぶりに両親の顔を見るのかと思うと、話をする以前に逢いたくない気持ちが勝り、軽くなっていた気分もどこかへ吹き飛んでいた。

そう、そこはまるで他人のいる場所のような感覚を受けた――――

【第十章】運命の悪戯か　（五）拒まれた道

広いダイニングルームの中央に白いテーブルクロスをかけられた十人がけの長テーブルが見えた。その中央にはフラワーアレンジメントがセットされ、まわりには五人分の食器がセットされている。お皿の上に置かれたナフキンはそれぞれ色が違う。

相変わらず細かいところまで手の込んだ演出がされているなと思いながら、自分が座るべき席を探した。

父が座る席から一番遠くに私の場所を見つけた。斜め前には紫苑夫妻が先に席についている。執事が私の後ろに立ちイスを軽く引いた。決して居心地は良くないが座らないわけにもいかない。

内心で「はぁ」と溜息を吐き仕方なく両親の登場を待った。暫くすると扉が開き久しぶりに見る父の姿が見えた。その後ろからは母がついてきている。

ふたりの姿を見てもそれが両親なんだという実感は持てなかった。

父は席に座るとわざとらしく私のほうに顔を向け、形だけの挨拶を済ます。

「瑠璃、久しぶりだね」

「…はい、お父様」

「聞いているよ、話があるそうだが？」

「はい、聞いていただけますか？」

「ふむ。食事の後でいいかな？」

「…はい、結構です」

結構ではなかったがそれ以外に返答する権利は持たなかった。ここでは父が絶対的存在であり、誰も逆らうことはできない。それでも話を聞いてくれる隙があるだけまだいい。

グラスに食前酒の白ワイン―と、言ってもまだ未成年なので私だ

けはザクロのジュース―が注がれ、前菜が運ばれた。ゆっくりと食事を楽しむ気分ではなかったが、手をつけないわけにもいかずナイフとフォークを手に取り、静かに口に運んだ。

第一邸宅に自分から来ることは珍しい。普段は第二邸宅で事足りるため両親からの呼び出しがないか、あるいは親戚が集まる食事会の時くらいしか足を運ばない。

そのため両親の顔を見るのは、多くて年に数回といったところだ。成長するにつれ、徐々に会うことを避けてきた私は、兄姉よりも会う回数が少ないかもしれない。

暁と出逢うまではこんな事態は想像もしていなかった。大学部を卒業するまで両親に相談することなどないだろうと思っていたし、まさか自分から進路を嘆願することなど夢にも思っていなかった。

何もなければ両親に言われるまま、縁談だって引き受けていたかもしれない。それに疑問を抱くほど私は世間のことを知らなかった。

おそらく両親もそう考えているに違いない。子供の頃から面倒なことが苦手だったため今の学園に入学することも特待生試験を受けることも、両親の命令に従ったまでだ。

ふたりにとって私は手のかからない末っ子であり、いつだって自分たちの思うまま動かせる「駒」に違いないのだ。

それなのに…

今から私が言おうとしていることを聞いたとき、どういう反応をするだろう。

きっと期待を裏切ることになるのだろう。

それでも、諦めるわけにはいかなかった。私は自分の大切なものを見つけてしまったから。今さら両親の「駒」には戻れない。

そんなことを考えながらの食事だったため、何を食べたのかよく憶えていない。気がつけば殆ど手をつけていない私の皿は順番に下げられ、見ると両親たちも食事を終えようとしていた。

そして、紅茶用のティセットが用意された。

たとえ目の前に座るふたりが自分の両親だと実感できなくても、逆らうことができない状況に嫌気が差していた。籠の中の自由しか与えられないことにもどかしさがゆっくり押し寄せてくる。しかし今は余計なことは考えないようにしようと首を軽く振った。

カップに紅茶が注がれた後、私は思い口を開いた。

「…お父さま、折り入ってお願いがあります」

食後のコーヒーを口にしていた父は、カップを持ったまま私のほうに顔を向ける。その表情は何も読み取ることのできない「面」だった。決して人に本心を見せようとしない者の目だ。

「あらたまって…何かな？」

「私…留学したいんです」

手元がピクッと動くのを見逃さなかった。おそらく動揺しているに違いない。だが、返ってきた言葉は冷静そのものだった。

「また、急な話だな」

「…お許しいただけますか？」

この言葉は賭けだった。できれば詳しいことは言いたくない。私は嘘をつくのがこの上なく下手だ。うまく誤魔化すことができない。まして相手はこの父だ。少しでも疑わしい言動があれば、自分を欺こうとしたとして許しどころか話すら聞いてもらえない可能性があった。

そのため単刀直入に伝えることを選んだ。

これで首を立てに振ってくれれば何も問題はない。だがそうでない場合は途端に説明することが増える。兄さんが見方についてくれたとはいえ、詳細を話せば話すほど勝算はないと判断した。待って

いる時間は長く感じられる。

次に発せられた台詞は、途端に私を落胆させた。

「…それだけでは返答しかねるな。説明不足だよ」

やはり理由を聞いてきたか、と思った。全く考えていなかったわけではない。だが、自分の思惑が愚かな期待だったと知らされた。

先ほどまで珈琲を飲んでいた父はカップを置いて、促すような視線を私に向けた。こんなことにそう時間を割いていられないといったところだろう。

仕方なく私はパリ留学の意を唱えた。語学勉強のためと言ってはみたが納得いかなかったようだ。「それならフランス語が話せる人材を用意する」と言われた。仕方なく暁がパリへ経つことを説明した。

きっと父のことだから私の交友関係などとっくに調べがついているはずだ。だが彼と共にパリへ行くという申し出はさすがに予想していなかったようだ。

話し終わった後、誰も喋らなくなり広い部屋の中は静寂に包まれていた。息をすることさえ響いてしまうほどだった。

「———駄目だ」

静寂を破る一言はやはり父のものだった。

「父さん！！！」

父の否定的な言葉を聞いて、黙っていた兄さんが立ち上がった。

兄さんの行動は想定内だったのか即座に制した。

「紫苑…座りなさい。まだ食事の途中だ」

「…っ！！！」

父に睨まれた兄さんは何か言いたそうな顔をしていたが、一旦退

いた。隣で咲織義姉さんが不安そうな表情をしていたが、私はそんなことに構っていられるほど冷静ではなかった。

「お父さま、お願いです！！！　行かせてください！！！」

思わず立ち上がり声を荒げて訴えていた。だがそんな私と正反対の父は腹立たしいほど冷静な表情で見据えていた。

「…そもそも、私はその男との交際すら認めた憶えはない」

「そ、それは…」

この一言には反論できなかった。

そうだ、暁との関係は兄や姉たちのように認められた関係ではなかった。本来ならこうなる前に同意してもらうべきだったのだ。古い体質を持つ旧家の主である父のことだ。もっと早い時期なら交際自体は許してもらえていたかもしれない。

だが、今となっては成り上がりの事業家、しかも倒産した家の息子とレッテルを貼られるだろう。それではこの父が認めるわけもなかった。

心のどこかで、未だに縁談話がないことを自分の都合のいいように変換していただけかもしれない。私は特別なのでないかと。私の我儘は許されるのではないかと。しかしそれが甘い考えだったことを知らされるのはもう少し先の話だ。

「自分の立場を良く考えなさい」

そう言い残し背中を向けて部屋を出て行った。

それから何度か第一邸宅に足を運んだが、父が会って話を聞いてくれる様子はなかった――――

【第十章】運命の悪戯か　（六）旅立ちの日

翌週―

すべての手続きを終え暁が学園を、いや日本を去る日がやってきた。思えば何もできない一週間だったと言える。ただ、自分の無力さを痛感させられただけだった。

空港に向かうよう運転手に指示したが、横で執事が「旦那様からお許しを頂いていません」と却下したため、とりあえず学園に送り届けられた。

校門をくぐり中央塔へ向かうと中から昂さんと楠城先輩が出てきて手を引かれた。不思議に思っていると北門へと連れて行かれ、そこで待っていた昂さんの送迎車に乗せられた。

「…昂さん？」

「一緒に行くぞ。今ならまだ間に合うだろう」

「どうして…？」

「遠慮すんな。――――空港まで、急いでくれ」

その言葉を合図に車は走り出す。後ろからは楠城先輩が乗った車もついてきていた。おそらく、私が空港に行きたいと言っても反対されることを見込んでいたのだろう。

でなければ、わざわざ北門に車を待機などさせていないだろうから。

流れる景色を見ながら、気持ちは複雑に揺れ動いていた。

暁に逢いたい気持ちはもちろんある。だが、今日でしばらく逢えないのも事実だ。いわば今日は「別れの日」になるのだ。無邪気に昂さんの好意に喜ぶことができない。

空港に着くと「ふたりで話したいこともあるだろう」と見送られ

た。決して足取りは軽くなかったが、暁がいるであろう出発ロビーへと向かう。
ファーストクラス用のラウンジでひとり座る暁を見つけた。殆どの荷物は先に送っているのだろう。彼の荷物は驚くほど身軽なものだった。
窓の外をぼんやりと眺める後ろ姿に声をかける。

「――――暁」

その声に驚いたのだろうか。振り返ったその顔は無表情ともいえるもので、少しやつれた印象を受けた。

「見送り、いいって言っただろ？」
「そうだけど…」
「…顔見たら、余計淋しくなる」
「ごめん…」
淋しい想いをしているのは自分だけではないのだと思い知らされ、俯いた。見たこともない彼の表情を直視することができなかった。
「別に謝ることじゃない」
優しい言葉に思わず涙が出そうになったが、ぐっと抑え唇を噛んでいた。

このまま時間が止まってしまえばいいのに――――
そうすればこんなに哀しい想いをしなくて済むのに――――
きっと子供でなければ…もう少し大人だったらこのまま一緒にいけるのに――――

そんなどうにもならないことを考えながら、言葉に出すこともできず、ただ時間が過ぎていくのを待っているだけだった。彼もまた何か話そうとするが声には出さず、呑み込んでいるように見えた。

一定のリズムを刻む時計の針が疎ましい。
そんな沈黙を破るように、暁がこちらをじっと見つめ口を開いた。
「――話したか？」
「うん」
「そうか」
「…まだ、許してもらってないけど」
「だよな…」
そう簡単に許してもらえると思っていなかったのか、それほど落胆した様子は見られなかった。きっとある程度の覚悟はしていたのだと思う。

「…でも、きっと許してもらって、暁のとこに行くから」
「あぁ、でも無理はするな」
そう言って私の頭をクシャっと撫で、おでこにキスをした。
我慢していた涙が不意に零れそうになる。空港に向かう車の中で、今日は何があっても泣かないと決めていた。
しばらく逢えないのに、最後に見た顔が泣き顔というのは嫌だったからだ。嘘でも笑顔を見せて彼には安心して出発してもらいたかった。

そして、ラウンジ内にアナウンスの声が響き渡る。それを聞き顔を上げた彼は搭乗券の確認をした。繋いだ手が解かれるのも時間の問題だった。
「――じゃあ、俺行くから」
「…うん」
立ち上がろうとした彼の手を振り解くこともできず、そのまま無言で歩き出した。歩いている道は別れの道。どうして一緒に行けないのだろうと、そればかり考えてしまう。今、そんなことを言って

も仕方ないのに。
「大丈夫。すぐに逢えるからな」
「…そうだね」
「約束、したからな」
「…うん」
そして、手を離す瞬間私は目を閉じた。これ以上去っていく彼の姿を見ていたくなかったから。そう思っていると暁がそっと抱き寄せてくれた。
彼の腕の中にいる、ほんの一瞬の出来事が永遠にも感じられるほど心地良い、愛しい時間に変わる。

温もりが遠ざかった後、夢から覚めたように目を開ける。その視界に入ってきた光景は暁が搭乗口の中に消える後ろ姿だった。彼は振り返ることなく、軽く手を挙げていた。
やがてその後ろ姿も見えなくなると、我慢していた涙が一斉に溢れ出した。止めることはできなかった。

もう、永遠に逢えないわけではないのに…
でも、次はいつ逢えるかわからない…

その淋しさだけが私の心を埋めていった。目を閉じても顔を押さえても涙は止まってくれない。何をしても暁の後ろ姿が浮かんできて、いいようのない孤独が押し寄せてきた。

「――――置いて、いかないで――――」

もうとっくに見えなくなった暁の姿を思い出し、そっと呟いた。本当は直接言いたかった言葉。でも言っても彼を困らせるだけ。そう言い聞かせて心に留めていたが、言わずにはいられなかった。
涙を拭いながらその場を立ち去り、空港の屋上へと足を運び暁が

乗ったであろう飛行機を見送った。
空はこの季節には珍しく、雲ひとつない青空がどこまでも澄み渡っていた。頬を撫でる冷たい風が涙を乾かしていく。ただ、ぼんやりと空を眺め続けた。

「――――…瑠璃」

名前を呼ばれ振り返る。そこには昂さんと楠城先輩が立って私を見ていた。いつからそこにいたのか、まったく気付かなかった。

「昂さん…先輩…」
ふたりは優しい笑顔を向けながら、ゆっくりと近づいた。
「…今日は、我慢すんな」
「……うん」
その一言が引き金のようになり、一旦止まっていた私の涙は再び零れながら頬を伝う。もう立っているのも辛くなり、その場に崩れ落ちた。
こんなに泣くなんて自分らしくないと、そう思ったが脆く砕けた心は傷を負ったまましばらく塞ぐことなく見えない血を流しつづけた。飛行機のエンジンの音が私の泣き声を掻き消してくれる。傍にいたふたりは何も言わず、ただ静かに見つめていた。

それからしばらくの間、私は人に逢うのも話をするもの嫌になり見えない壁の中に閉じ籠り、ただ時間が過ぎるのを静かに待った――

【最終章】すべてを胸に　（一）黄昏の時間

暁が日本を発ったあの日から私の時間は止まったままだった。まわりの時間は私を置いて進んでいく。ぽっかり穴が開いてひとり世界の果てに取り残された気分に支配されていた。

無常にも過ぎていく時間の中で、逢えない日が続くともう永遠にこのままではないかと考えてしまう。ただ逢いたい想いだけが募り、徐々に声を聞くだけでは満足できないようになっていた。

傍にいるときは何も不思議に思わなかった当たり前のことが、今はそうではない。離れてみて相手の存在の大きさに気がつく。ふたりを繋いでいるものが不確かであればあるほど、不安は大きくなるばかりだった。

以前からひとりでいる時間は多いほうだったと思う。でもどうやって過ごしていたのか、今では思い出せない。ひとりが心地よかった頃も遠い昔のように感じる。今はひとりになると、ただぼんやりと窓の外を眺めることが増えていた。

部屋の窓を開けてテラスに出る。冬の冷たい風が私の頬を刺激するが寒さはあまり感じない。明るい空の下では暁を少しでも近くに感じれるような気がして、そこから動く気にはなれなかった。眩しい太陽の光とはうらはらに、私の心は闇に閉ざされていたが「暁もこの空を見ている」と思うと幾分か気分が落ち着く。

どれくらい時間がたったのだろうか、扉をノックして部屋に入ってくる姉さんの姿が見えた。慌ててテラスまで駆け寄り声をかける。

「瑠璃、何やってるの？風邪ひくわよ」

「…うん」

姉さんは私の手を引き部屋の中へと背中を押す。その後両腕で肩を覆いながらテラスに近づくと、開け放たれた窓を静かに閉めた。

肩にかけられたストールと姉さんの手が温かいのは、きっと私の体が冷え切っているためだろう。冷たくなった手を両手で包み込むように握ると、ソファに座るよう体を引っ張った。促されるまま座り込んだ私を見ると、執事に温かい紅茶を運ぶよう命じた。

「お父さま、会ってくれないんですって？」

執事が部屋を出た後、湯気の立つ紅茶のカップを手に取り静かに話し始めた。

「うん」

「そう…困ったわね」

姉さんの顔はやや呆れた表情になっていた。それは私に会わない父に対してのものなのか、いつまでも子供の私に対してなのかはわからなかった。

兄さんや姉さんに比べると、私は両親のことは何も知らないほうだと思う。ふたりが何を考え自分のことをどう思っているのかはまったくと言っていいほど予想できない。記憶を辿ってもまともに話をしたことが何度あるのかあやふやだ。

物心がついた頃から、両親にとって子供たちは家や会社のための駒でしかないのではと思うことも少なくなかった。家柄を重視する古い体質の残る旧家という壁が、私にとっては窮屈以外の何物でもなかった。

「そうそう。これ、昂さんから預かったの」

カップを置くとソファに置いてあった封筒に手を伸ばした。部屋に入ってきたとき置いたまま、今まで忘れていたようだ。

「…何？」

「開けてみれば？」

書斎にあったペーパーナイフを手に封筒を開けると、中にはフランス行きのチケットと手紙が入っていた。どうやら昂さんは冬休みに暁に会いに行くようだ。その日程と内容が手紙には記されていた。

彼の気配りなのか、ただのおせっかいなのかはわからない。ただ私も休みに入れば会いに行くだろうと予想したのだろう。こちらが手配する前に先回りしたということになる。
「さすが昂さん。手回しが早いわね、いいとこあるじゃない」
「…うん、そうだね」
「瑠璃の相手が昂さんだったら、お父さまもあそこまで反対しなかったかもね」
「えぇ！？　な、何言い出すの？急に…」
「うふふ、なんとなく思っただけよ」
ニッコリと微笑みながら話す姉さんの言葉は、どこまでが本気でどれが冗談なのかは読み取れなかった。

確かに子供の頃、昂さんは「面倒見のいい兄」という印象を持っていた。だが次第に接点はなくなり、暁と関わりを持つまで疎遠になっていた。それも私が特待生になり校舎に近づかなかったためなのだろうけれど。
昂さんに対して恋愛感情は持ったことがない。物心着く前から一緒にいたはずだが、私にとってそういう対象ではなかったのだ。
「今回は昂さんの好意に甘えなさいな」
「そうだね」
「あ、そうそう。私も一緒だから」
「えぇ！？　なんで？」
「だって…会ってみたいでしょ？　瑠璃の恋人に♪」
「あ、そう…」
まさか姉さんがついてくるとは思っていなかっただけに、かなり驚かされた。でも昂さんとふたりきりよりは気が楽かもしれない。
封筒の中に入っていたチケットが二枚だった理由がここでわかった。昂さんは姉さんが行きたいと思っていることを知っていたのだ。いつの間にそんな連絡を取り合っていたのだろうと不思議に思う。

「邪魔する気はないから、安心して」
「うん…」
「楽しみだわ♪」
目の前で紅茶を飲んでいる姉さんの顔はご機嫌なものだった。そう言えば、姉さんにはいろいろ相談したにも関わらず、暁のことはおろか写真すら見せたことがない。今回の旅行はいい機会かもしれないと思った。
それにひとりでパリへ行くと言い出すと、旅行とはいえ反対されるかもしれないと考えていた。これで余計な心配はしなくて済みそうだ。さすがに姉さんと一緒なら大丈夫だろう。

やっと暁に会いに行ける――――…
姉さんや昂さんのことは予想外だったが、その予定があるだけで私の心はほんの少し晴れていくのがわかった。

だが、これが楽観的な行動であることに私も姉さんも気付いていなかった。扉の向こうでは執事が音も立てずじっと立っていた――
―

【最終章】すべてを胸に　（二）不穏な空気

冬休みに入り旅行の準備をしていると、書斎に置いていたケータイ電話が振動していた。相手は滅多に電話などかけてこない昂さんだ。珍しいこともあるなぁ、と思いながら通話ボタンを押す。

用件はパリでの予定についてだった。何度か暁と電話しているから簡単に予定などは話している。今日は確認の意味でかけてきたのだろう。

『暁が空港まで迎えに来るみたいだな』

昂さんにも連絡があったらしく、私が聞いている情報と相違はなかった。うんうん、と頷いて話を聞く。

『――ただ、日中はモデルの仕事があるとかで、あまり時間はとれないって』

空港に迎えに来たその足でホテルまで送り、当の本人は撮影現場に向かうらしい。そこまでは聞いていなかった。

私に淋しい思いをさせるかも、と気を遣ったのだろうか。

『――まぁ、夜は時間あるだろうから一緒に飯くらい食えるだろ』

それが昂さんの気遣いであることは明らかだった。声が暗くならないように「そうだね」と答えて書斎の引出しを探っていた。

そこであることに気がつき、思わず声が出る。

「あれ…？」

電話の向こうで不思議そうな彼をよそに、何度も引出しを確認する。

思い当たる場所をすべて探ってはみたが、やはり気のせいではないようだ。傍にあったイスに座り、頼りなく溜息が漏れる。

「――パスポートが…ない」

いつからないのか、見当もつかなかった。最後に確認したのはい

つだったか？　夏休みに海外へ旅行へ行き、その後書斎に片付けたはずだった。
「――――ごめん、昂さん。また連絡するね」
そう言って電話を切った。

電話を切った後も何度か探してみたがやはり見当たらなかった。まさか、と思い執事に確認すると思いがけない返答だった。
「旦那様の言い付けで、お預かりしています」
迂闊だった。
姉さんと一緒に旅行へ行くという思いがあったため、すっかり油断していた。すでに父の手は伸びていたのだ。
すぐに昂さんに事情を話した。こればかりはどうにもならない。パリ行きは断念せざるを得なかった。

書斎に戻り父がどこまで調べ上げているのか考える。私の行動は監視されていたことになるが、それはやはり留学したいと言い出した頃からだろうか。考えれば考えるほど、深い溜息しか出てこなかった。そんな私の思いを嘲笑うかのように、その日の夜第一邸宅に招かれた。

両親からの呼び出しは私の心を大きく沈める。このタイミングだ、きっとパリ行きのことを言われるだろう。
久しぶりに対峙する父との間に不穏な空気が流れ、降りかかろうとしている嫌な予感を払拭することはできなかった。
第一邸宅での食事は特に会話もなく、淡々と料理が運ばれるだけのものだった。テーブルには父と母、そして紫苑兄さんと咲織義姉さんが座っていたが、誰もが沈黙を破ろうとはしない。部屋にはかすかに食器のぶつかる音が響くだけだった。

そんな中、食欲がない私は次々に運ばれる料理に手をつけるわけ

でもなく両親の様子を伺っていた。何か用件があって呼ばれたことには違いない。いつ切り出されるのだろうと、そればかりが気になる。

メインディッシュの皿がまだ半分ほど残っている状態で、父の重い口が開かれた。

「瑠璃…旅行の予定をたてていたそうだね」

白々しい言い方だと思った。だが、それを顔に出すわけにはいかない。小さく「はい」と返事をして相手の出方を待った。

「――――誰と行く予定だったのかな？　あぁ、菖蒲だったかな」

何もかも把握しているのは明らかだった。もう私の顔は見ないで皿に残った料理を口にしながら独り言のように話している。

「――――聞いた限りでは、菖蒲だけではないだろう？」

ここでようやく発言を求められていることに気が付いた。父の顔を見ずに昂さんも一緒の予定だったことを告げる。その台詞に一瞬父の表情が歪んだように見えたが、すぐに元の作り笑顔に戻っていた。

「昂…あぁ、聞いた憶えがあるな」

「柳原家のご子息ですわ、あなた」

横から母が説明した。そのやり取りすら図られたもののように見え、ますます警戒心は強くなる。

「あぁ、あの昂君か。しかしいくら菖蒲が一緒だからとはいえ、あまり感心できたことではないね」

正面に座っている紫苑兄さんに視線を向けたが反応はなかった。口出しをすべきではない、ということなのだろうか。

そのまま食事をする気分にはなれなかったため皿を下げてもらう。口直しにと紅茶とデザートを運んでもらい、乾いた喉にミルクティを流し込んだ。

「――――まぁいい。旅行はキャンセルするように、いいね」

キャンセルも何も、パスポートを握られていてはどこにも行けないではないか、と内心毒付いた。返事をするわけでもなく、頷くこともしない私に追い討ちをかけるかのように父の言葉が浴びせられる。

「――この冬休み、自由行動は許さんよ。瑠璃、お前も来年十八歳になる。今まで自由にさせてきたが、そろそろ一条家の子女としての自覚を持ちなさい。実は、お前に縁談があってな。年明け早々にも顔を合わせたいのだ」

まったく予想していないことだった。思わず立ち上がり反論しようとしたが紫苑兄さんに押さえられた。ここで反論しても仕方がないと言わんばかりの表情だ。

気に入らない面持ちで座っていたはみたが一刻も早く立ち去りたかった。やがて「書斎に戻る」と言って先に父がダイニングを後にした。

【最終章】すべてを胸に　（三）重なる思い

翌日から使用人総括が何人かの教育係を連れて第二邸宅にやってきた。今までのように朝のんびり寝ている暇もない。決められた時間に起こされ自由時間もたいして与えられないまま再教育が行われた。

朝から茶道華道、礼儀作法に始まりレディたるものを叩き込まれる時間は苦痛以外の何物でもない。それでも形だけはそれらしく振る舞い、さっさと開放してもらい自室に戻る始末だった。

（息、詰まりそう…）

窮屈この上ない指導に愚痴しかでてこない。僅かに過ごせるひとりの時間が貴重なものだった。暁に会いに行けないと連絡したのは両親に呼び出された翌日のことだった。電話の向こうではがっかりした様子で理由を聞かれたが、曖昧に誤魔化した。

パスポートを取り上げられていることも縁談のことも話してはいない。昂さんにも縁談のことは言えないでいた。知っているのは両親と兄姉だけだ。まともに相談する相手がいない私にとっては、まだ会いもしていない縁談相手になんとか断ってもらう方法はないか、そう考えることが精一杯だった。

そして年明け―

新学期が始まる前、強引に日取りを決められ用意されたホテルへと連れてこられた。両親に加え見たこともない大人たちが私を取り囲む。当の本人をよそに社交辞令とも言える上辺だけの言葉を羅列

し、ご機嫌を伺っていた。
昨日になってようやく紹介された私の縁談相手は鷹見亨也（たかみきょうや）という官僚一族の末息子だった。歳は蘇芳兄さんと同じらしいので私より七歳上ということになる。
てっきり同じような年齢の相手を紹介されると思っていただけに意外だった。その歳まで決まった相手がいないというのはかなり珍しいほうだと思うからだ。それなりの家柄のため本来ならもっと早くに婚約が済まされる。
もしかすると、かなり難しい相手なのでは？と勘ぐってしまう。

「やぁ、初めまして」
そんな私の予想を裏切るかのように、現れた青年はどこからどう見ても好青年といった感じで兄さんたち同様、大人の雰囲気が漂っていた。
見慣れない大人たちと一緒に食事をした後ふたりきりにされた。特に会話も進まないまま庭園に出て渋々斜め後ろを歩いてついていく。着慣れない着物と草履が足を引っ張っていた。

「今日はずっと浮かない顔をしているね」
不意に投げかけられた言葉にドキッとした。そんなつもりはないと言ってはみたが、どう受け取ったかはわからない。
「――まぁ、親が決めた縁談なんて…そんなものかな？」
初対面の相手に心を見透かされたようで思わず俯いた。家を出たときから顔に出さないよう心がけていたつもりだが、表情に出ていたのだろうか。
「――僕も同じだから、安心していいよ」
「はい？」
何か聞き間違いをしたのかと思い顔を上げた。
「安心して」

私の顔を見ながらゆっくりと呟く。
「――――僕には、この縁談を引き受けるつもりはないから」
つい先ほどまで笑顔だったのにまるで別人のように変わっていた。はっきりと言い放ったその表情には哀しみの色が滲み出ていた。そこに何かの引っかかりを感じ取った。

それは予想外の台詞だった。
会う前から断ってもらう方法はないかと思案していたが、まさか相手にその気がないなどとは考えもしなかったからだ。
そもそも最初から断るつもりならば縁談話に応じる必要はないだろう。だとすれば、私と同じように両親の薦めで断れず、強引に事を運ばれたのかもしれない。

「不思議そうな顔をしているね」
「え？　あぁ、ちょっと驚いただけです。ごめんなさい」
「無理もないよね、こんなこと言い出したら誰だって驚くよ」
最初に会ったときの好青年、という雰囲気は残っていたが第一印象とは少し違って見えた。何か思い詰めているようにも見える。
「どうして縁談を引き受けたんだろう？　…って思ってる？」
曖昧な返事をしてみせたが、どうやら享也さんには何もかもお見通しのようで誤魔化しがきかないようだ。
「――――いつも断るんだけどね、両親もなかなかしぶといんだよ。今回もいつものように断ろうかと思ったんだけど…なんとなく、君には会ってみたい気がしてね。ただそれだけなんだ」
「…どうして、私と？」
その質問には答えにくかったのか、享也さんは視線を逸らし黙ってしまった。しばらくの間沈黙が続く。
「…なんとなく、君と僕は似ている気がしたから、かな」
苦笑いを浮かべて言った台詞はあながち嘘ではないと思うが、それが本心のすべてだとも思えなかった。本当の理由を隠すために別

の理由を持ち出した感じだ。

そう感じたのは、今回親の薦めで強引に縁談を持ちかけられたことを指しているのかと問うと「どうかな」という曖昧な返事だったからかもしれない。

長居し過ぎたのか体が冷えてきた。この時期の庭園は長時間過ごすものではない。享也さんもそう思ったのかラウンジで紅茶でも飲みながら話をしようと提案した。

開けられた扉の中からは暖かい風が流れてきた。急な温度の変化に顔が火照る。一番奥のゆったりとしたソファに通され、温かい紅茶と焼き菓子が運ばれた。

途切れた会話が再開されることもなく、目の前にあるカップを手に取り口にするだけの時間が過ぎる。何か話さなければ…と思うが何ひとつ話題が出てこない。先ほどまでとは違って音楽が流れている分、気が楽ではあるが。

窓の外をぼんやりと眺めながら気まずそうにしていると、享也さんは持っていたカップをソーサに置き同じく窓の外を見ながら呟いた。

「…僕には、想いを寄せる人がいるんだ」

それはまるで独り言のようだった。消え入りそうな声で呟いたその台詞を、もう少しで聞き逃すところだった。

【最終章】すべてを胸に　（四）叶わぬ想い

「…え？」

咄嗟に出た言葉も相手に聞こえるほどの声だったかわからない。口にしようとした紅茶のカップを持ったまま、今聞いた台詞を反芻する。享也さんの顔を見るがこちらを見ようともしないし、表情も変わらない。

まわりから見れば涼しい顔をして紅茶を飲んでいる、そんな風に見えるだろう。だが、傍にいると奥底に哀しみを秘めていることがわかる。

私の視線に気がついたのかゆっくりとこちらを見る。そして世間話でもするかのように穏やかな口調で語り始めた。

「…もっとも、片想いでもう叶うことはないけどね。いつまでも女々しいと思うよ」

「そう…なんですか。でも…」

「相手の女性はね、もう結婚することが決まっているんだ。だから片想いで終わるんだよ」

哀しみの正体は、諦めようとしてるその姿なのだろうか。こちらを見ながら話していたのにいつの間にか窓の外を見つめている。

この人はどうして自分にそんな話をするんだろう。

普通お見合いの場で―両親が勝手に決めたこととはいえ―他に好きな人がいるという話題は嫌われるだろう。私だから話しても問題ないと判断したのだろうか。では、何故。

「―――彼女は、僕のことなんて幼なじみとしか思っていないだろうし、きっぱり言われてしまったからね」

その告白は独り言のように呟かれる。私が聞いているかどうか確認をする様子は見られない。

こちらとしても、どう口を挟んでいいのかわからないから黙って

聞くことしかできない。いや、こんなときかける言葉など本当はないのかもしれないが。
「…何を、言われたんですか？」
催促するようで申し訳なかったがやはり気になる。だが、その直後聞くべきではなかったと後悔することになる。

「…蘇芳を愛している、と」

そう言い放った享也さんの顔は歪んでいた。聞かされた私も今の台詞が聞き間違いでなかったかと思うほど動揺した。それは不意に兄さんの名前が出てきたからかもしれない。確かに歳は同じだが知り合いなどということは聞かされていなかった。
困惑して言葉に詰まっている私に、躊躇することなく告げる。
「――――そうだよ。僕の好きな人は藤堂純玲（とうどうすみれ）だ」
その名前には確かに聞き覚えがあった。当たり前だ、蘇芳兄さんの婚約者なのだから。初めて紹介されたとき、滅多に人の顔と名前を覚えない私が珍しく「綺麗な人」と思い印象が残った。おそらくここ数年のうちに私の義姉になる人だ。
では、今日は私を蘇芳兄さんの妹と知って会いに来たのだろうか？
私に会えば、嫌でも兄さんのことを思い出すのではないのだろうか？

「…あの、私を蘇芳の妹と知って…？」
「あぁ。旧家である一条家のお嬢さんとの見合いだと聞かされたとき、すぐに蘇芳の妹だとわかったよ。そしてすぐ下の妹・菖蒲さんに婚約者がいることは知っていたから、一番下の君だということもね。でも兄妹とはいえ、似てないね」
「兄のこと…嫌いじゃないんですか？」
その台詞は意外だったのか、驚いた顔でこちらを見た。その直後、ふっと表情を緩めクスクスと笑いながら視線を逸らした。

「そんなことないよ。蘇芳は今でも僕にとって良い友人でありライバルだ」
「でも…」
「僕たち三人は幼なじみでずっと一緒にいられると、そう思っていたよ。でもそれが叶うのは子供のころだけだね、成長するにつれ事情は変わってくる。純玲が蘇芳を選んだことは彼女の自由だ。それを責めたりすることはできないよ」
強い人だなと、思った。自分の愛する人が別の人を選んだのに責めたり嫌ったりすることなく受け入れている。だからこそ哀しみを引き出せない場所に隠してしまったのだろうけれど。

「…辛く、ないんですか？」
「辛くない、といえば嘘になるかな。彼女の婚約が決まったときそれが受け入れられなくて姿を消したことがあったんだ。遠く離れてしまえば忘れられるんじゃないかって。でも現実は違った。どこにいても、何をしていても思い出すのは彼女の笑顔ばかりだ。忘れることなんてできるはずがなかったんだよ。それは君が一番知っていることなんじゃないのかな？」
不意に質問を投げかけられて思考が停止した。この人は何の事を言っているのだろう？
遠く離れても忘れることなどできない、それは暁のこと？
ならば何故、この人はその存在を知っているのだろう。どうして私の愛するひとのことを…
「――君に会ってみたい…って言ったよね。蘇芳の妹だから興味があった、っていうことも理由だけど愛する人の傍にいられないことをどう感じているのか知りたくてね。もしかしたら自分と似てるんじゃないかって、そう思っていたけど違うみたいだね」
「あの…どうして暁のこと…？」
「一応、お見合い相手のことは一通り調べる性質（たち）なんでね。気を悪くしたなら謝るよ」

何も知らずにこの場にいるのは私だけかもしれないと思った。自分だけ子供のような気がして恥ずかしかった。この件に関しては享也さんに非があるのではなく、予想していなかった私のほうが悪いだろう。「そんなことないです」と否定した。

しばらく沈黙が続いた。ラウンジの中を行き交う人や音楽が耳に入ってきていたが、神経のほとんどは遠くにいる暁のことに廻らされていた。

「君のような人に愛されている彼は、幸せだね」

「…え？」

「僕の場合はどんなに手を伸ばしてももう届かない人だ。でも君は違う。それに？」

「それに…」

「まだ諦めていない顔をしている。強い意志が表れているよ」

そうかもしれません、と強く言うと享也さんは優しい笑顔を向けてくれた。それはふたりきりになって初めて見るかもしれない表情だった。

「心から愛する人がいるのなら、手放しちゃ駄目だ。いつかきっと後悔するから」

「…はい」

改めて暁への想いを強くした。何があっても諦めないと、決心する力をここでもらったような気がした。

その後は他愛もない話をして過ごした。

ホテルのロビーで別れるときは、最初に出会ったときの「好青年」の顔に戻っていた。ラウンジでふたり話していたときとは別人だなと思った。ああやって身近な人に心配かけまいと本心は見せないのだろう。

彼らの車を見送ってから後方の車に両親を乗せ、さらに後ろで待機していた車に乗り込んだ。ようやくひとりになれた車中で流れる

風景を見ながら考え事をしていた。
いつか、享也さんにも傍にいてくれる愛する人ができればいいのに。
そんなことを願いながら家路についた。

縁談から数日たって、相手側から正式に断りの連絡があった。仲人役であった人物から直接父に連絡が入ったようで理由は「享也のわがままで」というものらしかった。
私は父にあって話を聞かされるわけでもなく、父の執事から結果だけを聞かされた。会ったときに「受ける気はない」と聞かされていたからだろうか、さほど驚きもしなかった。
それに内心感謝すらしていた。こちらにも受ける気がなかったのは調査の段階で知り得たはずだ。に関わらず縁談話に応じてくれこちらの顔を立ててくれたわけだ。これで父に非難されることはないだろう。

その後、父は思惑が外れて意気消沈したのか次の縁談が持ち込まれることはなかった。
徐々に花のつぼみが芽吹く季節が近づいてきていた。

【最終章】すべてを胸に　（五）進むべき道

学年末試験が終わると、学園内は卒業式の準備に追われていた。関係ない生徒のほとんどは登校する必要はない。一年前の私も試験終了後は一度も学園内には顔を出さなかった。

だが、今年は違う感情に支配されていた。美桜が辞めてしまってからひとりで過ごすことが多くなったが、それでも昂さんや楠城先輩の存在は大きかった。暁がパリへ行った後も気にかけてもらい守られていると思うことも少なくなかった。

そんなふたりは間もなく高等部の校舎から去ってしまう。これで本当にひとりになってしまうな、そう思うと少しでも学園内に留まっていたいと、特にすることもないなか登校していた。

なんとなく慌ただしくしている校舎の近くにいるために、図書館ではなくカフェテリアにいることが多くなっていた。ここからだといろんな風景がよく見える。

「瑠璃！！！」

いつもの奥の席でぼんやりと紅茶を飲んでいると、不意に後ろから声をかけられた。振り返るまでもなく声と呼び方でそれが昂さんだとわかる。

「――――何、ぼんやりしてるんだ？」

「…別に。それよりどうしてここに？」

「もう、昼だからな」

そう言いながらランチと珈琲を注文し、大きな溜息を吐きながら背中を伸ばした。やはり生徒会役員という仕事は疲れるようだ。

「卒業式の準備、忙しそう」

「ん？　まぁな。でもこれが最後の仕事だからな」

本人は慣れたものなのか、いたって平然としている。昂さんが去った後の生徒会は誰が仕切るのだろうかと気になるところではある

が、私の学生生活にはなんら弊害はないだろう。
「――なんか、三年なんてあっという間だよな」
空を仰いだかと思うと、急に感傷に浸ったような言葉を投げた。しかしそれは私に、という訳ではなく空に向かって言った独り言のように聞こえた。いろいろ思い出もあるだろう。そう思い特に口を挟むことなく正面に座っていた。

「――特に、この二年間はお前のおかげで退屈しなかったな」
「…はい？」
突然話の矛先が自分に向けられた。彼の表情はいつものように悪戯っぽく笑いながら茶化した感じだ。こちらの反応を見て楽しんでいるのだろう。
「正確には、お前と暁のおかげで…だな」
何かを思い出しているのかクスクスと笑いながら言い放った。自分たちは余程、昂さんを振り回してきたのだろう。あらためてそう言われると申し訳ない気持ちが浮かんでくる。
そんな私の心情を知ってか知らずか「楽しかったけどな」と付け足した。目を逸らすようにして視線をテーブルに移し冷めた紅茶を口に含んだ。

「――暁とは、連絡とってるか？」
しばらく間が空いた後、真面目な表情で聞かれた。おそらくそれが一番気になっていたことなのだろう。先ほどまでの軽やかな笑顔は消えていた。
「…うん。電話とかメールだけど」
「そうか…で、どうするんだ？」
「まだ反対されてるけど…パリに行くつもり」
正直、ついこの間までは迷っていたことだった。反対を押し切ってまでパリに行くことができるのか、そこまでするのは何のため？誰のため？

享也さんに言われ諦めたくないと思った。そんな後悔はしたくない、親に頼らず留学する方法がないかとも考え調べた。反対されたままだと親からの援助は期待できないからだ。

「…そうか。やっぱりおじさんもそう簡単には許してくれないんだな」

「紫苑兄さんが手伝ってくれてるけど…」

縁談があった日の翌日からやはり父には会えない日々が続いていた。破談になった後も何度か第一邸宅に足を運ぶが会うことを許されなかった。私のことを避けてわざと家にいないのではないかと思うほど、その態度はあからさまだった。

そんな私の変わりに紫苑兄さんが父に会い、留学の件や私に会うことを嘆願しているようだったが良い返事はもらえないようだった。兄さんにも仕事があるため無理はしないでと、言ってある。

前にも後ろにも話が進まない中、時間だけは刻まれる。すぐにでも暁の後を追いかけたかったのに、結局遠距離恋愛を強いられた。連絡といっても電話とメールだけで、会えない日々がもう二ヶ月になろうとしていた。

せめて、旅行でもいいから会いにいけたなら…と思うことも少なくない。

なんとなく空気が重いと感じた。

きっと暁の話をしているせいだ、何か話題を変えて雰囲気を軽くしなくては。

「…それより、楠城先輩は？」

ここ数日、姿を見ていないので気にはなっていた。私の知っている限り、かなりの割合でふたりは一緒にいたと思うからだ。いくら昂さんが卒業式の準備で忙しいとはいえ、お昼くらい合流するはずだと考えていた。

すると、予想外の台詞を聞かされた。

「あ？　あぁ、崇なら今はニューヨークだ」
言っている本人は「何を今さら」といった表情だが、私にとっては初めて聞かされる情報だった。一瞬にして様々な疑問が頭をよぎる。
「――あいつ、高等部出たら大学部に進まずにニューヨークの大学に留学するんだと。最初は冗談かと思ってたけど、どうやら本気みたいだ。柚莉亜も驚いてたよ」
「そう…なんだ。なんだか淋しくなるね…」
それは本心だった。いくら卒業するとはいえ大半はそのまま大学部へと進む。広大とはいえ同じ敷地内だ、会おうと思えばいつだって会える、そう思っていた。
それなのに、私の近しい人がどんどん遠くに行ってしまう。
私を置いて。
きっかけがあれば人は自分の進むべき道を見つけ、そこへ向かう。今まで思いもしなかった別れは、今後もっと増えるだろう。学生時代のままいられるほど世間は甘くない。これが子供から大人になるということなのだろうか。

「――昂さんは、どうするの？」
「俺か？　俺はこのまま大学部へ進むよ。まだ将来のことは何も決まってなし、先のことなんてわかんねーからな。親もうるさく言わないから、まだ好き勝手させてもらうよ」
柳原家の跡取りが「何も決まってない」ことはないだろう、と思いながらホッとした気分に包まれていた。私はまだこの人に甘えているのだろうか。
運ばれたランチに手をつけながら、大学部に行った後のことを話していた。
食事も終わりデザートを口にしていると、昂さんがじっと見ていることに気がついた。それも何か言いたそうな表情をしている。なんだろう、と首を傾げるとふっと口元が緩むのが見えた。

「俺、瑠璃のこと…ずっと好きだったよ」
「…はい？？？」
突然の告白に戸惑わないはずもなく。
その表情から冗談でないということはわかるが、どう答えていいのかはまったく考えられなかった。
「別に…暁から奪おうとは思ってないから。ただ…子供のころからずっと見てたからな、なんとなく言っておきたかっただけだ。それに、俺の中ではもう吹っ切れてる。深い意味はないから安心しろ」
私の顔を見るわけでもなく、淡々と話す。
「――――だからかな、お前には幸せになってもらいたい」
そうはっきりと言った昂さんに享也さんが重なった。

きっと今まで何かと気にかけ世話を焼いてきたのは、そういう感情があったからこそではないかと思った。
私はいろんな人から大事にされているのだと、あらためて実感した。

【最終章】すべてを胸に　（六）浮かぶ疑問

それは卒業式を数日後に控えた、日差しの穏やかな午後だった。

いつものようにカフェテラスでランチを済まし、そのまま勉強をしていた。最近は図書館に足を運ぶことが少なくなり、気候が良くなったこともあっていつもの席で本を開くことが増えていた。

相変わらず三年生のいる中央校舎には下級生が詰めかけ人だかりができていた。特に昂さんは未だ親衛隊が健在のため、毎日のように囲まれ追いかけられていた。その様子を遠くから伺い、ひとりクスクスと笑って過ごしていた。

そんな中、昂さんが顔色を変えて私の元にやってきたのだ。何事かと思うほど慌てた様子でいつもの彼らしくない行動だった。だが、それは一瞬にして理由がわかった。

私も同じように全身が硬直してうまく言葉を吐くことができなかったからだ。

目の前に広げられた一冊のファッション雑誌。

昂さんが下級生のひとりから借りてきたというその本の表紙には見覚えのある顔が笑顔を振りまいていた。そして、中の一面には大きく宣伝文句が掲げられていた。

柊木（ショウ）暁、日本でもモデルデビュー、と。

「…瑠璃？　何も聞いてないのか？」

黙ったまま雑誌を凝視している私を見て昂さんは不思議そうに聞いてきた。無理もない、つい先日連絡はちゃんと取っていると話したばかりなのだから。

そんな彼も私ほどではないにしろ、暁とメールのやり取りくらいはしている。なのに何も知らされていなかったのだ。突然の帰国に驚かないはずもない。

しかし、雑誌の記事をよく読んでみると「事務所・本人とも肯定も否定もせず沈黙のまま」と書かれてあった。この記事の信憑性はいかがなものなのか、ふたりの間で疑問が浮かんだ。

「――でも、まぁ可能性はあるってことだよな。暁が何も言ってこないからなんとも言えないけどな。最後に連絡取ったのはいつだ？」

手元の雑誌が発売されたのはつい三日前だ。だが、記事が書かれたのはもっと前だろう。メールは毎日のように送っているが、電話で話したのは一週間前だ。雑誌の発売のことは知っていてもおかしくない。

「…暁に確認してみる」

そうだな、と言って昂さんは立ち去った。その後真実を確かめたくて早々に家に戻り情報を集めようとしたが、生憎そういった業界に顔が利くわけでもなく自分では何ひとつ掴めなかった。

パリはまだ朝早い時間だ。電話しても寝ていて出るとは限らない。だが、活動時間になれば撮影や打ち合わせだからと言ってゆっくり話す時間は望めそうにない。

考えた挙句、ケータイを取り出し発信ボタンを押した。いつもより長めに呼び出し音が鳴る。やはりまだ寝ているのだろうか？諦めて切ろうとしたときコールの途切れる音がした。

『……はい』

まだ寝ぼけているのかくすぶった低い声が聞こえてきた。

「…暁？　寝てた…よね、ごめん」

『…瑠璃か？　…どうした？　こんな朝早くに…』

やはり頭が冷め切ってないのだろう、言葉も途切れた感じで聞き取りにくい。こんな調子ではゆっくり話もできないのでは、と思い

その日の予定を確認してみた。
幸い打ち合わせの予定しか入ってないらしく、夕方以降であればいつでも時間は空いていると言われた。時間的にも丁度いい、また連絡すると言うと電話の向こうで不思議そうにしている彼の気配を感じ取ったが、気付かないフリをして電話を切った。
やはり向こうからは何も言ってこなかった。あの雑誌に書いてあったことは誤った情報なのだろうか、不安と疑問が浮かんでは消えていた。

屋敷内も寝静まったころ、書斎に置いてあるケータイが鳴り出した。こちらからかけると言っていたのに待てなかったのか、やはり何かを勘ぐったのか…着信の名前はもちろん暁だった。
『朝はごめんな、寝起きで全然頭まわってなくてさ。何か用があったんだろ？悪かったな』
「いいよ。こっちこそ起こしちゃって悪かったね」
どう切り出していいのかわからず、いつもと変わらない会話をくり返していた。そのことにさすがの暁も不信に思ったらしく何度も「何の用だったんだ」と聞いてきた。
最初のうちは誤魔化しながら、彼の口から聞かされることを待っていたが三十分も話しているうちにそれが無駄だと気がついた。こうなったらこちらから聞くしかない。
「――ねぇ、暁…今日学校でｘｘｘっていうファッション雑誌を見たんだけど…載ってたね」
『え？　あぁ…あれか…』
私がその手の雑誌を見たことが意外だったのが、急に口調が変わり言葉少なになった。何か言いにくいことでもあるのだろうか。
だがさすがに誤魔化すことはできないと踏んだのか、そうかと言い話し出した。
『――まだ、正式じゃないんだ。事務所でも方針が決まってなく

て…多分デビューが決まるだろうって言われてるけど、それもいつになるかわからないからな。変に期待させて駄目だったらガッカリするだろ？　瑠璃には正式に決まってから話そうと思ってたけど…まさか雑誌見てるとはな』

聞いている限り嘘ではないようだった。

決定していないうちにどこからか情報が漏れ、雑誌に掲載されてしまったという訳だ。まったく信憑性に欠ける記事でもなかったようだ。

「…いつ頃決まりそうなの？」

『近いうちに発表があると思う。決まったら絶対連絡するから、待ってろよ』

内心では暁も日本に帰って来たいのだと思った。慣れない地でモデルを続けるよりも帰国したほうが楽に決まっている。

しかしある疑問が新たに浮かんだ。暁の両親は、特に母親はどう思っているのだろう。彼をモデルとして本格的にデビューさせるつもりなら最初からパリになど行かなかったのでは、と思う。そもそも母親のデザイナーとしての仕事があり、あくまで暁は母親の専属モデルをしていたはずだ。であれば、母親は日本でのデビューに反対するのでは？

だが、結局その疑問は聞けなかった。もしかすると事務所の方針が決まらないのも、その辺りの事情があるかもしれないと思ったからだ。

過程はどうであれ、暁が帰国できることを祈った。こちらから会いにいけない以上、他に会う手段はないのだから。

それから一週間ほどたって連絡が入った。

正式に日本でのデビューが決まったという。だがその声は手放しで喜んでいるようには聞こえなかった。理由を聞くと、やはり活動の拠点はパリになるため日本に帰国するのは月に二、三回だという。

それでもパスポートを取り上げられ自由に行動できない私にとっ

ては、一ヶ月に一回でも会えることが嬉しかった。僅かな時間でもいい、会えるならそれだけで満足だ。

暁が日本に戻ってくる…

その事実を別の形で知ったとき、さらに現実なんだと実感した。心は大きく跳ね上がっていた。

【最終章】すべてを胸に　（七）僅かな時間

暁が帰国したのは卒業式も終わり、楠城先輩がニューヨークへ旅立った日の後だった。

昂さんが気を利かせてくれ空港まで迎えに行こうとしたが、やんわり暁に断られてしまった。おそらく事務所関係者が迎えに来るだろうというのと別に、報道陣が取り囲み迷惑をかけるかもしれないからだと言われた。

確かに、デビューが決定する前から雑誌で取り上げられるほどだ。いくつかの雑誌記者は嗅ぎつけてくるだろうし、そうなれば「友人に再会」という昂さんの願いも叶わないだろう。

結局、マネージャーにスケジュールを空けてもらい帰国した日の夜、3人で食事をすることになった。場所は暁が滞在するホテルのレストラン。なるべくカメラから避けられるようにと個室を用意された。

自分の愛しい人が、急に遠くなった…そう感じずにはいられなかった。

久しぶりに会う暁は私の目から見てもプロのモデルといった雰囲気をまとっていた。歳はひとつしか変わらない、だがもう高校生ではないということが原因なのかひどく大人びて見えた。

話している間はそう感じることも少なかった。相変わらず話し方は荒っぽいし何ヶ月か前まで学園にいた彼のままだ。

日本でのスケジュールを確認してみると、やはり月に数回程度の割合で撮影などに来るらしい。ただ今後の契約次第では帰国する回数も増えるだろうということだ。

デビューのために戻ってきたその翌日から一週間は追われるように仕事をこなし、僅かに空いた夜の時間を私に会うために使ってく

れた。
　それでも相手がまだ高校生となればそう遅くなるわけにもいかない。食事をするほど時間が取れるときもあれば、顔を見る程度のときもあった。
　滞在してる一週間などあっという間に過ぎ去り、また暁の背中を見ながら空港で手を振る自分がいた。だが、今度は泣かなかった。以前のように次いつ会えるのかわからない状態ではなかったからだ。
　彼のほうも気楽な感じで搭乗口に向かって行った。

　次に帰国したときは、珍しく休みを混ぜてきた。
　ここ数ヶ月の間、休む暇もないほどスケジュールが埋まっていたというのにここへきてたまたま休みが取れたのだと言う。せっかくなので日本で休暇を取りたいと申し出たそうだ。

　それはその日の午後、ホテルのレストランで遅めのランチをとっているときのことだった。
「――――瑠璃」
　いつになく真剣な表情で暁が話を切り出した。その仕草のひとつひとつが私の心をドキッとさせる。それはとても魅力的…という意味で。
　いつものような世間話や近況を聞かされる様子ではないことくらい、私にもわかった。黙って視線だけを彼に向ける。
「――――今度、お前の家に行こうと思ってる。できるだけそっちの都合に合わせられるように調整するつもりでいるけど、時間とれねーか？　なんなら…」
「なんで？？？」
　まだ話の途中ではあったが、思わず口を挟んでしまった。家に来る？　何故？
「…いや、挨拶くらい行っとかねーとな。お前…留学のことまだ許

してもらってないって言ってたけど、ちょっと旅行にも来れないってのは…なんか理由があるんだろ？　まぁ、俺がしっかりしてないせいでもあるかなって思ってな」

意外な申し出だった。まさか暁がそこまで考えているなど思いもしなかったことだし、それにどう答えていいのか困る。

冬休みは父が強引に進めた縁談のせいで、結局パリには行けなかったがその辺りの理由は話していない。ただパスポートを失った…とだけ伝えてある。だがそれもその場しのぎの誤魔化しに過ぎない。あれから時間も流れ春休みが近づいている。

学園の事情を知っている暁のことだ、私の立場なら実質登校しなくていいのはわかっているはずだ。要するに言いたいことは「休みなのだからパリ(こっち)に来れるだろう？」ということだ。

「――――ダメか？」

黙ったまま考え事をしていると、不安そうに聞いてきた。

「…ダメじゃないけど、すぐには返事できない。お父さまに予定を聞いてみないと…」

そうだな、と言ってその話はそれっきりになった。

せっかく一日暁と一緒にいれる日だったのに、楽しみにしていた時間は顔では笑っていても心は沈んでいた。どうしても不安を取り除くことができなかった。

正直、父に反対されているのはわかっていたが暁には一度会ってもらいたいと考えていた。家柄や肩書きだけで判断しがちな父でも本人に会えば考えが変わるかもしれない、と期待したからだ。

だが会ってくれる保証はない。未だに私に会うことすら避けている父が受け入れるだろうか。父の考えていることはわからないがおそらく無理だろう。そう思っていたので「会ってほしい」と願わなかった。

状況は留学を申し出たころよりも良いのではないかと思っていた。
暁の母親は世界でも有名なデザイナーのようで知名度もある。今は某デザイン事務所に勤めているがいずれは独立するつもりで準備を進めているらしい。独立したブランドとなると生活も一変するだろう。
父親のほうも倒産した会社の資金繰りのため多方面に支援を求めているそうだ。どちらにしても母親のブランド如何次第で柊木家は元の地位・財産を取り戻すくらいはできるだろう。
当の本人である暁はモデルをしていることくらいしか話さない。パリでどんな生活をしているのか、大学はどうしているのかなどは教えてくれない。いつも事後報告になるためもう慣れてはいるが。
それを知ってもらった上で暁とのことを認めてもらえないか、考えた。
いや、その前に会ってもらうことが先決だ。だがどうやって伝えるべきか迷っていた。

（…兄さんに相談するしか、方法はないか…）

散々悩んだ挙句、やはり自力ではどうすることもできないと判断した。
第一邸宅で紫苑兄さんの予定を確認し時間を取ってもらえるよう約束していたが、当日になってどうしても外せない会議が入ったため帰れないと言われた。
用件を聞かれ、お父さまに伝えてもらいたいことがあると言うと代わりに話を聞く相手を用意すると言われたた。そのためとりあえず約束の時間に第一邸宅に足を運んだ。
紫苑兄さんから連絡が入っていたようで、すんなり三階の来客用

リビングに通された。中ではすでに咲織義姉さんが座っていて、私の顔を見るなり笑顔で出迎えてくれた。

【最終章】すべてを胸に　（八）ふたつの心

「…わざわざすみません」
リビングの中央にあるソファに座るなり咲織義姉さんに頭を下げた。兄さんに話ができないのなら用件だけを簡単に伝えて済ませようと考えていたのだが、相手が義姉さんとなればそうもいかない。
執事にでも伝言するようにしてもらえれば気が楽だったのに、と出された紅茶のカップを見ながら溜息が出そうだった。そんな私を気遣うように「こちらこそ、ごめんなさいね」と言いながら柔らかい笑顔を向けた。
どう話を切り出していいのかわからず、義姉さんを前に黙ってしまった。普段からあまり接点がないためかふたりきりになるとなんとなく気まずい。菖蒲姉さんに話すような感覚でいられない。

「――紫苑さんから聞いてるわ。伝言があるのでしょう？」
黙ったまま硬直している私に微笑みながら聞いてきた。
そうだ、兄さんが何も伝えていないはずがない。用件を聞いた後代わりの人物を用意する、と言ったときには私の用件がどのようなものなのか、大方予想はついていたのだろう。だからこそ相手が執事ではなく義姉さんなのだ。
私は暁から聞かされたことをそのまま話し始めた。お父さまに会いたいと言っていたこと、時間をこちらの都合に合わせるということ、暁が今パリと日本でモデルをしていることなど。話の途中、口を挟まれることもなく義姉さんはただ黙って頷いて聞いていた。
「…――――と、いうわけなんです」
「わかったわ。それを紫苑さんに伝えればいいのね？」
話し終わった後、念を押すように確認した。私がコクリと頷くと優しい笑顔を向けて立ち上がった。しばらくすると執事が部屋に入ってきて何やら話をしていた。戻ってきた義姉さんは私の顔を見て

口を開いた。
「今日は紫苑さんの帰りが遅いみたいなの。だからこちらで夕食を召し上がって行ってね。菖蒲さんもこちらに来るそうよ」
意外な申し出だった。今日は用件だけを伝えて戻るつもりでいたからだ。それに菖蒲姉さんまで第一邸宅で食事とは珍しい。すると、義姉さんはいつもあまり見せないような表情で少女のように言って見せた。
「――――珍しくお義父さまもお義母さまもいらっしゃらないのよ。ひとりで食事するのって嫌だからどうしようか迷っていたのよ。第二邸宅(そちら)に伺おうかとも思ったんだけど、突然だと迷惑がかかるでしょう？第一邸宅(こちら)だと何も心配することはないから菖蒲さんにも声をかけたのよ」
確かに、この広い屋敷の中でひとり食事をする気にはなれない。かといって義姉さんは行動がかなり制限されていて、気軽に友人たちと出かけるわけにもいかないのだ。
いつ、両親や兄さんたちにパーティーなどに呼ばれてもいいようにしているためだ。急な呼び出しも決して少なくはないだろう。申し訳ないが自分はできそうにないことだった。

それから1時間ほどたってから姉さんが第一邸宅にやってきた。女3人で食卓を囲むのはなんだか新鮮でもあり不思議な感覚だった。いつものような堅苦しい雰囲気もなく明るい笑い声が響いていた。
話の途中で姉さんにも暁のことを話すことになった。聞いたほうは驚いた様子で「結構考えているのね」と感心していた。もしお父さまに会うことが実現されれば姉さんにも紹介しよう、と考えていた。
「…それにしても、聞いてる限りずいぶん印象が違うわね。もっと子供っぽいのかと思っていたわ」
姉さんがワインの入ったグラスを傾けながら私を見て言う。どういう印象を持っていたのかと尋ねると少し考える素振りを見せてゆ

っくりと口を開いた。
「――なんていうのかしら？　もっとわがままな感じがあったのよ。んー…我が強いって言ったほうが適切かしら？　まぁ、そんな感じね。あまり人のことを考えない人って印象かしら…あくまで瑠璃から聞いた話で想像してだけれどね」
　その印象は正直、当たっていると思った。今もそうだと思うがやはり変わってきているのだろうか。
「…今もあんまり変わらないと思うけど」
「そう？　少なくとも以前とは違うんじゃない？　やっぱり働いているからかしら、変わってくるのね」
　環境が変われば少なからず影響がある、と言いたいのだろうか。確かに暁の申し出には驚いたし意外だと思った。それはすなわち私の知らない暁が存在するということなのだ。
　自分はどうだろうか、と考えた。お世辞にも成長しているとは言えないだろう。私を置いてまわりだけが大人になっている気がして怖かった。
「…やっぱり、変わったのかな？」
「なぁに？　不安なの？　そうね…一番変わる時期なのかもしれないわね。彼だけじゃなくて…いろんな人が変わろうと進むときなのよ。瑠璃にもそのうちわかるわ」
　黙って頷いた私にふたりの姉が微笑んでくれた。咲織義姉さんはもちろん、菖蒲姉さんと比べてもまだまだ子供なのだと思い知らされた。

　その日の夜遅く、紫苑兄さんが帰宅し私からの話は伝わったようだった。後はお父さまに伝えてもらい了承してもらうだけだ。だが、そう簡単に聞き入れてもらえないだろう。
　暁の帰国も相変わらず不定期であったし、仮に了解を得ても双方の都合が簡単に合うとも思っていなかった。兄さんにはまた、何度も説得してもらう日々が続くのかと思うと気が重かった。

ところが…
そんな予想に反して意外にもすんなりお父さまの了承を得られたと言う。最初は聞き間違いかとも思ったほどだ。だが執事からは何日間かの候補の日程が伝えられた。
あっけに取られている暇はない。早速パリに連絡し暁の予定を確認した。次の帰国に合わせて日程を調整すると言った彼は、相変わらず忙しそうにしていた。
電話を切った後、やはり自分だけがどこか違う世界に取り残されている、そんな感覚を受けた。

数日後―
第一邸宅の前でスーツに身を包んだ暁が少し緊張した面持ちで立っていた。落ち着かないのか何度も私の顔と腕時計を交互に見ては溜息を吐いた。
約束の時間が近づくと、玄関ホールの扉が開き執事が出迎えた。
「…じゃあ、行ってくるな」
「うん…部屋で待ってるね」
頷くとそのまま背中を向け、案内されるままホールの奥へと消えていった。暁の姿が見えなくなるころ扉が閉められ私は第二邸宅へと歩き出した。
お父さまは暁と会う代わりにひとつ、条件を付けてきた。それはふたりで対面するというものだった。話が出たときから同行するつもりでいたため躊躇したが、そのことを伝えると彼は特に驚いた様子も見せず承諾した。
私がついていったからといって何か変わるわけではない。でも気にはなる。ふたりの間で何が話されているのか。だが、無理についていくことはしなかった。
今まで自分の力では何もできなかった。
何も変えることができない私にとって、後は暁にすべてを委ねるしかなかった。

【最終章】すべてを胸に　（九）未来への扉

自室に戻ってみたがやはり暁のことが気になって落ち着いて待っていられなかった。何度も時計と窓の外を見ては溜息が漏れていた。かなり時間がたったと思っても実際には数分しか進んでいない。ソファに座ってみても扉が気になって仕方なかった。

窓辺で腕を組んで外を眺めているときだった。扉がノックされる音が聞こえ急いで駆け寄った。だが、開かれた扉の外に立っていたのは暁ではなかった。

「…なんだ、姉さんか…」

落胆の色が顔に出ていたのだろう。姉さんはクスクスと笑いながら嫌味を言ってのけた。

「悪かったわね、彼氏じゃなくて。お邪魔するわよ」

そう言うと、私の返事も聞かずに軽い身のこなしでソファまで進み腰をおろした。相変わらず部屋の中でもシフォンスカートを好んで着る姉さんは、今日もヒラヒラと裾をなびかせている。

まるで自分の部屋のように執事を呼び、紅茶と焼き菓子を頼むと私に微笑みかけた。

「――――ちょっと、落ち着いたら？」

「…え？　そ、そんな…落ち着いてる、けど…」

今まで動揺など人に見せたことがない。自分でそう思っているだけかもしれないが、少なくとも姉さんにそんな台詞を言われたのは初めてだった。明らかに見てわかる態度で誤魔化しは効かなかった。

「せっかくのハーブティも冷めちゃってるじゃない？　新しいものを用意させてるから、それでも飲んでゆっくり待ってなさいな」

中央のテーブルに置かれたカップは一口も飲まないまま、とっくに冷たくなっていた。

しばらく経って運ばれた温かい紅茶を飲んだ後、やはり溜息が漏

れた。姉さんは呆れたような表情で私を見ていた。
「そう、気にしても仕方ないでしょ？　後は暁さんに任せるしかないんだから。もう少し、彼のこと信じてあげれば？　さすがのお父さまもそこまで頑固じゃないと思うわよ」
「…そう、だけど…」
姉さんの言う通りだった。
今さら何を気にして落ち着かないのか、自分でもわからなかった。確かにふたりが何を話しているのかは気になる。ただ、それとは別に自分だけがずいぶん長い間、お父さまに会っていないような気がして不安があったのだと思う。こうやってただ待つ時間はひどく長い。

それから姉さんと他愛もない話をしていくらか時間が過ぎた。
不意に扉がノックされ、会話が途切れたと同時にゆっくりと開かれた。廊下には執事に連れられた暁が立っていた。執事が頭を下げたとほぼ同じタイミングで、姉さんも立ち上がり暁に向かって軽く頭を下げた。そしてすれ違うように廊下へと出て行った。
扉が閉まるとふたりきりになった部屋は、先ほどよりも重い沈黙に支配されていた。
とりあえず、ソファに座った暁はネクタイの結び目を少し緩ませ「ふぅ」と大きな溜息を吐いた。どうやら相当疲れた様子だ。運ばれた珈琲に口をつけて目を閉じた。
何も言わない彼の態度に嫌でも不安がよぎる。こちらから聞いていいものかどうかわからなかった。
しかし、いつまで経っても暁は話し出そうとしない。いい加減待ちくたびれた私は彼の顔色を見ながら聞いてみた。
「…ねぇ、暁…どう、だった？」
彼は目を閉じたままこちらを見ようとはしない。そのまま「あぁ」と短い返事をしただけだった。それだけでは何もわからない。もっと詳しく話してくれてもいいようなものだが、言う必要がないと決

めたのだろう。こうなると暁はあまり多くを語らなくなる。
「…お前は何も気にしなくていい。後は俺の問題だ」
「え？　でも…」
「もう大丈夫だ」
言いかけた私の言葉を遮るように強く言うと、再び黙って目を閉じた。もう何も聞くことはできなかった。

夕方になって、撮影の打ち合わせがあるということでマネージャーが迎えにきた。せっかく来てもらったので一緒に食事でも、と考えていたが急ぐようで第二邸宅を後にした。
結局、お父さまとどういった話をしたのか、詳しいことは何ひとつ聞くことができないまま見送った。あらためて聞こうかとも思ったが、おそらくその機会はないだろう。仕方がないと諦めた。
それからというもの、暁の仕事量は増し日本に来ても撮影に追われる日々が続いていた。ゆっくり会う時間も減っていき、ほんの少し空いた時間で近況報告をするのがやっとだった。

春休みも終わりが近づいたある日。
珍しくダイニングで姉さんと食事を摂っていた。
最近、何かと私に構うようになった姉さんは、時間があれば一緒に食事をしたがる。休みで学園にも足を運ばなくなった私は、仕方なく姉さんのペースに付き合う羽目になっていた。
暁の帰国の回数も少し減ってきた。大学に通っていることはずいぶん後になって聞かされた。その都合でそう日本とパリの往復はできないのだろう。淋しい、と思うことが増えていた。
その反面、姉さんと過ごす時間が増えたと言うわけだ。高等部に比べて大学部は休みが長いのだ。
この日の食事はずいぶん長い時間、引き止められた気がする。いつもなら八時には部屋に戻っている。時計を見ると九時を指そうと

していた。話が途切れたので席を立った。

「…瑠璃」

ダイニングを出ようとしたとき、後ろから呼び止められた。振り返ったが姉さんは何も言わずにじっと見ている。そして、部屋の柱時計がボーン、ボーンと音を立て始めた。

「――――いい時間だわ」

「…何？　姉さん」

特に用がないなら部屋に戻りたい。そう思いながら立っていた。

「部屋に戻る前に、第一応接室によってね」

何かを含んだような表情で言い放った。突然の台詞にその意図が読み取れない。どういうわけかを聞こうとしたが、私から目を逸らしそしらぬ顔で紅茶を飲んでいた。

廊下を歩きながら来客があるのだろうかと考えた。しかし、それなら直接私にも連絡が入るはずだ。何も知らせていない客。不信に思い、一旦自室の扉の前まで戻ってきた。

だが、と思い立って反対側へと歩き階段を下りていった。

扉を開けると、予想もしていなかった人物がソファで本を開き座っていた。私に気がつくと立ち上がり「待ってたよ」と優しい声で言った。

「紫苑兄さん…言ってくれれば、第一(そっち)邸宅に行ったのに」

「仕事帰りだから、ついでだよ」

結婚してからというもの、紫苑兄さんが第二邸宅に来ることは珍しいことだった。弟妹(わたし)たちと会うときも、いつも第一邸宅で約束をする。いくら仕事帰り、といっても不自然だ。首を傾げながら近づいた。

「こっちに来るなんて…何かあったの？」

向かい合うようにソファに座る。目の前の兄さんは機嫌がいいのかにこやかな表情で私を見ていた。何かいいことでもあったのだろ

うか、自分には皆目見当もつかなかった。
「瑠璃に知らせたいことがあってね。まぁ、良い知らせ…になるかな」
そう切り出し、訪問の理由を話し始めた。兄さんから聞かされる言葉のほとんどが信じられないものだった。まったく予想していなかった言葉を聞かされた。
「――――と、いうわけだ。来年受験をして合格すれば認めるそうだよ」

暁との関係を認める条件。
パリにある某有名大学の受験、合格率は限りなく低い。
だが、あのお父さまがここまで譲歩してくれたのだ。それが嬉しくて泣きながら兄さんに何度も礼を言った。

これで、未来へ進む扉が開かれた――――

エピローグ

一年後、フランス―シャルル・ド・ゴール国際空港
瑠璃はジーンズにセーター、それにコートを羽織った身軽な格好でかばんひとつ持ち、ターミナルに立っていた。長時間の飛行機移動は相変わらず疲れるようで、いくらファーストクラスといっても眠れなかったようだ。

（今日まで、長かった――――…）

春休みも終わる、あの夜。
突然聞かされたパリへの開かれた道は、決して楽なものではなかった。
いくら瑠璃が特待生とはいえ、一年の受験勉強で合格できるほど甘い試験ではなかったからだ。父親の思いとしては男を追って海外へ行くということが暴挙と感じたのだろう。
旧家の主として体裁を考えた末、大学進学のための留学なら許そうと決断したのだった。そして、合格率の低い大学を指定すれば諦めるだろう、というのが父の目論見だった。
しかし、瑠璃はたった一年でこの難関を突破した。父は我が子の有能さを見破ることができなかったのだ。そこで最後の抵抗として、住居だけは一条家の別荘を改築したものを用意した。
我が子可愛さのあまり完全に手離すことができず、執事まで同行させた。それでも瑠璃は快く了承しパリへと旅立った。

瑠璃はサングラスを外し、辺りをキョロキョロと見渡した。

自分の名前を呼ぶ声が聞こえ、ふと足を止める。その視線の先には笑顔でこちらに向かう姿があった。そしてふたりは引き寄せられるように抱き合った。

「暁…会いたかった…これからはずっと一緒だよ」

そう言って久しぶりに見る暁の顔をじっと見つめた。

もう離さない、そう思った暁だったがやはり照れくさかったのか言葉にできなかった。

見つめる瑠璃の瞳にはにはうっすらと涙が溜まっていた。暁は黙ったまま強く抱きしめ頭をクシャっと撫でた。その瞬間、瞳に溜まっていた涙は溢れ出し頬を伝って落ちた。窓から差し込む光に反射して、涙はキラキラと輝いていた。

たったひとつの宝物を手にしたふたりには、その涙さえ暖かかった。

愛しい人に抱きしめられる幸せを感じながら、永遠を誓った――

―…

―ＥＮＤ―

エピローグ（後書き）

本編はこれにて完結です。
最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。
この後、番外編を収録予定ですのでもうしばらくお付き合い下さいませ。

【番外編】　（一）執事の憂鬱

執事の朝は早い。特に執事統括は誰よりも早く起きて一日のスケジュールを確認する。そして他の使用人たちが起きてきたのを確認すると、手早く指示を出し使用人たちの住む別邸を後にする。

一条家・第二邸宅には三人の執事がいる。中でも今年六十歳になった重松は二十歳のころから一条家に使えるベテランの執事であり、執事統括でもあった。若き日は現主人である一条聡一朗の妹君、雛子に仕え彼女が嫁いだ後もこの家に残り、それと前後するように産まれた聡一朗の次女・瑠璃の執事として仕えるようになったのである。

そんな瑠璃がパリの某大学へと進学・留学すると聞かされて誰よりも驚いたのは彼であった。

「…そうですか、お嬢さまがパリへ…」

「うん、そう」

当の本人はあっけらかんとしたもので、軽い返事をしたものだった。

「では、あちらではお一人暮らしですか？　それともどなたかとルームシェアをなさるのですか？　今までお一人暮らしもしたことのないお嬢さまが、どなたかと一緒に生活なさるのは…わたくしとしてはいささか心配でございます」

言葉遣いは丁寧だが、言っていることはこの上なく失礼である。

産まれたころから瑠璃に仕え一心に教育してきたつもりの重松だったが、彼女は先の雛子のようにどこ嫁いでも恥ずかしくない「良家の子女」にはならなかったのだ。

「それが、まだ決まってない」

紅茶を飲みながら、重松の嫌味をさらっと受け流し必要なことだけを伝えた。

「決まっていないとは…どういうわけでございましょう？　もう大

学への入学手続きはお済になったのでしょう？　それなのにまだご住居が不明とは…旦那さまのお考えですか」
それには黙って頷く瑠璃であった。

瑠璃のパリ行きは邸の中でも専ら噂になっていた。あの主人がよく娘を出す気になったものだ、と。重松もそれに関しては同感だった。もう何十年と聡一朗のことを見てきたが、妹・雛子ですら長い間嫁がせなかった。顔や口には出さないが長女・菖蒲にしても瑠璃にしてもかなり溺愛していると、重松は思っていた。
その夜、重松は第一邸宅に呼び出されることになる。
重松にとって第一邸宅は、一条家といえどほとんど縁のない場所だった。幼き日の聡一朗と雛子は今の第二邸宅に住んでおり、重松もずっとそこで仕えていたからだ。
当時、第一邸宅には先代である菊蔵（きくぞう）と妻・紅子（べにこ）、そして先代の母であるナツが住んでいた。そちらには当時から執事の統括を務める永瀬（ながせ）が、今は先代に代わって聡一朗に仕えている。
重松は邸の奥、書斎に通された。
「お呼びでございましょうか、旦那さま」
聡一朗はかけていた眼鏡を外し、イスの背もたれに深く腰かけ腕組をした。
「…わざわざすまないね。早速だが…瑠璃の留学の件は知ってるね？　そのことで話があるのだが…率直に聞く。あれのことをどう思うかね」
重松は返答に困った。質問の意図はわかる、要は瑠璃をひとりパリへ行かせて大丈夫だと思うか、ということなのだ。
言葉を慎重に選び答えなければと思った。
パリ行きが瑠璃の願いであることはかなり前から知っていた。今までさして苦労せずとも優秀な成績を修めてきた瑠璃が、突然受験のためにと猛勉強を始めたのが昨年の春だった。
長年仕えてきた主（あるじ）の意見は尊重したい。だが、邸の主人の言うこ

とも無視はできない。板ばさみの状態で重松は冷静に考えゆっくりと答えた。

「わたくしが思う限り、ご勉学に励まれるお嬢さまの姿勢は結構かと思います。ただ、やはりおひとりで暮らしたことなど、今まで邸を出られたことがありませんので…その辺りは心配でございます。しかし、世間のことを知るには良い機会だと思います」

反対とも賛成ともとれる言葉を聡一朗に返した。それを聞いた主人は足を組みなおし、再び考える素振りを見せた。重松は何も言わずじっと主人を見つめる。

「…そうか」

しばらくしてから力ない声が聞こえた。いつでも自信に満ちていて周りの意見など聞き入れない主人の姿はここにはなかった。あるのはただ、娘を思うひとりの父親の姿。

黙って待っていたが思ったような返事は聞かされず、「下がっていい」と言われた。重松は静かに扉を出て第一邸宅を後にした。

廊下は静けさに包まれていた。時間的に考えると邸の住人は寝静まるころだ。もうほとんどの使用人たちが別邸に戻っている。灯りの少なくなった廊下を歩き階段を降りようとしたとき、人影を感じて振り返った。

「これはこれは、重松君。聡一朗様に呼ばれてわざわざご苦労だったね」

白髪の老人は他でもない、第一邸宅の執事統括である永瀬だった。重松がこのような時間帯に歩いている理由は知っているようだった。彼だけは主人が寝室に入ってから戻るのだろう。

「いえ、これも務めですから」

そう言って軽く一礼して背中を向けた。

「…君もなかなか苦労するね、お嬢さまの子守りも大変だ。まぁ、それも君の運命かな」

背後から意味深な台詞を投げかけたが、当の重松は大して気にも

とめず無言で頭だけ下げ出て行った。

後日、重松は再び第一邸宅に呼ばれた。

しかも今度は瑠璃と一緒に、である。おそらくパリ留学の如何を伝えるためである。瑠璃にとっては久しぶりの父との対面であった。

「…今日は呼びだてたのは他でもない、瑠璃の留学のことについてだ」

集められたのは第一邸宅でも一番広いリビングだった。珍しく邸の人間が全員集められている。永瀬をはじめとする執事たちも顔をそろえていた。

「――――四月には瑠璃にパリへ出発してもらう。住居だがパリ郊外にある別荘を改築したのでそこに住むよう手配してある。向こうでも使用人を用意しているが、こちらから何人かの使用人と…重松に同行してもらう。以上だ」

主人が言い終わると、室内はざわついていた。ただ、重松と永瀬だけが黙って聞いていた。

ふたりは昨晩主人に呼ばれ、決定事項を伝えていた。瑠璃に反論は許されない、まだ監視下に置いておきたい父親の精一杯の足掻きだった。

重松は前もってこのことを言うべきか悩んだが、主人の言い付けに逆らうことはしなかった。

「…わかりました」

ざわつく室内の中で静かに言葉を発したのは、意外にも瑠璃だった。重松は先に言おうとしていたことを彼女の口から聞き、多少驚きを隠せなかった。慌てて言葉を繋ぐ。

「かしこまりました。お嬢さまのことはこの重松が責任を持ってお預かりいたします。どうかご安心ください」

そう言って深々と頭を下げた。

こうして重松はパリでの執務が始まったのである。

だが…

瑠璃は相変わらず朝は苦手、言葉遣いもいっこうに直らない始末で手を焼いていた。世界は広がったものの彼女が「大人」になるまでにはもうしばらく時間がかかりそうだ。

温かい春の日差しが照らす窓辺で、今日も溜息が零れる重松であった。

【番外編】　（二）蒼い海の見える丘

窓の外に広がる世界はどこまでも青一色。水平線に見える海も空も、エメラルドグリーンにスカイブルー。聞こえてくるのは遠くのほうで鳴くカモメの声と波の音。静かで世界から切り離されたような錯覚すら憶える。

乾いた風が青年の黒髪を揺らしていた。バルコニーで何をするわけでもなく、本を片手にぼんやりと風景を眺めている。久しぶりの休暇を堪能していた。

「何、ぼんやりしているの？」

不意に後ろから抱きつかれ振り返る。黒いロングヘアーが太陽の光に反射してキラキラと輝き、その声と共に青年を包み込んでいた。

「…柚莉亜（ゆりあ）」

真横にある顔は悪びれた様子もなく、少女のような微笑でこちらを見ていた。小さく溜息を洩らすと「びっくりした？」とはしゃいで見せた。その声すら柔らかく、優しい歌声のようだ。

「――――びっくりさせないでよ」

内心では嬉しかったが、それを表面に出すことはせずに微笑み返した。首に絡まる細い腕をつかみ、軽い彼女を膝の上に乗せる。動くたびに揺れる髪とスカートの裾がなぜか心地良い。

「崇臣（たかおみ）、重くないの？」

膝の上で彼女は首を傾げながら聞いてみた。それに対して「重いわけないだろ」と髪を撫でながら愛しそうにその顔を見つめた。

大学生になって二度目の夏休み。崇臣は婚約者である柚莉亜のいるニースの別荘地に来ていた。昨年は一度も日本に帰っていないため今年は少しだけでもと考えたが、そう歓迎してもらえるわけでもないため先延ばしにした。

「――ニューヨークの暮らしはどう？」
膝から降りた彼女はそのまま隣に腰かけ、ふたりで海を見るような格好になる。その話し声以外、何も聞こえないほど空気は澄んでいた。
「大学の授業はなかなか興味深くておもしろいし…お義父さまの仕事の見学とか、関連会社への出席とかさせてもらって有意義に過ごしてるよ」
「そう、それはよかったわ」

崇臣は高等部を卒業した後、ニューヨークへと留学した。
当初、彼の頭に「留学」という文字がまったくなかったわけではないが、かなり曖昧なものだった。多くの生徒が進むように大学部へと進学し、そこからでも遅くはないと考えていた。
多くを考えられるほど大人にはなっていなかったのだが、そんな彼を突き動かす出来事が高等部3年のときに起こった。そう、暁のパリ編入だ。
たとえ本人の意思ではないとしても、その事実は崇臣に多くの動揺を与えた。自分がいかに囲いの中で何も考えずに安全な暮らしをしているか、痛感させられた。
無理もない、楠城（くすのき）財閥は旧・華族の出身で、代々日本経済に貢献してきた。そんな中でなに不自由なく育った彼はまだ外の世界を知らなかったのだ。

「――それにしても、崇臣が留学するって聞いたときは驚いたわ。てっきり大学部へ進むものだと思っていたもの。ちょっと昔のあなたじゃ、考えられないわね？」
「…そうかもね。自分でも結構驚いてるよ」
本心だった。
婚約者は国内きっての資産家・二階堂（にかいどう）グループの一人娘だ。もちろん自分が跡取りとして迎えられたものだと自覚している。そして、

その才能の片鱗が見えるからこそ候補に上がったのだということも。
その期待に応えるためには、いつまでも小さな世界に閉じこもっていることはできないだろうと考えていた。いつか世界に飛び出してより多くの人間に認めてもらうよう、行動しなければならなかった。
そんなとき、暁のことがきっかけで決断したのだった。
「――――きっと、暁の影響だよ」
不意に友人の顔を思い出して可笑しかった。彼もまたモデルをしながらパリの大学に通っている。意外にも経済学部へ行っていると聞かされて驚いた。

「暁には会ってるの？　昂は？　みんな元気かしら？」
「そう思うなら会いに行けばいいのに」
「私が動くと大変なの、知っているでしょ？」
わかっていながら言った言葉だった。
柚莉亜は立場上、国外（ニース）に行こうとすると彼女に会いたい輩がここぞとばかりに予定を詰める。日本の生家に戻ることひとつとっても、政財界の面々が自由にさせてくれないのだ。
そのため、今は継母と一緒に大学に通える範囲であるこの場所に住んでいる。継母といえどグループの役員なので、彼女を取り込もうとする被害は及ばない。
「暁にはここへ来る前にパリへ寄ったから、そのときに会ったよ。相変わらず忙しそうだったけどね。昂は休み度にニューヨークに来てくれてよく会ってるからね。ふたりとも元気だったよ」
「やっぱり、暁はあなたにとって良い影響だったわね。あのときはどうなることかと思ったけれど」
にっこりと微笑み昔のことを思い出すような素振りを見せた。崇臣には何のことを言っているのか見当がつかない。首を傾げるばかりだった。

「――あら？　憶えてない？　あなたたちが初めて顔を合わせたときのこと」
いつのことだったか、正確に思い出せない。
そもそも崇臣と暁は初等部1年のころからずっと同じクラスだった。だが、もともと人嫌いで自分の殻に閉じこもっていた彼は、暁がどのような存在だったか記憶があやふやだ。
「――中等部のころよ？　昂があなたたちを近づけようと必死になっていたの、憶えてない？」
「…あぁ、そういえば…」
中等部に進学してしばらく、僅かに心開いた昂とよく生徒会室へ足を運んでいた。方や生徒会役員だが、当の崇臣は特待生ということもあり時間を持て余し、ついていっていたのだ。もちろん、そこに当時はまだ憧れの存在であった柚莉亜がいたのだけれど。
そこでたまたま居合わせたのが暁だった。否、たまたまではない、昂の思惑だったのだが。
散々好き勝手なことを言って、顔を見るのも嫌だと思っていたのに、そんな暁に本心を見せていると気がつきいつの間にか3人で過ごすようになっていた。
「あなた、当時は本当に素直じゃなかったものね。でも良い相性だと思っていたから、仲良くなってくれて本当に嬉しかったわ。きっと、昂と私だけじゃ広い世界に連れ出せなかったと思うの。でも…もう大丈夫よね」
彼女がそのころから自分を思ってくれていたのかと思うと、正直照れくさかった。そして自分の幼稚さを痛感する。「人嫌い」ではなく「人が怖かった」のだと。
「…僕はまだまだ子供かな」
「そんなことないわ。ずいぶん大人になったわよ」
その言葉を素直に受け取った。
以前の崇臣なら留学先も彼女のいるニースにしていたかもしれない。しかしそんなことをしなかったのは少しでも彼女を守れるよう

な人間になりたかったからだ。だからあえて別々の生活を選んだ。
ニューヨークとニース、一年のうちに数回会う婚約者。今はそれだけで十分だった。恋愛だけに浸っている時間はないのだ。
今まで知らないことが多すぎて、急に開けた世界ではいくら時間があっても足りないくらいだった。吸収することが精一杯で他のことにまで頭が回らない。

「…柚莉亜、結婚までまだまだ時間がかかると思うけど…待っててね」
彼女は真剣な表情を見て、ふふふと笑い答えた。
「急に何を言い出すのかと思えば…何年でも待つわよ。人生は長いんですもの、そう慌てることはないわ」
そう、急ぐことはない。
人にはそれぞれペースというものがあるのだ。崇臣は「そうだね」と頷き再び海に視線を移した。青かった海がほんのり赤みを帯びている。ふと見ると、いつの間にか太陽が傾いている。
「――少し冷えてきたわ。中に入りましょう？」
そう言って背もたれにかけていたストールを肩にかけ立ち上がった。
テーブルの上のグラスに太陽の光が反射して光っている。中の氷が溶けてカランっと音を立てた。扉の前で再度名前を呼ばれ、彼は赤く燃える夕陽を背に歩き出した。

【番外編】　（三）紅い街に流れる音色

カフェテリアを囲む木々はすっかり秋色に染まっていた。落ちた葉で街路樹や中庭の一面は絨毯を引いたように紅く、乾いた風が吹くたびカサカサと音を立てた。

外のテラス席で珈琲を飲むには少し肌寒い。だが、日差しが照らす時間帯は心地よい風を運んでいた。最近では滅多に来ないが、久しぶりにひとりで過ごす青年がいた。

そう、ひとりの予定だった。

「ねぇ、どこにも行かないの？」

青年の前で派手にメイクした女性が、暇を持て余すように何度も鏡を見ながら聞いてきた。特にメイクを直すわけでもない、珍しく読書にふける彼のことを見ているのは退屈で、かといって他にすることもないためだ。

目の前の青年はやや大袈裟にも見えるほどの溜息をついて、首を振って見せた。

「…美沙都…別に俺じゃなくても、遊んでくれる人はいるだろ？」

年上に向かっていってる台詞には聞こえなかった。まるで幼児をなだめるような口調で追い払おうとしたが効果はなかったようだ。

「いやよ、今日は昂がいいの」

相変わらずのわがままっぷりである。

美沙都（みさと）はこう見えて資産家の子女である。子供のころから蝶よ華よと大切に育てられてきた。そのため思うようにならないことが気に入らない、言い方を替えれば「自分勝手」なのである。

元々交友関係が派手な彼女は、確かに遊び相手にはさほど困っていなかった。大学にも家の名目上通っているだけで、あと何年かすればどこからか縁談話が舞い込んでくるはずである。

それに彼氏のひとりやふたり、作ろうと思えば簡単にできるはず

だと誰もが思っていた。

「今日はどこにも行くつもりはない。いやなら他当たってくれ」

「…じゃあ、ここにいるわ」

「好きにしろ」

「好きにするわよ」

昂（スバル）はもう一度溜息をついて、彼女から視線を外した。

身近な人間がこぞって海外へ留学したのは二年も前の話だ。暁は高等部三年の秋に、崇臣は高等部卒業後だ。三人での行動は意外にも一目置かれていたようで、ひとりになってから気軽に声をかけてくる連中は少なかった。八方美人が災いしたのか、心許せる人間はいなかった。

いろんな意味で、一番親友が少なかったのは、他でもない昂だったのかもしれない。

大学部で軽い口調で話せるのは、意外にも美沙都くらいだった。と、いっても相手も気分屋だ、振り回されることのほうが多かった。これまで彼女の傍にいた人間に軽く同情しながらも、本心で拒んだことはない。

「――最近、つまらないわね。暁も崇もいないし…おもしろいこともないしね」

直す必要のないメイクを触りながら、鏡に向かって呟いた。

「もうすぐ卒業だろ？　いい加減、落ち着けよ。そろそろ縁談とか来るだろ？」

こちらも読んでいる本から視線を外すことなく答えた。

「どうかしらね？　縁談は…まだ来ないかもね。うちの親、あたしには何も期待してないのよ。それに、まだ学生が気楽でいいから残るつもりよ」

その言葉を聞いた昂は反射的に顔が上がる。思ってみなかった意外な台詞を聞かされた。

「…はぁ！？　残るって？」
「えぇ、大学院に進むつもりよ。親もあっさり了承済みだし、ほんと厄介者扱いよ」
言葉の意味とはうらはらに、軽く笑いながら答えた。
美沙都には兄がふたりいる。もちろん後継者は長男が引き受けるだろう。次男も未だ大学院生だが将来有望らしい。本来、美沙都のような立場なら政略結婚とも言われかねない縁談が持ち込まれるはずだが、印象が悪いのか、出来が悪いのか、話を詰めようとすると流れてしまうのである。
「意外だな、てっきりさっさと卒業して嫁に行くのかと思ってたよ」
「いまどき政略結婚なんて古いわ、あたしはまっぴらごめんよ。自分の人生は自分で決めるわ。それに、あたしがいなくなったら昂は淋しいでしょ？」
どこまでが本気か冗談か、わからない表情だった。何もかも見抜いたような大人の顔を見せることもあれば、少女のような無邪気さも見せる。昂は「さみしくない」と短く言って、再び目を逸らした。

「…やっぱり、まだあのコのこと思ってるの？」
先ほどまでの軽い口調は消えていた。
「なんのことだ？」
美沙都の言いたいことはわかっていた。だが、今さら聞かれると思っていなかったし、すでに「過去のこと」として彼の中では消化済みだった。
「とぼけても無駄よ、あたし知ってたんだから。昂がずっとあの瑠璃ってコのこと好きだって。でないとあんなに生徒会のコネ、フル活用しないわよね。それなのにさっさと暁に渡しちゃってバカなんだから」
最後のほうはいつもの口調に戻っていた。しかも「バカ」をわざわざ強調するような言い方をしたのだった。昂は不意に疑問に思ったことを口にした。

「お前、まだ暁のこと諦めてないのか？」
彼女にとっては意外な質問だったのか、真顔の昂を見てあははと笑い出した。よほど可笑しかったのか珍しく声を上げて笑っている。あっけにとられながら見ていると涙を拭きながら昂を見た。
「急に何聞くのかと思ったら…そんなわけないでしょ。もう過去のことよ、それに暁のことはそんなんじゃないわ。当時はきっとあのコに執着してただけなのよ…で、話逸らさないで。昂はどうなの？」
確かに昂は子供のころから瑠璃の傍にいて妹のように接してきた。それが恋心なのだと思い込み、勢いで告白まがいの言葉を口にした。
だが美沙都の言うように、過ぎてしまえばそれが恋だったのかどうかはわからない。人の気持ちは手に取るようにわかるのに自分自身の気持ちには疎かったのだ。
「…もう、過去のことだ」
それだけは本心だった。

美沙都が立ち上がろうとして、テーブルに置いてあった化粧ポーチを落とした。カランカランと音を立てて中身が落ちていく。いくつかのメイク道具と一緒に運転免許証がすべり落ちた。
とっさに拾い上げた昂は一瞬動きが止まった。
「あぁ、ありがと。じゃあ、あたしそろそろ行くわね」
彼の手からさっと取り上げた美沙都は、ポーチに入れ乱暴にかばんへと押し込んだ。立ち去ろうとする彼女の細い腕を思わずつかんだ。
「待てよ」
引き止められると思っていなかった美沙都は驚いた表情で黙って昂のことを見ている。
「――――どこ、行きたい？」
「…いいの？」
昂が「いいよ」と頷くと、途端に満面の笑みを浮かべて座りなおした。そして一方的に行きたい場所や食べたいものなど話し始めた。

おそらくまわりから見れば恋人同士の会話に聞こえるだろう。だが彼はまだ自分の取った行動の意味を、自分でもわからないでいた。

手にした運転免許証に記された彼女の誕生日、それが今日。

それを知ったとき、頭よりも先に手が出ていたのだ。彼女に恋をしているのかもしれない、でも言葉にすることはなかった。まだ自覚がないだけだったのかもしれない。

「昂、行くわよ」

そう言ってはしゃぐ彼女は手を引いた。

並んで歩くふたりの距離を詰めるように冷たい風が通り抜ける。

そして、その風に乗ってどこからかギターの音色が響いていた。夜のイルミネーションが点灯を始めていた。

【番外編】　（四）白い雪に願いを

十二月だというのに、珍しく都心に雪が降った。

ニ年目の結婚記念日を祝う若い夫婦は幸せに満ちていた。産まれた娘は春に一歳になり今が一番可愛いときだ。丸いケーキと夕食の買い物を持って妻は玄関の扉を開けた。

「おかえり、美桜。寒かったでしょ」

廊下には彼女の母が待っていた。重そうな荷物を半分引き受けるとリビングへ入る扉を開けた。瞬間、暖かい空気が頬に当たる。ちらつく雪のせいではなく下がった気温のせいで体は冷たくなっていた。

「急に雪だもん、ビックリしちゃった」

大き目の荷物を床に降ろすとソファに腰かけた。大きく伸びをすると床に座っている小さな娘がまねをする仕草を見せた。まだ何を喋っているのかはっきりとは聞き取れない。

美桜（みお）はその光景を微笑ましく見つめながら愛しい我が子を抱きしめた。

彼女は高等部ニ年のときに妊娠が発覚、そのことを理由に退学をしていた。だが、両親はきちんと学校を卒業させてやりたいと公立高校への編入手続きを済ませた。子供が産まれるまで休学扱いにしてもらい、大事を取ってニ学期から登校したのである。

単位が足らずニ年のニ学期から再出発した美桜は、もう間もなく卒業を迎える。以前通っていた学園の同級生とは一年遅れだ。子育てをしながら学校へ通う生活は予想以上に大変で、両親の協力を得て結婚後も赤嶺の家で一家三人世話になっていた。

父親は「赤嶺クリニック」という病院の院長兼経営者だ。さほど大きな病院ではないが経営状態は悪くなかった。母親は専業主婦で時間はいくらでも余っていた。そんな家庭事情が後押しし、美桜が

学校へ行っているときはほとんど母親が娘の面倒を見ていた。

「…ねぇ、美桜。やっぱり考え直してくれない？」

夕食の準備をしながら母は美桜の背後に話しかけた。

「またその話？　もう、お父さんも良いって言ってくれたじゃない。別にもう二度と会えなくなるわけじゃないんだから…引っ越すっていってもすぐそこよ」

何度も繰り返される要求にややうんざりしていた。

いつまでも両親に甘えているのは悪いと言い出しのは夫・達哉（たつや）ではなく美桜のほうだった。

高校を卒業すれば娘・葵（あおい）の子育てに専念したいと言い出した。達哉のほうはというと一介のモデルに過ぎなかったが、最近はテレビなどの出演もあり収入はそこそこ安定していた。

たったひとりの娘だ、寂しいという気持ちはわかる。「出て行く必要はない」と言い張る母に対して、いくらか譲歩した結果「近くに住む」という結論に至ったのだ。

もう引越し先は決まっている。年明けの落ち着いたころに住み始める予定だ。

「今日、達哉さんは早く帰って来れるの？」

「そう遅くはならないみたい」

先ほどメールが届いていた。撮影が予定通り進まず少し遅れているようだが、そうかからないだろうと書かれていた。できれば今日だけは早く帰ってきて欲しい、そう願っていた。

この日は二年目の結婚記念日だった。妊娠がわかり安定期に入ってから結婚式を挙げようと決めたので、正式に言えば「結婚式記念日」になる。入籍したのは妊娠発覚直後だからだ。

入籍したころはつわりがひどく、あまり良い思い出がない。だからふたりで今日という日を記念日にした。

結婚式の日のことはいまでも鮮明に憶えていた。美桜の体調を気

にするあまり段取りを忘れる達哉の姿に笑っていた。そして、指輪交換のときに「順番が逆になっちゃったけどよろしくね」と言われた。挙式の途中にも関わらず美桜は声を上げて笑い出したのだった。
　そんなふたりを見て式に参列した人も笑っていた。こんなにたくさんの人に祝福されて幸せ者だと実感した。もうあれからニ年も経つのかと思うと、月日が流れるのは早い。

「「ただいま」」
　玄関で男性の声がハモっていた。父親と達哉の声だ。
「おかえりなさい、寒かったでしょ？」
　出迎えた美桜はふたりのコートとかばんを受け取りリビングへと入っていた。ふたり揃って帰ってくるのは珍しいと思っていると、撮影現場が病院の近くだったため帰りに寄ったのだと聞かされた。
　美桜と母で用意した食事を囲み、ニ年目の幸せを祝った。家族に包まれこれ以上ない幸福な時間が過ぎていった。ケーキを食べるころには外は暗闇に包まれていた。

「…美桜」
　夜更けになり、寝室でふたりきりになったとき達哉に呼び止められた。振り返り傍に行くと小さな箱を手渡された。開けなくてもそれが何かはわかる。
　ゆっくりとリボンを解くと中には花の形をしたピアスがキラキラと輝いていた。
「達哉…ありがと」
　そう言った彼女を強く抱きしめた。お互いの愛情を確認するかのように唇を何度も重ね合った。寝室の灯りを小さくすると外の景色が目に入った。
「…雪だわ」
　暗闇に小さな光が落ちているように見えた。小さな輝きはやがて地面に辿り着き儚くも脆く消え去る。それでも次から次へと舞うこ

とをやめない。
「これからもずっと、ずっと一緒にいような」
美桜は小さく頷いただけで何も言葉にはしなかった。ただ、窓の外の景色をじっと見つめ静かに瞳を閉じた。そして、舞い落ちる白い雪に永遠を誓った。

だが、彼女は後に思いもしなかった試練を受けることになる。それはまた別の物語で。

―END―

【番外編】　（四）白い雪に願いを（後書き）

最後までご愛読いただき、ありがとうございました。
「放課後」はこれにて完結となります。
次回作はおそらく美桜の物語になると思います。興味のある方は覗いてみてください。
遅筆にお付き合いいただきありがとうございました。（平伏）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2498i/

放課後

2010年10月8日11時44分発行